

324
391



始



324-391

ベル
ナ
ア
ド
及
其
時
代

著原ズートス、スエ、ルーア士博學神

譯助之勤田池

代時其及ドアナルベ

會協文興教督基



『ベルナード傳』は、基督教興文協會の發行する所に係る。

本協會の事業は、下文に定むる如し、曰く、『基督教興文協會の事業は、日本の基督教徒及び未だ基督教を信せざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及び弘布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッシヨンの同盟を代表せるが故に、公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は、必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。』

一、原著は博士ストーズ氏が數年前プリンストン其他の大學に於てなしたるベルナード傳の通俗講演である。本書の特色は史的背景の豊富なる點に存し、カロロ大帝の偉業、法王グレゴリー七世の大志、暗黒時代の背後を照せる敬虔なる婦人の光輝、歐洲全土を捲込みたる十字軍の旋風等、假りに獵史一遍の目もて讀過してだに多大の利益が得らるる。

二、ベルナードは中世紀の圃に生じたる基督の美果である、其生息したる空氣は既に中古基督教の精粹に匂ひ神秘的色彩を帯び。加ふるに彼は天稟の神秘家であつて、直感の大なる世界を有し、彼の原動力は其世界から流れ出た。試に中世紀の果苑を逍遙し、暫くクレールヴォーの客となれ、恐らくは歸るを忘れしむるものがあらう。

三、然れども彼は隱遁的神秘家ではなかつた。國家及び教

會の大事には、病弱な身を忘れて、或は自ら陣頭に立ち、或は書簡を飛して奮戦した。今日残存する數百の書簡は、上王侯より下野人に及び、其内容は有ゆる種類に亘ると云ふ。常に公事に注意し、公人として生活したるの一事が、彼をして神秘家の通弊より免れしめた所であつた。

四、彼は柔和忍辱の人なれども、罪惡の前には基督の權威を以て臨んだ。歩むべき道を履まずんば、王侯と雖ども彼の目には兒童に等しかつた。人をして其罪惡を自覺せしめ、翻然悔悟せしむるは、傳道者終世の難事である。彼は此難事を避けなかつた。當時の歐羅巴は、亦能く彼の道德的權威に畏服した。敢て現代に向て問ふ。道德的權威は果して畏服するに足らざるか、將た畏服すべき道德的權威存せざるか。

五、彼の人物と信仰とは、古今の共有物である。法然、親

鸞、日蓮を解するの日本は、聖ベルナアドをも解すべきである。余輩は我同胞の靈性に、多大の望を囑し、敢て此書を紹介す。

大正三年三月

池田勤之助識す

ベルナアド及其時代目次

第一章	第十世紀。不振の極度、恐怖の時代……………	一
第二章	第十一世紀。復興生活、多望の時代……………	三〇
第三章	クレールヴォオーのベルナアド、其個人的特色……………	六九
第四章	同 其修道院生活……………	一一〇
第五章	神學者としてのベルナアド……………	一七二
第六章	説教者としてのベルナアド……………	二一六
第七章	アベラアドとの論争……………	二四九
第八章	ベルナアドと歐羅巴の公事……………	二七九

ベルナアド及其時代

神學博士 アール エス ストーズ原著

池田勤之助譯

第一章

第十世紀。不振の極度、恐怖の時代。

クレールヴオーの修道院長ベルナアドは古今に稀なる偉人物であつた、彼の死後二十餘年、法王アレキサンドル三世の時、彼は羅馬教會の聖列に加へられた。トマスアキナスは彼の神聖を黄金の花瓶に比し、彼の美德を眞珠の玉に比べた。ボナヴェンチュラは、彼には高尚なる雄辯の技能はないが、彼の氣風は聖徒の智慧に充ち、其言語は記憶すべく、其生涯は永遠の模範たるべしと言ひ。パロニスは、神の眞正なる使徒、全教會、別けても佛蘭西教會の柱石又光輝であると言つた、博學敬虔のマピロンは、彼の文書を聖書に亞ぐの價値ありとなした。ボシユエーは教會歴々の教父等と同じく、教

義の證人に算へ、草昧不文の真中に使徒として預言者として地上の天使として顯はれたりとなした。ルーテルは神を畏れ神を敬ふ僧徒の随一となし、取り別けて深き愛を寄せた。ドルト會議の有名な書記ダニエルヘインシウスは、彼の『默想録』を、樂園の流れ、魂の不死藥、天使の食物、敬虔の精髓と稱し、嚴正なるカルツインは誤謬を非難すること峻烈明瞭にして、時代に卓越せる敬虔なる記者と記した。ヴォルテールすら、事局一度紛擾を醸すや、彼の嚴格なる宗教生活を以て之が調停に當れば、他に超えて力あり、彼の人格的尊重は、實效上官權を凌駕したりと言つた。ギボンに對して根深き偏見を懐けるにも拘はらず、彼を描いては、口に於て筆に於て行に於て、嶄然として同時代に一頭地を抽く所の『歐羅巴の預言者』であるとなした。

彼は紀元一〇九一年に生れた。ノルマン人が英國を征服してより廿五年、ヒルデブランドが法王の位に登り、グレゴリー七世と稱してより十八年、フィリップ第一世の、佛蘭西に於る殆ど半世紀に亘れる永き統治の真中であつた。彼が世に出でし時代は、カロロ大帝の時代を隔つる三百年であり。此三百年は教會も國家も恐怖、暗黒、失望の雲の中に殆ど包圍せられし期間であつた。然れども西に於ては、遠き世紀の影響が未だ全く失せなかつた。其は將に暮れんとする年代に、優良狀態の爲に何等かの盡力の致さるべかりしを助言した。ベルナードの時代には、前世紀迄は見るとの出來なかつた或道徳的生活があり、打てば響く道徳的反應があつた。併し此時代には大なる危難と多くの耻辱とがあつ

て、恐らく基督教國の開闢以來、是れ程天才、道徳、敬神の產物たる偉大なる奉仕を渴望したる時代はあるまい。此時代の性質を知らんとするには、先づ數世紀の以前に溯らなければならぬ。サラセン人が西班牙の大部分と南佛蘭西とを征服し、大陸での勝利を目懸けて、中央歐羅巴に頽雪を打つて來たのは、紀元七三二年の初秋であつたが、ボアクチエ、ツール間の野戦に於て脆くもカロロ、マルテルの爲に塵殺せられた。其時代はギボンの言つた通り、『ヂブラルタルの巖頭からロアの岸邊に至る、一千哩に延長した勝ち誇れる戦列』も、『壘壁の如き胸と鐵の如き腕』とによつて遂に打ち破られた。爾來亞細亞と亞弗利加とが歐羅巴を服従せしめ、亞刺比亞人がチュートン及ブリトンの主人公となるといふ恐るべき威嚇が無くなつた。

カロロの孫カロロ大帝は、其祖父よりも偉大なる者なりしが、第九世紀の初つ方、是れも文明の救助及進歩と密接の關係ある、彼以上の大事業を成した。彼は五十有餘回の大征戰に於て以太利の大部分を降し殆どカラブリアに達し、ビレニーとエブロの間に、西班牙をサラセン人の手より救ひ出し、パワリアとサクソンとを従がへ、歐羅巴に於ける當時の所謂基督教を遵奉せしめ、帝國をボヘミア及びカリンチアにまで擴張し、スラブと戦ひ、舊バンノニアに於て兇暴なるアワールを撃退した。北海よりチベルに至るドナウの鐵門から、大西洋に至る中央歐羅巴及び西方歐羅巴に領土の保全を與へた。紀元八〇〇年のクリスマスに、羅馬なる聖ペテロ宮殿に於て、西羅馬帝國の皇帝と宣言せられエーラ。

シヤベルに歸還した時は、彼の領土は實際古西羅馬帝國の三分の二を包括した。其中には古帝國が降すことの出来なかつたゼルマン諸國をも含有し、緊密なる統一と領土擴張との上に彼が揮ひし支配力は、古今に匹儔を見ざる所であつた。

彼の遠征は掠奪一遍の者ではなく、永久的効果を志したる組織立つた作戦であつた。或程度迄は希望通りに成就した。縱令ギゾーの言へる如く、彼に對抗せる争亂は廣大且つ不屈にして、一方に抑ふれば他方に揚るといふ有様であつたにしろ、帝國の瓦解後に萌起したる總ての國家は、カロー大帝の戦争によりて建設せられたことは事實である。此等の戦争に由らざれば、南蠻北狄の痕を留むる戰場から、此等の國家が興起して確立不動のものとなることは出来なかつた。此の點から見て『如何なる帝王も如何なる人類も、彼に勝りて世界の文明に貢獻したものは無い』と、件の史家の言つた所に同意せざるを得ない。

然し乍ら、軍事はカロー大帝の窮極の目的ではない。其は社會的政治的領分に於ける更に重要な事業の補助たるに過ぎなかつた。彼は國民議會を召集した。特に推舉せらるる者殆ど四十四、此議會に於て、各地よりの報告を受け、其氣風、需用、各自の時宜を調査し、數多の行政規則を含める所謂『勅令』が發布せられた。ギボンの説くが如く其は系統を成したる者にあらすして、寧ろ百般の事物に關する類聚であつた。例へば彼が冷笑的に述べし如く、『濫費の矯正、風俗の改良、御料地の經濟、御料禽

の飼育、其鶏卵の販賣に至る迄』も含んだ。然れど是は其統治の下に來れる各種の人民の各種の法律を修正調査し、各地方に均霑する有益な規則を布かんと試みたるものであつた。其中には基督教的的と認めらるるものもある。大帝の精神は戦争よりも寧ろ此等に顯はれた。

一千五十個條をギゾーは左の如く計算して、其八十七個條は道德上の法規で、二百七十三條は政治、一百三十は刑事、一百十は民事、八十五は宗教、三百五十は寺院、七十三は家事、十二は臨時の規則であると云つた。

彼は勅選委員を遍く領内に派遣し、躬自ら南船北馬巡遊倦む時がなかつた。彼は宗教々師の誠意を保護し、人民の上に宗教の好結果を保全せんとし、宗教其者を保護監督した。彼は教會の使用にとて改正經話を發行した。彼は宗教會議の議長となり協議を指導した。又修道院長、監督となり、時として法王にすら教書を與へた。宗教制度を監督し、其風習に牽制を加へた。一方に於ては銳意工業を奨勵し商業を擴張せんと企てた、又自ら大土木工事を設計した。橋梁の架設、ラインとドナウを連結する運河の開鑿の如きである。勅令は何れも彼及び時代の特性を表示する、或者は旅客を款待するの義務に力を込めて居る。或者は臣民に命じて、帝王は萬事を親裁すると難ければ、神の教規によりて自ら治め、神に奉仕をなすべしといふて居る。或者は疑はしき聖徒の崇拜を禁じ、或者は祈禱は必ずしも希伯來、拉丁、希臘の三國語の一を以てせねばならぬ譯はない。神は如何なる國語を以ても、

正當に拜し得べく、正しき事物を求むれば何人の差別なく聽かれるものであると告示してある。或者は説教の庶民に了解し得る種類の者たるべきを命令してある。

大帝は様々の方法で學問の利益を増進した。晩學の爲め、帝自ら自在に筆を執ることは出来なかつたが、而も拉丁語を読み又話し、希臘語を理解したことは疑はれぬ。又常に名文を尊重した。修道院又は中央寺院に連絡して數多の學校を設けた。自由民の子と農僕の子との區別を立つる勿れと命じた。初めて普通語の文典を作らしめ、初めて日耳曼の武勳を歌へる日耳曼歌集を作らしめた。建築及音樂の技術を開拓した。彼の爲に、アンブロース聖歌に代つてグレゴリー聖歌が中央歐羅巴に誘入せられた。彼の盡力により、殊に其音樂學校によりて諸教會が立派な教會聖歌を有するに至つた。

其周圍に秀才碩學を集めて、自ら教を受け又國民の精神を豊富ならしめんと試みた。アルクインを英國から、ビザのペテロと監督パウルスとを伊太利から招き、之に他の數人を加へ、所謂「宮中の學校」を組織し、時代の學術を網羅し自ら一族を率ゐて學生となつた。彼は普く圖書を蒐集した。其寫本の如き數に於ては限りはあるが、高價貴重のものであつた。彼は修辭學、數學、天文學を學んだ。聖經に通じアウガスチンの書を好み、殊に其「神の都城」を愛讀した。佛蘭西語の發達は彼の時代に大なる刺戟を與へた。帝に對して冷淡不親切なギボンすら、「學問の獎勵は帝の品性の上に純正佳快の光を投ず」と言はざるを得なかつた。

此偉人から深い印象を受けたものは佛蘭西や日耳曼のみでない、宛らモンブランが群峯の上に聳ゆるが如く、彼が大陸の上に雄飛した事は、英國にも大なる影響を與へた。彼の名前と組合はされた形容詞のマグヌスといふ語が、彼の死後遠くスカンヂナヴィアに於て、屢々個人的稱呼に使用せられたのも、多分彼の記念の爲であつたらう。西方の人ではない、東方も亦彼を尊敬した。阿弗利加から印度に至る亞細亞の王ハルン、アル、ラシドは、帝都バグダッドから使節を遣はして、絹布の天幕、象、水時計、聖墓の鍵を贈つた。紀元八一四年に、エー・ラ・シヤベルの己が打建てし殿堂に、死しても玉座を占め袈衣を装ひて埋葬せられし時に、歐羅巴は王中の王と彼を崇めた。ブライイスが帝の即位の日から近世史が始まると言つたのは、重要な意味に於て眞實である。若し適當なる後繼者があつたならば如何なる意味に於ても眞實であつたであらう。

カロロ大帝の子ルイは、父の在世中に其手より王冠を受け、名目上同一の帝國を領有した。然れど是迄其無限の空間を満たしたる横溢の元氣が撤去せらるゝや、組織に忽ち貧血を起した。ルイの子等の間に激争が起り、分割の盟約が行はれたことは人の知る通りである。傍系親族の失敗から、其世紀の末にカロロ大帝の鳥羽繪に過ぎざるカロロ肥滿の手に、帝國は名目上幾分かの回復を見た。然れど怯懦魯鈍の故を以て紀元八八七年に廢せられ、叛徒に食を乞ひ零丁落魄の中に此世を去り、修道院の墓所に葬られて以來、七十五年を経て日耳曼王オットの畫策と武勇とによりて再現せらるゝ迄統一帝國の

面影は全く消え失せて了まつた。

帝國の瓦解と共に、歐洲大部分の領土保全と政治的統一とを終始志となしたるカロロ大帝の宏大量明なる政策は眞價を世に顯はした。帝國は個人的野心のみに基いたのではなかつたといふことが明瞭になつた。時代の必要に生きた關係を有して居たことが知られた。一朝藩屏の顛覆となるや、恐るべき軍勢が決河の勢で侵入して來た。暫らく保全せられし諸般の利害關係は危難の中に暴露せられ、蠻風が各方面から文明の萌芽を吹き暴した。學問は最早撫養せられず、發芽しかつた高等文藝は霜に傷める花の如くなつた。大帝の編纂したる日耳曼歌集すら不虔として後繼者に破毀せられた。普通教育の爲に打建てし諸學校は宮中の學校と同じく殆ど壊滅に歸した。敵兵は分散微弱の國家を蹂躪した。阿弗利加サラセン人は地中海の沿岸を掠奪し、アール及びマルセイユを掠め、コルシカ及びサルデニアを荒らし、歐洲に於ける傳道の搖籃たるモント、カツシノの修道院を灰にした。オスチア、シヴィータ、ヴェキアを焼き羅馬を脅かした。レオ四世は聖ペテロ宮殿附近を防禦せんが爲め九世紀の中間に城壁を築いた。チベルの河口にも城砦を築造し海賊船隊の進路を防止した。

同時にノルマンがスカンデナヴィアの海岸から卒然として起り、深く佛蘭西國內に入り、ラインを溯ぼりて日耳曼を侵し、隨所に掠奪と殺戮とを縱まゝにした。第九、十兩世紀中に、佛蘭西に於ける殆ど五十回のノルマン入寇が歴史に記載せられた。殘忍飽くなき劫掠者はボルドーを残りなく掠めた。

其管區が荒野に歸したる爲め大監督はブルジウに遷された。彼等は亦アミエン、カンブレ、ルーアン、リエージュに來り、オルラン、ソール、ツトルニス、ナントに來り、トレヴィヅ、コロン、ボンに來り、馬をエーの廊堂に繋いだ。シャートルは其有に歸した。ネーブルス、シシリ及び希臘の海岸は飽くなき貪慾に見舞はれた。カロロ肥滿の死に先立ちて彼等はバリを圍んだ。巨額の償金と上部セリヌ及びブルグンデーに至る通行權とを與へて漸く慘禍を免れ、殆ど一世紀の間佛蘭西は彼等の荒らすが儘であつた。遂に紀元九一一年に富有なるノルマンデ州の割讓を得て漸く入寇の手を緩むるに至つた。『仁慈なる主よ、ノルマンの狂暴から救ひ給へ』とは北歐羅巴に於ける日々の祈禱であつた。之と相似たる祈禱が南方に於ては匈牙利人の致命箭に對して捧げられた。

匈牙利人の劫掠は、ノルマンのよりも恐ろしかつた。スキチア及びフィン出身の人種から成立てる北民は、獸皮の天幕、裘衣、刺面、恐るべき韃靼弓を以て知られ。彼等は東方から移住し來り、前にカロロ大帝の從へたバンノニアに亂入し、九世紀の末葉には、其所から旋風の如く歐洲を掃蕩した。ギボンは言つた。『スキチア人の速力は一日に五十哩の巡行を物ともせぬ程であつた。……亦セント、ガルのヘルツェト修道院と北海岸頭のブレイメン市とを、殆ど同時に灰にするやうな敵に對しては、如何なる距離と雖も安全であることは出來ぬ』と。此に於て歐羅巴には城壁を繞らせる都邑が漸く増加した。佛蘭西の南部には其恐ろしい洪水が攪まゝに氾濫した。ピレニを横ざり西班牙に亂入した

伊太利は掃蕩せられた。王都バヴィアは焼かれ住民は屠殺せられた。カラブリアの邊境に迄荒廢が廣がつた。蕃寇の目には一滴の涙なく誰人たるに容赦はない。彼等は人間を食ふとさへ風聞せられた。殆ど四十年間、斯る殺戮的入寇が打ち續いた。彼文明の敵も遂にヘンリー及びオットの下に、數回の大會戰に打破られ、爾來漸く靜止的生活に沈澱した。然れど十世紀の末に至る迄、匈牙利人の恐怖は、一日として歐羅巴人の心から去らなかつた。

其間にスラヴのウエンドは帝國に對する從屬を拒んで其邊疆を脅かした。野蠻の復歸は歐洲全土に社會的政治的萎縮を來した。人口は減少した。農耕は忽かせにせられ森林は廣がつた、アキテーヌは狼の荒らす所となつた。ミシウルの言へる如く、群鹿は宛ら佛蘭西を占領した有様で至る所一般の無政府状態が近づいた。ブライスの言は簡にして明である。『誰も其共同的防禦又は廣き組織を考へざりき、強者は城郭を築き、弱者は之が隸屬たるか、若くは僧帽の下に避難した。……世界的基督教帝國の大きな夢は、總ての勢力の孤立、敵對、地方的分權の中に消滅した、云々』と。

斯る間に封建制度は不可抗的の勢を以て發達した。其倫理的起原は、君と臣との間に公然又は隱然取結ばれた共同防禦の軍事契約である。小さな自由地又は私有地は、戰時保護の約束の下に通例其附近の權門の封建的所有權に歸した。兵役の條件の下に地方の統治者とせられて重なる貴族等が、帝王より下賜せられし俸祿は、所謂封土にして世襲であつた。頭領は即ち公侯伯爵であつた。一面に於て

は領土貴族が是から生じ、一面に於ては世襲の軍務貴族が起つた。上流の教役者すら封建貴族となつたものが少なくなかつた。彼等は通例其臣下を出陣せしむるか、若くは代金を以て義務を果たしたれども實戦にも従事した。前に自由農民たりし者は水の低きに就くが如く貴族の奴隸となるに至つた。最早帝王の隻影もなくなつた。法律といふ法律は地方的になつた。前には帝王が王土の生ける法律であつた。今は侯伯が地方的君主となり、封建的王權に對する服從は無ばかりであつた。公共的法律の組織を企つるものはなかつた。處が計畫は紀元一二三年猶太人の高利に關するルイ八世の勅令に始めて顯はれた。其れ迄、實際は數年の後に至る迄、封建的小作人は領土の同意なくして一般的法律の束縛を受くることが無かつた。而して地方的條例のみは續々發布せられた。

勿論此制度から得る所が無いではない。尊敬すべき徳性が涵養された。長上に對する忠節、習慣に對する誠實、最近の官府に對する義務の念の如きである。又地方的利害に重きを置くによりて、後の文明を生み出したる勢力及風潮の分配を普ねからしめた。然れど一面に於て人の眼界を私人の安全、近隣の防禦の上に狹占せしめて、益々團結を疎隔ならしめた。又物質的勢力のみを推重した。シスモンズの言へる如く、貴族黨は『間斷なく身體を働かすが故に、精神の修養は不可能となつた。而して考へざるを以て義務と信するに至つた』。天才や品性は勢力の要件では無くて土地の所有權のみが權力の本となつた。而も其所有權は門地か或は逞ましい筋肉の力に由つて得られるので、私黨が頻々と

して行はれた。亂暴狼籍は踵を接して生じた。有力な都會に集合して壕を廻らすことの外、商業は此制度の下に枯死した。商業の庇蔭に頼れる普通工業、技術及び文化は拘束禁断せられた。公共心に類する何者も勿論不可能であつた。愛國心は夢にも知られなかつた。此制度は公共的改進には根本的に無益であつた。若し成就せられたものがあつたとすれば、其は破壊し難く拘束し切れない人性の勢力に由るのであつた。カロー大帝の計畫が畫餅に歸した時、無道壓抑の此制度が野蠻邪教に對する歐羅巴の唯一の堡砦であつたといふ事實は、時代の恐るべき害惡危難を證明して餘りある。岩頭に巍峨たる城郭、之を廻れる塹壕、之に架けたる橋梁、怒るが如き堡壘、嚇すが如き旌旗、收斂に甘んじ小康を此所に求めて、城郭を取巻きし民窟の一群、此等は社會の殘忍と野心とを證明せずして、却て社會の恐怖を證明する。帝國の防備が撤去せられたれば、劍戟甲冑の人に固められた孤城が之に代るの外はない。此他僧帽の下に集るにあらざれば避難所は地を拂つて無くなつた。

歐羅巴の政治的、軍事的制度の變化と同時に、宗教界にも恐るべき状態が生じた。世界的帝國は之に伴ふ世界的宗教を有し、其確實なる保護者、有益なる監督者たるべき望があつた。カロー大帝の勅令は其統治の下に来れる各種の人民の各種の規定、習慣を修正増補し之に秩序と調和とを與へたるのみならず、亦基督教教師の實際的及び教理的指導に兼ねて、其永續と擁護をも熟圖したのである。例へば其條項の中には新自由民の精神的教團に入り、奴隸の修道院に入るの件、教師の戰爭に加はるの件、

僧院に避難せる死刑囚の處分、目に見ゆる働きの價值、教會の眞正の裝飾たる風俗の矯正、呪符、占考の禁、託宣に聖書を探るの禁等が含まれる。此勅令の下に始めて十分の一の納付が勵行せられた。爲めに基督教々師に對する扶助金は國家の擔保するところとなつた。帝は又教役者を精神的義務に制限せしめ、俗僧を修道院生活に入らしめ、修道院を自己の權威に屬せんと欲した。帝は往々教會宗規の些事を取極め、亦教理的信仰の大問題にも掛つた。

予が日曜及祭日の用に供する説教とは、聖書の研究を教役者に勸むる序文を附したる教會用の經話書とを調製配附したるは、宗教の事に如何計り注意を拂ひしかを證明する。彼は異端説アダブシアニズムに對し、其首魁ウルピリーの監督フェリクスの改悔の爲に一方ならず關與した。教會の肖像使用に關する良案をも含める著名な『カローリナ』書は彼の撰文にあらずとするも彼の立案である。彼は精靈が父と子とが二重に出づるといふニカヤ信條の拉丁文に於ける挿句を既にアタナシウス信條にも見えるやうに矢張り挿入しやうといふ説を取つた。而して彼の治世中紀元八〇九年にエーララシヤベルの宗教會議を開き、此問題を提出して變更を決議した。それから法王ルイ三世に使者を遣はして是認を求めた。挿句の表示する教理は正確なれども、信條の形式を變更するは暫く利便でないといふのが慎重なる法王の答であつた。前には紀元七九四年フランクフォルトの會議の際に法王の使節の出席せるに拘はらず自ら議長となつた。而して佛蘭西及日耳曼諸教會を代表せる是の會議が第二ニカヤ會議の教

會を非とせし時。結論の無疵を主張せる論文起草せしめ、且つ法王アドリアンに逼りて之を是認し又勸行せしめた。法王就中ルイに送りし彼の書簡は、威嚴に於て其ト風に立つを決して自覺せざる者の如くであつた。彼は王者の自由をもて、教訓を與へ勸告を與へ時としては譴責を與へた。

後繼者たる其子ルイは、權力が手中に在りし間は、教役者の管理に歩を進めた。彼は監督の馬を有し武器拍車を蓄へ寶石を鏤たる帯、綺羅錦繡を用ふるを業とした。彼は鏡意修道院を改良せんと欲し、宗規生活の規程一束を發布し、其の謄本を作らしめ、委員を撰定して權威をもて遍ねく僧院を訪はしめ、尼院と修道院とに其規程を嚴守せしめた。

此所には帝王と法王、世俗的權威と宗教的權威との間に何等の衝突が生じなかつた。兩者は同格者として、圓滑な協力もて、並行線上に動いた。西方の基督教團には唯一つの宗教あるのみ、法王は其首領である。唯一つの政治あるのみ、受膏者たる帝王は其主宰である。法王は靈的事物に關し帝王は世俗的事物に關して地方に於ける神の代理である。世俗的事物は靈的事物程重大ならざれば時代の進歩につれ、皇帝の下風に立つべきは勿論豫期することが出来た。然れどカロロ大帝の時代に於ては、毫も斯る區別が生じなかつた。彼が法王より皇帝の聖別を受けたるは、彼の言へる如く、豫期せざる所なれば、之を交附せる法王に帝冠の故の從屬を毫も含まなかつた。而して其子ルイは彼の命によりて宛ら斯る從屬の念を態と否定するが如く手づから王冠を着けた。歴然たる僧的性質が彼の戴冠式に

て事實皇帝に分與せられた。法王が精神的皇帝たるが如く、彼は世俗的法王となつた。兩者の合意的行動が基督教團の安全に缺く可らざる者であつた。カロロ大帝及其子の時代に於ては、帝國が宗教を保護し擴張し精淨ならしめた。此所に其力の本源と證據があつた。僧徒及主教を取締り、法王に勸告を與ふると同時に、一方に於て帝國の勝利は自折不撓の宣教的熱心に、大なる機會を與へ、基督教をウイテキンド、メクスレを始めとして、スラヴ及ビアワールのシナガンに至る迄も宣傳した。總ての基督教は、帝國の元首に對して、教會の擁護者、公同信仰の保護者として忠誠を致さねばならぬ。而して教會の統一は國家の統一に其對稱を見出した。

仍こで神聖羅馬帝國と稱へられた、其が持續せし間、基督教は安全と勢力と卓越とを得た。東方に於けるモハメッド教軌近の興起と、其東方基督教國に加へたる壓迫とは、西方の統轄的宗教を、凸彫の如く人心に映寫せしめた。最後の分裂漸く成熟せんとする希臘教會との分離は、羅馬に首領を戴ける教會を益々獨斷的又自覺的ならしめた。又法王が皇帝を力とせし間、皇帝は教會を保護し擴張するを自己の使命と感じたのは當然であつた。而して兩者の協力的活動は、基督教の寤寐共に忘れざる、大目的の進歩に確實な保證を與へた。

帝國は滅亡した。天下麻の如く亂れ始めた、其れと共に一層寒心すべき宗教界の攻爭衰頹が始まつた、何れか因、何れか果たるとは姑く措いて、畏るべき結果は否認することが出来ない。之を眼中に置か

されば、歐羅巴の道德生活が、何の點迄墮落したかが了解されぬ。醜惡奇怪の歴史を讀まば昔帝國軍勢の前の亂散霧消した異教徒氣質が、歐洲の天地に濃密に舞ひ戻つて、靈的生活の源を賊するの感を引き起さしめた。社會の大氣が迷信に曇つたところではなく、有ゆる毒氣を蒸發した。山林原野僻邑のみが例外であつた。基督教國の中心たる羅馬自身に於て、チベリウス若くはカリグラ時代の忌はしき惡風が破竹の勢で再起した。其腐敗の程度は殆ど信じられない程であつた、羅馬教會の史家は呆然として其前に佇立する『娼婦の治世』といふ名稱は、其一斑を寫し得て眞に逼つて居る。ミルマンの説明は穩健にして簡明である。『以太利の無政府は法王の墮落を來らした。法王の墮落は以太利の無政府思想を増長した。……如何なる事變、貪婪、犯罪、隱謀、暗殺が法王の廢立を決したか、歐羅巴は全然不案内であつた』。博學細心のマピロンですら、十世紀の法王の多數は『監獄の如く生活した』といはんよりは、寧ろ怪物の如く若くは野獸の如く生活した』と告白せざるを得なかつた。

紀元九〇四年にセルギウス三世が、法王の椅子を強奪するに先立ち、十三年間に九人の法王があつた。其一人は死後に墳墓を發掘せられ、衣を剝がれ、手足を切斷せられてチペル河に投せられた。彼の爲に聖職に任せられし者は、任命の仕直しを強ひられた。其後繼者は醜行の故に聖職より黜けられたること既に二回、法王に擧げられ僅に二週にして死んだ。其後繼者は獄中にて絞殺せられた。

其後の法王等は皆數ヶ月の壽命であつた、レオ五世は二ヶ月にも満たずして紀元九〇三年に己が長

の一人に獄に投せられた。取つて代りし其長老も一年に達せずして順次放逐の耻辱を受けた。セルギウスの下に名高き淫婦の三幅對が勢力を揮ふに至つた。即ち母のテオドラ、其女のテオドラ同じくマロズア、何れも母に劣らぬ淫婦にして、法王職は其後數年の間彼等の左右する所となつた。或は之を其情夫に與へ或は之を己が私生兒に與へた。當時の事情を細叙するは難い、一二の實例も其一斑を示すには足りる。長女テオドラの寵倖の一人は、引續いてボロニアの監督及ラウエンナの大監督に任せられた。彼女の盡力で紀元九一四年ジョン十世と號して法王の位に上つた彼は才幹、武勇を有する法王であつた。自ら軍を麾いてサラセンに當り好結果を得た。然れど十四年の後に、リウトブランドが『酩酊せるヴァイナス』と名づけしマロズアが、ラテラン宮殿に彼を不意打ちして獄に投じ懸て枕をもて窒息せしめた。程無く、法王セルギウスの落胤と噂せられし彼女の子ジョン十一世が法王の位に登りたれど、久しからずして亦、彼女の正出の爲めに獄に投せられ。憔悴枯槁四年の後に死んだ。遂に此淫婦の孫ジョン十二世が、紀元九五六年に十九歳で法王の位に登つた。彼に關する記事は、一として紙面の穢れ耳の障りならざるはない、同世教役者の證言によれば、彼は法王の宮殿を淫猥の一大學校に變じた、遠國より聖彼得の墳墓に詣つる篤信の婦人達は法の凌辱を恐れて來なくなつた。日耳曼、トスカナ、佛蘭西、ロンバルドの主教等を主として、之に附近の監督司宰等を加へたる羅馬の大會は、教役者からも平信徒からも、彼に反對の證言を受けた。其の枚擧せる非難の個條は、聖職賣買

残忍、放蕩、無頼、殺人、偽誓、神物褻瀆、血族相姦、惡魔に敬禮を表しての飲食、骸子の幸運を靈
 教の神に祈願せる等であつた。件の法王は之に答へて、若し他の法王を選ば、悉く破門すべしと全能
 の神に誓つた。之に對する大會の復答は、ユダも信仰を有せし限り、使徒として繋ぎ又解くの權を有
 したけれど、貪婪な兇手となつた以上は、彼自身の外、誰人をも繋ぎ又解くことが出来ぬ。唯彼を吊
 した索の結び目を結び得るのみであつた。

此醜陋なる不埒者は一般の取沙汰通り、不義の密會所に於て本夫の刃に斬られ聖禮典をも受けずに
 死んだ。後繼者等は、彼の不善に肩を並ぶる程ではないが、何れも法王職の面汚しであつた。ベネヂク
 ト五世は貶黜流竄せられた。ベネヂクト六世は獄中に絞殺せられた、篡奪者ボニフスは法王の位を
 占めて幾許もなきに、聖彼得の聖器を携へ、遁竄の已むなきに至つた。然れど彼に代りて位に就ける
 ベネヂクト七世を殺さんとして立戻り、聖アンゼロ城に於て之を毒殺若くは餓死せしめた。遂にベネヂ
 クト九世が十一世紀の初め、紀元一〇三三年に厚賂の力で十二歳にして位に登つた。其後繼者の一人
 たる、ヴクトル三世が彼を誘りて、之を記すに戰慄を催す醜陋憎むべき生活をなせりと公言した。
 當時ラウールグラベルとは、彼が耻辱の登位陋劣の行爲、醜穢退位を記すに赤面した。一般の嫌惡は
 遂に抑へ難き動亂を醸して法王の椅子より一旦逐出され其後兇行によりて、之を回復し、己が位に代れ
 る監督を破門し、遂には其職を賣渡した。グレゴリー六世が其顯職を買ひ取つた。羅馬に二人の法王

が一時に君臨した場合があつた。何れも皇帝ヘンリー三世に廢せられ、一人の後繼者が擧げられた。
 オルレアンの監督が紀元九九一年ランスの會議に於て、ジョン十二世の犯罪を述べたる後に、「人事
 並びに神事につき一切の智識を有せざる斯かる怪物野獸に對して、智德世に勝れたる無數の司祭が服
 従せねばならぬと云ふことが動かすべからざる定則であるか。紫衣金冠赫灼として至上の位に坐す
 る者を何の爲にか重んずる。彼にして若し聖を缺き智識に誇らんか、是れ神の宮に坐する基督の敵で
 ある。彼にして若し聖の智識をも示さざらんか、彫像に等しく偶像に等しい、此人に就きて助言を求
 むるは大理石の石塊に事を諮るに等しい」と言つたのは、以上略叙せるが如き法王等の事であつた。首
 領の甚しき不善から自づと混亂、墮落が普く教會に廣がつた。羅馬は敗殘、悲惨の陸土の中で最惡
 最邪の都會となつた。何等公共的事業は行はれず、技術的活動は地を拂ひ、古羅馬の記念物は惜氣も
 なく破壊せられた。其所から有毒又忍ぶに餘る暗黒を放射した。昔埃及の河を撲ちしとき、魚類は血
 の浪に溺れ、蛙之より出でて家屋、寢室に入りたるが如く、大陸の教化を雙肩に擔へる羅馬から、今
 や總ての精神的惡疫が簇生した。有ゆる犯罪に塗れたプロヴェンスのヒューの如き人々が、監督職の
 大なる位地を私生兒等に與へた。貴族等は寺院及監督職を其幼兒等に授けた。僅か五歳の幼童が、ラ
 ンスの大監督とせられ、十歳にして賣收によりナルボンの監督に擧げられたのがある。斯る場合に
 は父たる者、其子の名に於て書翰を記し管區を支配し、高の知れない報酬を握つた。會堂は婚姻の持

參品として息女等に譲られた。聖職賣買は教會の通弊であつた。羅馬では何事も金次第といふことは歐羅巴の通感であつた。然も之を擯斥しつゝ、彼等も其例に倣つた。後にヒルデブランドが羅馬城門外なる聖保羅、大修道院の主事に任せられし時、堂廊に家畜の繋がるゝを見、食堂に於て淫婦等に侍づかせらるゝ僧徒を見出した。僞誓は刑罰を免れん爲に殆ど普通であつた。飲酒の風が恐るべき度に於て修道院内に行はれ飲酒よりも更に恐しき惡習が普通であつた。盜賊は社會の大部分の商賣であつた。刑盜が大道を横行した。基督者がサラセンの奴隸市場に賣却せられた。學藝は魔術に近き者と見做された。教會の懺悔は何んな罪惡をも償ふことが出来た。

破廉耻無作法の禮拜は恐らく此時代に始まつた、パリに於ける一例の如きもの。即ち泥醉せる司祭等一人の背理の監督といふを擧げし、革を焚きて香となし、猥褻の歌をうたひ、祭壇の上で食事をするのである。次にエヴローに於けるが如きもの、即ち司祭等白衣を前後に着け、相互の目に符を投ずるのである。又ストルトが其『遊戯及娛樂』の中に記せるが如き者。——愚人等中央寺院の神聖羅馬法王に屬する各愚人等の監督若くは大監督が選舉さる、其監督の爲に可笑しき服裝をなしたる僞教役者等が備へられ雜多の群衆を取巻く。儀式の進行する間、猥褻な歌を合唱し、食ひ且つ飲み、祭壇の上で骰子を弄する。果ては香爐に汚物を容れ、僞監督若くは法王の祝禱を受くるのである。斯る不埒な聖拜は、通例クリスマス若くは其間際に起つたが、往々他の祭日にも行はれた。其れが聖ステパノ

の日に其顔が天使の顔の如くに輝いた彼「殉教者の貴と軍隊」を天の御國に導ける彼の記念に舉行せられし時に、『驢馬の續唱』と稱する狂曲が、祭典の一部として歌はれた。即ち二重の聲樂隊によりて歌はれ、其折返しに驢馬の嘶の音を入れるのである。斯る種類の習慣は臨時に起つたのではない、又卒然社會の趣向に投じ、教會の中に歡迎せられたのでもない。此等は如上の時代の自然の結果と思はれる。

邪教の神の力を信ずるの風が基督教的歐羅巴に再現した、十一世紀の中葉に斯ういふ物語が信じられて居つた。一人の羅馬青年貴族が、戲場に於て遊戯に取懸らうとして結婚指環を其指から外づし之をヴィナス像の指に着けた、すると青銅が忽ち掌を閉ぢて魔術僧の援助を仰ぐ迄は放さなかつた。僧は厚き賄賂に誘はれて徒黨の惡鬼に通り、女神から指環を回復せしめたといふのである。法王の一人で且つ法王中でも錚々たる佛蘭西出身の最初の法王シルヴェステル二世は、魔術者であつたと一般に信せられた。彼は代數學及幾何學の研究者であつた。サラセンの學者連と此等に關して交通をなし、又自らコルドヴァに於て學習した。彼は幾何學上の簡單な論文を書いた。其れには塔の高さを投影によつて測り、井戸の深さを測量し、其他簡單な諸問題の解法を含む。彼はラシスに器械時計及び水力オルガンを構造した。論理、音樂、天文學を講義した。拉丁の詩人及諷刺家を解釋した、斯る異體な難解の智識を得んが爲に、彼は自己を惡鬼に賣り渡したといふ事、及び彼の死に於て惡鬼が勝利を得た

といふ事が容易に信せられて居つた。マルメスベリのウイリアムは、シルヴェステルの死の翌世紀に彼に關する風聞を特に叙述した。彼は鳥の飛行及び轉聲は何を預示するかをサラセンより學んだ。彼は地獄から死者の靈を呼び出す術を得た。彼は羅馬に於て地下の黄金の宮殿を發見した。其所には黄金の王、黄金の女皇、黄金の兵士があつて、黄金の骰子を弄する。其宮殿の奥に紅玉があつて光を發し、暗黒を變じて白晝となすなど云ふ、又彼は常に眞理を告ぐる彫像の頭を造つたが、其答の一を誤解せば死を來らすべしと。斯る物語が永く命脈を保ち廣く流布したるを見れば、其時代の暗黒と衰頹の如何に甚だしかりしかが知られる。

實にカロロ大帝其後の二世紀に於ける、心的蒙昧、道德的紊亂、僧俗の間に眞實高尚な宗教生活の全滅せる、之を陳べ得て實に過ぐるの恐は更にない。モンタランベルが、五世紀につきて記せし所は、丁度此時代に適用が出来る、「混亂、腐敗、失望、及び死に至る所にあつた。社會的解體は宛ら完成した。權威、道德、技術、科學、宗教、自らも、回復し難き零落の宣告を受けたと想像してもよい」と、紀元九六二年に日耳曼のオットが皇帝の位に上りし時は、多少の希望が再現した。然れど其再建したる局部的帝國は自然カロロ大帝の、潤大確乎の勢力を有たず蕩々たる時世の流れを阻むには足らなかつた。ヒューガープが紀元九八七年に佛蘭西の帝位に就いた。彼と共に佛國は世に名高くなり始めた。然れど彼の勢力は檢束されて居つた。一世紀半に亘れる彼の後繼者と同轍であつた。僧侶の不善

世俗的貴族の壓制、一般の迷信及兇暴に斷然たる制遏を施すことが出来なかつた。佛蘭西領内に其頃四千の王國と五十五個の封土が存在した。各要塞は附屬の獄舎と、間々拷問室密獄とを有した。訴ふべき一の最上權なく親しく冤を伸ぶべき場所がない。而して學術を具へたる監督敬虔なる僧徒、敬神なる尼僧、神を畏る、模範的の信徒が殊に日耳曼に在りはしたが、教會は概して野心家、貪夫、蕩兒に満足を與ふる爲の場所となり果てた、パロニウスの『編年史』を熟讀せられた方は、羅馬教會の神權に關する驚くべき議論を記憶せらるゝであらう。其議論は、斯る怖るべき罪惡が數代の間教會の首位を占め、拭ふべからる汚穢を興へたにも拘はらず、教會は依然として繼續し依然として擴張したといふ事實を根據としたのである。斯くて優良なる状態の復歸を見んことは、最早一縷の望もなくなつた。

丁度此時代即ち第十世紀の末、第十一世の初めに世の終り切迫せりととの一大恐慌が歐洲の天地を動かした。其形跡は昔の證書に判然と印せらる。第十世紀の長い悲劇が此に名狀し難き絶頂に達した。世を審判せんが爲に、天に於て主の近い顯現が有るべしとの期待は、勿論黙示録二十章の解釋に基いたものであつた。其にはサタン千年の間束縛せられ、其後暫時の間釋放され、諸國民を惑はし之を集めて教會に逆らはしむ、其後白き大なる寶位と之に坐する者とを見るべく、地と天と其前を通るべしと記されてある。此事が主の降誕から一千年の終りに起るものと期待せられた。其時期の切迫する

と共に、其期待は益々廣まり、遂に一般的恐慌を來した。世の終りは夙に紀元九〇九年に會議で公布せられた。ウキルツブルグの會議に於て熱心に宣言せられた。此世紀の末葉にはバリで公然と説教せられた。時代の大勢は此觀念を歓迎し、いたく其終結を豫期する風があつた社會の狀態は宛から墮落天使の手足から、鐵鎖を振り落されたやうな感じを容易ならしめた。歐羅巴を荒らしたる耻辱と不善は、不滅の惡意、即ち神は久しく檢束し給ひしも、美妙なる理由から再び解放し給へる其惡意の所行であるとの感を容易ならしめた。是自然界の驚くべき異常な出來事が末世の感を一層深からしめ、且つ森羅萬象の、近き壞滅を預言するが如く見えた。信者等は宣告罪を受けし人の餘日幾許もなき所刑の日を迎ふる心的狀態に居たとは、シモンズの言である。家産の配慮も、將來の準備も念頭に無くなつた附記して曰く「殊に、少しも日の光を見まじき子孫等の利益の爲に、歴史又は年代記を記すは全然不合理となつた」。然れど後幾何もなく、ラウール、グラベルの如き、彼が目あたり見もし、又前人に聞きもしたことを書き留めたものもある。彼の記すところに據れば、紀元九八八年にオルレアンの一寺院に於て十字架上の基督の肖像が、其都會の上に落ち懸れる災難を知らせ、滂沱たる涕涙に濡るゝを見たり。其後幾何もなく同市に大火が發つて家屋も教會も烏有に歸した。之に似劣らぬ火災が、其後所々の都會、別けても羅馬に發つた。怖ろしい疫病が發生した。不可思議の火が夜中に四肢を焼き落した。無數の龍が空中に現はれ北より南へ飛び、其音響と、其閃光とは人をして戰慄せしめた。

ジョアニーの邊には、大小の石が雨と降つた。其の堆積は彼の執筆の當時尙存在した。奇異なる彗星が數週間引繼いで現はれた。夜は光芒天に漲ざれど、雞鳴と共に消え失するのである。怖ろしい飢饉が殆ど全羅馬帝國に襲來して五ヶ年間繼續した。聞くも怖ろしい、人肉を食ふの慘事が出現した。飢餓に狂亂して兒童は其母を食ひ母は其兒童を食つた。サラセンが再び西班牙に出現した。異端、伊太利を始めとして至る所に勃興した。斯る慘憺たる光景の中に在りて、悲痛、涕淚、歎息、哀哭の不運な目撃者であつた人々が、春夏秋冬の次序も地水火風の法則も、爲に際涯なき渾沌の中に葬むられんとし人類の滅絶眼前にありと信じたといへる彼の報導は誰人も首肯するであらう。

世界の滅亡を齎らさずして第十世紀は暮れたれど、同じ恐怖の期待は、幾分か緩和せられたるにせよ、全然は驅除せられなかつた。千年は基督降誕からでなく、御受難から計算せらるべきである。紀元一〇三三年が即ち終局の歲であるといふ恐怖が行はれた。其最終の歲に凄慘な前兆が天地に再現した。間斷なき降雨の故に、陸は洪水氾濫し、種を下すべき田圃が無くなつた。五行互に相闘ふが如く神より命せられて人類の驕傲を罰するが如くに見えた。之に接して前よりも怖ろしい饑饉が起つた。希臘、伊太利、佛蘭西、英國をも包括した。人類が土、雜草、樹の根、樹の皮、惡蟲、屍骸を食ふた人肉を食ふの風が前よりも廣く行はれた。兒童及成人が食用の爲に屠られた。人肉が殆ど公然市場に賣買された。死屍累々埋むることが出來ず、縦に群狼の腹を肥やした、夥だしい人數が、大溝渠の中

にごだ／＼と轉落した。人肉を食ふの蠻風は彼等には主の死も徒勞に過ぎざる墮落敗壞の人類の終局を示すかと思はれた。近親を野邊送りせる人々の中には、往々自らも墓中に投じて、堪へ難き生涯を即時に終へんとしたるものありといふは決して異しむに足らぬ。

其時代を回顧すれば、歐羅巴の大部分の人心は、半ば精神錯亂の状態であつたことは明白である。日常生活が奇異の出来事で填められた。妖怪が白晝に見はれ、奇怪な聲が空中に聞こえた。様々の怪譚が話頭に上つた。ラウル自らも見た如く、僧徒は悪鬼を見た。彼は其一つを次の如く特筆した。彼の寢臺の足下に隠れ侏儒を見た。細き頸、石炭の如く黒き目、狭き皺寄れる額、平たい鼻、脹れ上がった唇、鋭く光れる耳、汚れた剛い髪、犬の齒是れが大體の相貌である。其れが觸はると寢臺が揺れた。『汝の此所に留るも久しくない』といふを聞いた。斯る物懐き妄想は常に修道院に限られたのではない、オット大帝の軍勢が、カラブリアで太陽の光を失ふを見、驚破や審判來れりとして大恐慌を來した、オット三世が、カロロ大帝の墳墓を發かしめし時に、大帝彼に立現はれ、死の近づけるを彼に豫告したと傳へられた。ロベルト王、ブルグンデ一の寺院を圍めるとき、川から立上る霧を見て聖徒等の彼と戰はんとて現はるゝなりと思ひ、全軍慌しく逃走した。彼の最初の妻ベルタとの結婚は教會の非とせしところ、此女は鷲鳥の如き頸と頭とを有する怪物を産み落したと傳へられたる如何に詰まらぬ嘘らしき事も、一般に信じられないものはなかつた。巫術を信ずるの風が其時代に深く根を下

ろして、後世に至る迄容易に抜くことが出来なかつた。

審判の恐怖的期待が幾分か好き結果を與へたるは言ふを俟たない。人々は其仇敵と和睦するに至つた。一時的なれども廣く風俗の改良が行はれた多數の農僕は束縛を解かるゝに至つた。其束縛は天の火で間もなく解除さるべしと豫期されたのであつた。教會に對して土地財寶の夥だしい寄進があつた、其無害の効果は次の世紀に現はるゝに至つた。所謂神の休戦なるものは其時代に始まつた。水曜の晩から次の月曜の朝まで、暴力で何物も取ること能はず、又争闘に従事することを禁ずる。之を犯すものは死罪若くは流罪の刑に處せらる。其れが忽ち佛蘭西に擴張した。其遵守期間は様々に短縮され之に服従せざる人々の上に振り掛れる災難は、神の復讐を示すものと信せられた。是は平生生活の義務と快樂との爲に、毎週の一部を規則正しく區劃する上に功があつた。然れど概して末日のさびしい残忍な期待は、著しく不良の結果を與へた。其れが工業を停止し、商業の新計畫を鈍らし人をして自己及び眷族の利害に無頓着ならしめた。心意及品性の墮落を來らした、社會の有力の動機を萎縮せしめた多數を絶望的凶暴に走らしめた。基督の御受難からの千年も無事に満期となつた曉、基督教の全繼續に對する懷疑的行動は殆ど免れ難いところであつた。其所に至る迄には各種の國體が分裂し物質的精神的眞正の進歩は悉く不可能であつた。放縱の行先さが押し詰まつたので、人類の野鄙なる嗜慾が屢々新らしい勢で燃え上つた。末日の期待が、四十年間歐羅巴に齎らしたるは、束縛的で

あるのみならず毒惡破壊的のものであつた。

此物凄いバナラマの上にも、勿論多少の明るい影がなければならぬ。如何なる時代に於ける人類社會の忠實な繪畫も然らで無い者は無い。生及生命は滅絶して居なかつた。子の心、母の情は跡を絶たなかつた。此所や彼所に、楽しい夢、懐しい禮讓、美しい笑顔、嬉々たる笑聲が淹留した筈である。日は東に上り西に沈む一日として息むことなく、自然は人類に對する温和なる服務を易へなかつた家庭と教會とは縱令如何程生を失ひ如何種厭制でも、尙も繼續した。人類の感覺は死して居なかつた。其期待せる終局に、一點の恐れなく面を向け爲に現はれんとする寶位の四周の綠玉の如き虹霓を仰ぎ見たる人々があつた筈である。然れど此等は簡單、嚴重な歴史に、聊かの痕跡を留むるのみで、當時の社會の一般的繪畫は、暗黒と火に於てななければ、描くことが難いのである。其時代の彫像を見るに、ミシユルの訓したる如く、悲愁窘迫の相がある。宛ら時代の恐怖の故に柔軟な石の中に萎縮したかの如くである。トルセロ教會及其他の周壁に見るが如き峻酷、悽愴な切嵌細工も同じ相を呈する。神の御子がカルバリーで十字架に釘けられし以來、基督敎團の一般的暗黒及恐怖に於て、是れに勝る時代が決して出現したことはない、地は會つて十字架の下に震ひしが如く再び震ひ、天は往昔第六時より第九時に至る迄、エルサレムを掩ひしが如く、日蝕に於て自ら其面を覆ふやうに思はれた。福音は宛ら失敗したかの如く、教會は宛ら肉慾と血の謝肉祭の中に全然神的美徳を失つたかの如く、人

類の不善甚だしくして、此上堪へ忍ぶの餘地なきかの如く、遊星の歴史は世界的恐怖と死の中に特に終りを告げんとし、當に終りを告ぐべきであるかの如くに見えた。斯る極度の困苦と失望の後に、廣大な反動が接續したのでなければ、西方基督敎團の歴史は、直に終りを告げた筈である。吾等が次に試みんとする所は斯る反動の追跡である。又ベルナルの如き人の、高貴なる渴望と高尚なる勢力とに與へたる機會の追跡である。

第二章

第十一世紀、復興生活、多望の時代。

第十世紀及び第十一世紀の初めに、歐羅巴の頭上を掩ひ之を壓迫したる暗黒を出で、比較的自由的空氣に入つた、未だ甘心するに足らずとするも、さだかに胸の寛ぐを覺えた。即ち此に一點の光を認めたのである、此光は未だ呆々たるには至らなかつたが、要するに豫言的の太空中に漲るべきものである。即ち對抗的諸運動の起るあり、其齎すべき幸福に幾分の望を寄せしめ、又從來全く禁断せられたるの觀ある正當の希望に獎勵を與へた。然れども此に回想せんとする物語には、暗い影が無いと豫想し、赫々たる光輝が前の暗黒を驅逐すべしと期待してはならぬ。

第二の末日即ち紀元一〇三三年が未だ満期に至らざる時すら、此豫想は最初程人心を壓倒しなかつた。然れど憂懼は依然として失せたかつた。而して月と日は血に變り、諸の星は天より降り、大氣は基督の實位の威光にて輝き、地は溶けて煙散するかも知れぬといふ人心状態では、社會は堅固な基礎の上に確立することは出来なかつた。然るに歲月は無言の歩を運び、山々は其容を更めず、川々は其流れを易へず、天に格別の異象も顯はれざるに至つて、舊生命が其元氣を回復した。而して基督教

は再び更新強補の力を顯はし初めた。此世は血塗れの荒廢に委するに堪へぬ程、神慮に呎尺せる者であるといふことが自覺せられた。天使の讚美歌から始まりし世紀が、社會の難破の中に局を結ぶことは有り得難い。何時かは此世界は、天には榮光神にあり地には平和人にありとの讚美歌に一致するに至らねばならぬ。然れば此時以降、教會及び國家の施政を改め、此自若たる遊星と連綿之を領有する人類とは、一層適合したる者となさんといふ方へ、新しい刺戟が現はれ初めた。

帝國は實力よりは寧ろ名目ではあるが、日耳曼系に於て一部分再興せられた。十世紀の暮から十一世紀の中葉以後に至る迄のオット三世、ヘンリー二世、コンラバ二世、ヘンリー三世等の皇帝は概して政治的器能の君主であつた。紀元九九六年から紀元一〇三一年に至る迄はロベルド、ズエ、バイアスガ、佛蘭西の帝位に在つた。ミシユルは彼の淳樸なる心に於て、神の怒りを融和したるが如くであつた。神の平和彼に於て肉體をとりたればと言つた。其子ヘンリー一世、紀元一〇六〇年迄彼を嗣いで世を治めた、孫フイリブ一世は、紀元一一〇八年に至つた、此等諸王の勢力は偉大でなかつた。彼等は名目上の君主に過ぎなかつた。彼等の意見は私生涯に於ても公務に於ても、屢々妨げられ彼等の活動は區域に於ても効果に於ても制限せられた。然れど斯の如き長期連續の治世は、一般の人心に靜穩を與へ、少なくとも顯はれ初めし新勢力の祐助となつた。佛蘭西國民は絶えず勢力を増進した、都市は徐々に人口を増加し、重要な度を増加し、世界に於ける彼等の位地を自覺するに至つた。卑近の

物品より甲冑、美服、美器の類に至り、粗末な陶器類より毛氈、綴織、繡衣、及び莊麗なる教會器具、即ち祭壇、香爐、聖餐杯、聖骨匣、枝付燭臺等に至るまで工藝は復興し製造は擴張した。日用の什器は一層巧妙に作られた。商業は漸々過去の麻痺状態を脱し、相互關係の糸を以て諸團體を結合し初めた。

加之天候も又人々の勇氣回復につれて面目を一新せるが如くであつた。グラベルの記事に據れば、紀元一〇三三年以後は、兩歇み雲散じ晴朝の天再び現はれ、近邊曠野再び垂穂を見るに至り、穀粟、葡萄酒の珍らしい豊作あり、物價低落し、貧者は食を得るに至つた。佛蘭西語は此頃其實質上の形體を装ひ初めた。城郭、宮廷の用語となり、歐羅巴の主要言語の一となつた。十一世紀の中葉に、エドワードズエコンフエスルは之を英國に輸入し。紀元一〇六六年にウエストミンスターに於て戴冠せるノルマンダーのウヰリアム以後、久しい間英國内の法定語であつた。サラセン人の勢力は歐羅巴に於て、今は事實上敗られた。彼等は紀元一〇二二年に、サルヂニアから逐ひ出された。其世紀の後半にはシチリアに於てノルマン人に征服せられた。紀元一〇二六年から一〇七六年に至る五十年間に聖地參詣の催しが數度舉行された。其結果は智識の増進と思想の擴張を來らし、基督教國の風潮を幫助して一層快和健康の狀態に向はしめた、前回に於て、十世紀の法王が交々法王の位を汚せしことを説明した。長夜の眠りより醒めたる基督教國の嫌惡は、斯る法王に對して遂に勃發した。基督教信仰の

生残りし所にて、何れも皆、教會の廓清は一日も猶豫すべからざることを自覺した。紀元一〇三三年に、法王中の最惡最醜なるベネヂクト九世が位に上り、紀元一〇四八年其治世の終に至る迄、彼は一般的嫌惡に薪を添へた。彼が法王職の一代は、雷鳴はためく暗黒の時代から最後の怖ろしい電光を發射したるが如くであつた。彼の物語を知りし總ての人に、彼の名前は呪ふべきものであつた。十二歳にて位に登り、市民の暴舉に遇ひて二度首府より逐はれ、僧俗二方面から烈しき憎惡を受けて流竄せられ、遂に放蕩の自由を得んが爲め法王の位を賣つた。然るに其の退隱生活の醜行に満足を得兼ねて、再び羅馬に押し掛けた。羅馬では二人の法王が彼の後を競争して居つた。遂に其一人は毒殺せられ、他の一人は品性及び勢力の人であつた。ベネヂクトは、説得又は買收せられ僧庵に退いて其生を終へた。以太利民間の古き物語に彼の幽靈が驢馬の耳を有する熊の形にて現はれ、其怖ろしい姿の意味を問はれては『我生涯は律法も道理も度外視したるが故に、神と我不善もて其位を汚せし彼得とが我に人の像にはあらず此獸の像を採れと命じたまふ』と答へたと傳へらる。

ベネヂクト九世の忍ぶに餘る一代は、肉慾、聖職賣買、貪慾、二心をもつて、基督教國の耻辱を極限まで満たした。彼の後は引續いて善き法王が登位した。レオ九世は後に聖列に加へられた人である。彼の下に東西教會の分裂が、相互の呪逐を以て遂に完結した。ウイクトル二世彼はレオの始めし改革事業に數歩を進めた。又彼の下に神學上の論争が、重要事項を確定した。ツールのペレンガリウスを

服従せしめたるは其一例である。ステフエン九世、彼は聖職賣買に對し、僧職の不行跡に對して頗る嚴重であつた、ニコラス二世、彼はステフエンの計畫を續行した。彼は法王選舉を羅馬の高等教職の手中に收めて選舉に秩序を興ふた次にアレキサンドル二世となつた。彼は競争者と法王の椅子を争つた。奮闘最中に、ノルマンデーのウイリアムに英國の帝冠を授けた。彼は猶太人を保護して基督教徒の殘酷を免れしめた。彼は前に開始せられし改革手段を賛成し之を促進した。遂にヒルデブランドとなつた。彼の勢力は事實上、近時相繼げる法王等を掣肘した。紀元一〇七三年に、羅馬の教役者、貴族、長官、重立てる市民の衆望一致を以て、聖彼得の椅子に擧げられた。爾來グレゴリー七世の名稱の下に紀元一〇八五年彼の死に至る迄統轄した。

彼等は歴史上の一危機に到達した。暫らく歩を停め、正して觀察點を定めて、將に來らんとする激烈な紛紜と衝突とを觀測せしめよ。

帝國以後の歐羅巴は、偽計、暴虐、恐怖、掠奪、無法律、迷信の爲に、殆ど絶望状態に沈淪したるにも拘はらず、また優良状態到來の希望も存在した。カロロ大帝の花の時代は傳説に生殘つた。騒亂墮落の二百年が其後を襲へることは朦朧にも知られて居つた。以前の狀態に立戻るは不可能にあらずと、漠然ながら自覺せられて居つた。然れど舊帝國の大陸の統轄が望まれるやうな勢力は、文にせよ武にせよ一として歐羅巴に殘存しなかつた。當時出現したる王者又は王國には地方的統治以上を望

ひことが出来なかつた。各自は生活の爲に戦かひ、間斷なき闘争によりて其所有を維持するの已むなき状態であつた。此故に全地に通じて、承認せられ服従せらるゝ一權能が若し再びあり得べくんば、其は教會の權能のみであつた。世界的帝國は夢の如く消え失せられたと、世界的宗教は滅びなかつた。皇帝に昔ながらの大權を見ることは最早出来ないが、法王は眼前に存在して。此故に法王を擴大するは、明かに、歐羅巴の統一を回復する唯一の手腕であつた。往時教會と帝國とが協力して成就せし所を、今は教會の一人の手中に任された。分れ争ふ此世の權力は、今後は宗教的權力の下風に立たねばならぬ。

未だ不分明なれど現實的なる此時代風潮は、ヒルデブランドの登位から、ベルナルの誕生及其以後に至る時代を解釋するの鍵である、ヒルデブランドに無量の機會を興へたのは是であつた。其火花を散らせる闘争の中にも、大膽不敵の勇氣を支へたものは是であつた。十字軍といふ破天荒の運動を可能ならしめ、實際之を鼓吹したものは是であつた。我等が解釋せんとする大修道院長が無雙の行動に身を投じた時は、其は唯一層分明となつたのであつた。

當時の歐羅巴同様、我等の眼前にも、ヒルデブランドの古今無雙の偉大な或人は謎のやうなといふかも知れぬ姿が聳ゆる。彼を憎める同時代の人々にして彼は驕傲と呼ばれ、破壊的野心と稱へられ、虚偽、偽誓、異端、不信仰、魔術を行ひ、姦淫をなせる者と言はれた。彼の死後三百年の星霜を閱せ

る、現今の冷静な學者ですら、彼の氣風は倨傲、彼の才能は激烈又機巧、不利巧なる場合は其意思を曖昧欺瞞の語形に包みしが如しと認めざるを得なかつた。彼は英雄又は殉教者として心置きなく承認することは出来ぬ。其友ベテルダミアニが「聖サタン」と稱びたる反語が、動もすれば繰返され勝である。

然れどヒルデブランドは少くとも斯う言はれねばならぬ。彼を解して法王に選びたる人々の記せし如く、多學にして用意周到なる宗教的人物、苦難の日に強く、繁榮の日に嗜なみよく、身持ち正しく、慎み深く、眞面目で、客あしらひよく、幼少より十分の教育を受けたる正義の愛好者と。其上、彼の概念によれば、最高の目的が、常に彼の眼前にあつたと言はれねばならぬ、彼は神聖と觀じたる目的の爲に勞苦し、最後まで奮闘した。而して歐羅巴の進歩、幸福の爲に、廣く復興せられねばならぬ風潮に莫大の動力を與へた。

先見の明ある彼の目には、當時大陸の上に組織を備へたる二様の權力が存在すること、日を見るよりも明かであつた、一つは文及武的統治によりて代表せられる此世の權力、一は世界的教會の代表する精神的權力、前者は後者の下位に位し、其指導を受くべき者である。此世界の國家は何時も地方的であつた、教會は獨り世界的であつた。國家には他の同列あり、敵對あれど、靈的權力には同輩もなく、競争者もなく特立して居る。國家は一時の利害に着眼し而も其方法は粗にして盲、教會は専心

無窮の幸福を圖り、其智慧に過誤はない、國家組織は手近かの出來事を頼みとし、且つ貪婪、野心、自我にて形成せらるる、靈的組織は其御子を經て神から來り、神の御旨其中に留まる。地上の大帝國は滅亡することあり、人之をカロロ大帝に見る、教會は不變にして總てを包括する。地獄の門も之を併呑することは出來ぬ。此故に國家は普ねく教會の下風に立ち、徒屬附隨の役目を奉じ、公私共に一切の管理は此最上制度に屬せねばならぬ。基督敎國に於ける平和若くは道德的進歩の唯一の希望は、ヒルデブランドの見る所では、此豫言的最上理想を、屈せず撓まず、實行上の表示することであつた。

彼は其時代の立派な理想家にして、事務の範圍に於ては、無雙の超然主義者であつた。同時に目的の一轍と戦術の巧妙とは王輔、軍將と雖ども之に勝ることは出來なかつた。彼は神法學の地上に於ける代理者を以て自任した。彼は時代を己が有となし、大陸を己が舞臺となし、萬民を保護し、教化し、眞に統一するをもて己が使命とする一制度の權威ある首領を以て自任した。襟を正ふべき此役目を仕遂げん爲に、彼は聖靈の御旨を聲明したる教會の輿論によりて召され、爾來斯事に身命を捧げた。彼は娛樂を棄て、安逸を斥け、安全を度外視し、如何なる辛勞をも辭せずして、最高理想と信じ人類の利益と信せし所に献身した。

彼の行動の物語は、大方御存じであらう、卑賤の出、トスカナなる一小邑の大工の子であつて、ヒルデブランドといふ日耳曼の名稱は受洗の際に與へられ、以太利的發音でヘルレブランドに變形した。

此名は景慕者からは『生ける焰』と解釋され、疾視者からは『地獄の焼印』の意に解せられた。日耳曼的名稱は多分以太利、日耳曼兩血統の混合を表示するものと解せられた。其外別段の意味は無からうと思はれる。其出生の卑賤を以て其擧げられし高位と對照すれば、教會の民主主義を遺憾なく説明する、其はヴォルテールすら、認識賞讃せし所である、教會に何等の缺陷があらうとも、此道德的卓越の一事に於ては他の政治以上のものであつた。腕力よりも才能を重んじた。陣營に於て蔑視せらるべき道德的感性及勢力を尊敬した。又封建制度が土塊視したる、賤童にも機會を與へた。

惘然熱心のトスカナ兒童は勿論羅馬に送られた。アヴェンチン丘上の一修道院に教育を受け、青年に及びてブルグンディーなる富裕又其頃嚴重のクルニー大修道院の僧籍に加へられた。其所にて結ばれし若干の友垣は終生易らなかつた。彼は後年權力に據り華麗の中に在りても隠者の風習を持して變らず野菜のみ食したと見ゆる。快感に溺るゝを躊躇して菲及び葱を禁ずるに至つたと曾てペテルダヨアニに物語つた。

クルニーから羅馬へは、ベネチクト九世の在位中に一回往つたことがある。紀元一〇四九年に再びツールの監督ブルノーと同行し而も上り切りになつた。ブルノーはウオルムスの會議で法王に選ばれた。レオ九世とて名高いのは彼である。其相談相手のヒルデブランドは城門外なる聖保羅修道院の僧院長に任せられた。此建物は其中に漲れる不行跡と近隣の貴族等の横逆とにより當時衰微の淵に沈

み瓦解同然であつた。ヒロデブランドは、舊制を恢復して其嚴重なる宗規に歸らしめた。彼は歳入を増加せしめ又盜賊領主の爲に俗權に横領されたる固有の財産を數多取戻した。當時既に行政の手腕と衆を號令するの伎倆とを證明した。彼の燃ゆるが如き想像に、聖保羅自ら幻の中に立現はれ、意味有りげの態度もて古の基礎を匡復せんとする此難事業を獎勵したと思つた。僧徒は彼の不敵、專横の勢力に屈服した。而して彼には人の思想を察知する殆ど超自然的の力ありとなした。

レオ九世の死歿、後繼法王等の選定は大半ヒルデブランドの左右するところであつた。アレキサンドル二世が紀元一〇七三年四月廿一日に死するや、彼は未だ司祭の任職を経ざれども、其天才と精神とは、夙に羅馬の教職、市民等の認知する所なれば衆望一致で法王に擧げられた。六月迄延期して法王に聖別せられた。反對者は其遷延を全く僞善と推したれど、友人等は彼の慎重に歸した司祭に任せられて日尙淺ければ重大なる責任の前に敬畏に堪へざるものと解した。

彼は發程から二つの目的を懷いた。其一は教會の解放であつた。教會の權力が此世の權力以上に卓越せるは既定にして争ひ難き所須らく此利權を回收すべしと、又一は教會の道德的廓清であつた。須らく崇高仁慈の靈的生活に立戻るべしと。教理や外部の狀況に於ては、歴史上所謂『清教徒』とは相違する所あるべきも、彼は其時代の無二の清教徒であつた、彼は神聖的正義と信ずる所を教會の世界的法規となさんと欲した、而して之に由りて教會の指揮を受くべき萬民の法律を作らんと欲した。

此の熱誠は彼の錯綜せる戦闘生涯を解くべき鍵である。聖職買買は勿論、金銭又は約束を以てする教會の職務買収には手強く對戦した。監督及び修道院長が此世の諸侯の手にて任命せられ、權標及び銀が俗權の授與する所たるは此世の君主に事實封建的徒屬を拂ふものあれば手強く對戦した。彼はレオ九世が熱心に批議したる修道院内の不潔不自然の惡にも同じく反對した。司祭等の多數が公然憚らざりし畜妾の風にも同じく反對した。司祭の正式の結婚、其は前法王等の盡力の効も無く、歐羅巴の到る所、未だ流布したりしものに對しても熱烈の度は同じであつた。惡弊及罪過と信せし一切に對して、グレゴリーは有らん限りの力を出した。而して彼等に對して倦まず撓まず教會の呪逐を振り廻した。

言ふ迄も無く、此等の盡力は基督敎國を通じて法王無上者となすの効果を齎らした。其は彼の志望であつた。然れど彼の計畫の根本に個人的野心あり、計畫の彼方に統治的權勢があつたとは見えなかつた。人類の幸福、神の榮光の爲に文明世界を通じて教會の卓越、是が滾々たる勢力を彼に注ぎたる理想であつた。此目的の爲には、總ての監督は彼に徒屬すべく總ての司祭は彼の柔順な僕たるべく、法王の特使は如何なる廳署、如何なる會議にも、彼の代理たるべからしめんと欲した。紀元一〇七六年、羅馬の會議に於て彼の發布したる布令は、教會の根本的準則を披露し、彼の理論全體を表白したる者に左の如き事がある。

「羅馬教會は神にのみ建設せらる。

「羅馬法王のみ世界的と稱せらるべし。

「法王の使節は、縱令小身の者たりとも、會議に於ては總ての監督の上席に位すべく且つ彼等に對して廢黜の宣告を言渡すの權を有する。

「法王は不在者を廢黜することが出来る。

「諸侯は法王の足にのみ接吻すべし。

「帝王の廢黜は法王に取つて合法である。

「法王の命にあらずば、如何なる會議も大會と稱することが出来る。

「如何なる法令も、如何なる書籍も、法王の權威にあらずば法典と崇むることが出来る。

「彼の宣告は誰人も廢棄することが出来る。彼のみ總ての宣告を廢止することが出来る。

「彼は誰人にも審判されぬ。

「羅馬法王に上訴する者は誰人も罪に定むることが出来る。

「羅馬教會に背て誤謬に陥らず、聖經の存する限り今後永久に誤謬に陥ることがない。

「大會を召集せずして、彼（羅馬法王）は監督を廢黜調停することが出来る。

「羅馬教會と全然一致せずしては誰人も羅馬教徒と見做されぬ。

グレゴリーの畫策が此に教會及び世界の前に臆面もなく標榜された。『有ゆる他の權力を無用の徒屬たらしめた』とヴァイルメーンの力言せし通り、彼は地上に於ける最大權力を法王權に要求した。總ての封建制度、總ての帝權、武士諸侯の總ての智術校計、教職等の總ての抵抗に反對して歐羅巴に實現せしめんと決心したる畫策であつた。此途に由るに非ずして大陸の諸邦を、永久的統一に結合することが出来ぬ。斯る大計畫に比ぶれば、佛蘭西を頭腦とするナポレオンが世界的帝國の夢も、平然であつた。之に比ぶれば、古羅馬帝國に對する萬民の服従も皮相であつた。曾てカローロ大帝の天才を竭さしめたる、武力的征服、政治的服従の大計畫も、之に比肩することは出来ぬ。古今の大人物にあらざれば斯かる計畫を解し、亦斯くの如く堂々と披露することが出来ぬ、大局の情勢を眼中に置かずしては之を思ひ付くことが出来ぬ。惰眠を貪ばれる人心には無遠慮な教義の震盪のみが入用であつた、兇暴の行爲は羅馬に珍らしいことではなかつた。教會の首座に於ける放埒な風習、野卑な品性はベネチクト九世を記憶する人々を驚かすに足らぬ。然れど一切人類の本分を無視する、此權利主張の前には、歐羅巴も無感覺で居ることが出来なかつた。

彼が世界的たらしめんと欲したる教會は、腐敗教會にあらず聖職賣買の教役者、放蕩、無學、怠慢なる司祭、俗惡、驕奢、半武人的主教等の教會にあらざりしことを、常に記憶せねばならぬ、嚴律の恢復と、禁欲的敬虔の獎勵とによりて、教會を廓清せんと欲した。彼は教會の清淨と其卓越とを相匹はしめんと欲した。其の神聖なる制度によりて、敬虔が養はれ、貧困が保護せられ、天上生活が地に出現するを欲した。

彼自身の實際的宗教の基本は伯爵夫人ビアトリス及び其女マチルダに送りたる書簡に見はる。『神に對するの聖から隣人に聖を顯はす、薄命者、被虐者を助くる、そは祈禱、斷食、徹夜及び他の善行に勝る。何となれば、使徒と共に我は眞の愛を爾餘の諸徳に勝れりとするに躊躇する能はざるが故に』と。英國のマチルダが、其所有の何にまれ所望に應ずべしと申出でし時の、彼が回答は立派な者であつた。『貞潔なる生活、汝の所有を貧者に頒つ、神を愛し汝の隣を愛する、是以上何等の黄金、何等の寶石、何等此世の高貴なる物を汝に所望しない』と。彼は亦巫女なりとて迫害せらるゝ、デンマルクの貧婦等の爲に自ら仲裁し、遠隔未開の王に向つて、殘害の跡を絶てよ、然らずんば汝自ら神の報を免れざるべしと戒めた。彼は罪の自覺と、基督のみの功績に由れる救の望とを悲壯に言ひ顯はした。クルニーの僧院長なる友人に基督の慈悲に頼るの外、絶て救の望のあらぬ程、罪の重荷に苦しめらるるを覺ゆ』と。書き送つた。又紀元一〇七七年日耳曼全土に廻したる法王の書簡には、彼の哀切な言を見る。『吾等は知る、吾等は此世に於て、自己の利益を求めず、唯基督の事を追求め、嚴父等の足跡を追うて、神の慈悲に由れる永遠の安息に向つて、勞苦を厭はず前進すべきが爲に、此目的の故に、使徒の椅子を興へられたるものなるを』と。彼は靈的理想、律法、安寧を此世の最上たらしめんが爲

め、又私心より燃出で譎詐と血にて堅うせられたる諸侯の權威を、神より出でたる僧權の下に掣肘せんが爲め、又彼を一時の首領となせど、至上者が此に崇められ、人類の平和、神聖、喜悅が此に保全せらるべき、其世界的神政を維持、管理せんが爲めに、特に權威と教育とを受けし神の代理と自覺したものに相違ない。

言ふ迄も無く、斯くの如く偉大にして改革的なる計畫は、各方面に烈しい反抗を見ねばならぬ。即ち貪慾不行跡なる僧侶の反對。買収又は契約で其職を得たる監督、僧院長の反對、肉慾を縦にせんが爲め僧侶を志したる貴族等の反對、分けても此世の權力をもて大統を繼ぎ、其祖先は法王を任免したる日耳曼皇帝の反對、此等の反對を受くるにあらずば、全然着手することが出来ぬ。純潔なる司祭の一輩すら、既に婚を結び、家庭と妻子とを有する者は、是は妻の名を汚し、子女の遺産及名義を奪ふものなりとて恟々たる有様であつた。數人の大監督は此布令を讀み聞かせし時、講壇に於て石打ちにされた。數人の僧院長は集會から曳出され辛じて一命を拾つた。其怨恨を刺戟せしことは前古未曾有であつた。カムブリーの一人は此布令の後援をなすが故に焚殺された。

亦言ふ迄も無く、グレゴリーは、其大膽な計畫を首尾よく成就するに足るる武力を有たなかつた。實に彼は首府に於て、聖彼得宮殿に於ても安全ではなかつた。彼のアレキサンドル二世が、錦繡燦爛アグヌス、デイと記したる聖旗をもて、ノルマンディーのウイリアムに祝福を送り、彼に王國を交付す

と稱して憚らざりし時は、羅馬に枕を高くすることが出来なかつた如く、グレゴリーも亦、至尊の法王として、帝王の上に權威を主張したる當時は教會の攻撃を受け羅馬の盜賊等に囚はれ暴行を蒙つたことは、注意すべき事實である。

然れど之と同時に、彼は用ふべき巨多の勢力を王者の及び難い機關の設備あり著しき成功の機會を有した、此羅馬教會の天才は其天才を、雄辯の上にあらず、文筆の上にあらず、寧ろ用意周密、効果適切の一組織の上に發揮した。時代を経て今は成熟結合せる、此組織の全統治が、堅忍不拔の意志もと彼に使用せられんとてグレゴリーの手中に置かれた。世界の大首府の高所は事實上、曾て喪失しなかつた。遠隔の民族は此大首都に對して尙ほ恐懼の目を以て眺めた。特に羅馬教會の有ゆる司祭は法王京に對し自覺的關係を有する彼の教育は首府と自己とを聯結した。其國語は彼の公用語であつた。彼は其の効果を看破したるが故に、教會の役目を他國語——例へばスラバ語——に翻譯するを禁じた。法王の希望通り家族的繋累が絶縁せらるれば、羅馬教會は羅馬を其中樞とする、司祭各自が唯一の國土となるのであつた。然るときに、若し此の教會の汚辱は雪がれ、不義は贖はれ、統一的生命もて復活せられれば、彼は其首腦として、基督敎團を手中に掌握し總ての點に於て之を統治し指導するのであつた。

彼自身の性格が莫大の便宜を彼に與へた。彼を惡口せし人々も、其誹謗は概して切齒するに過ぎな

かつた。彼の生活の威儀、譎詐不拔の精神は、先進の破廉耻主教は日耳曼のヘンリー四世、佛蘭西のフィリップ一世の如き敵手の品性及生活と顯著なる對照をなすものであつた。高尚なる思想、氣象を抱ける人々は、冷く彼に同情を表した。兵士、貴族等の壓虐を蒙れる貧者は彼の權力の爲に得意となつた。時代の迷信氣質が、敵に對する攻撃を有功ならしめた。災害が日耳曼領を襲ひ、國王が彼に反抗せし時、諸教會に於て基督の肖像が血の汗を滴らし、聖餐の盃に眞の血が見はれたとの取沙汰であつた。ウートレヒトの監督が法王の呪逐を度外視し、且つ王に奨めて此等に反抗せしめし時、取敢へず死を來し、臨終は不思議な苦惱を伴ひ、且惡鬼を其周圍に見、祈禱も何の効なしとて固辭したと信じられた。混雜と不安の時代には、甲冑に身を堅めた武者よりも更に怖るべきものが人の想像にあつた——物言はぬ大氣に充滿する、目に見えぬ天の萬軍是である。縱令金城鐵壁と雲霞の軍勢と、戰慄すべき拷問室とを有すとも、貴族王者よりも畏るべき權力があつた。其は人の殺されし後に其魂を地獄に投ずるの權威を有したる權力であつた。ヘンリーが氣に入りの主教を誡め、彼によりてヘンリー一人を誡めて、帝王の權力、人類連合の努力が、使徒の權と神の全能とに反對するは、消え失する閃光、風の吹き去る糞糠に過ぎないと、グレゴリーの曰つた言に、歐羅巴の人心は一般に同感であつた。記録に見ゆる如く、骨格が細く、身の丈低き羸弱多病の羅馬の人、六十の老齡、軍勢も無く、諸侯の提携も無く、時に總ての人の援助も無くして、理想の一制度を建設せんが爲め大陸の有力な君主

等を相手に闘つて臆せず大部分の成功を收めたるは何たる驚嘆すべき光景であらう。

ヒルデブラドの計畫が全勝を得たりしならば、文明は破壊せられ、教會は壓虐の器械に變じたかの如く思はれる、斯る計畫を今日實施せんとするは、時勢の進歩と相容れざるを認むる、然れど當時彼の眼中にあつた通り、其は歐羅巴統一の爲の闘争以上であつたことを忘れてはならぬ。其は物質に對する精神の闘争、勢力に對する信仰の闘争、倨傲なる壓制者に對する貧者賤者の闘争、人の私心より起れる者に對する神の命令にて打建てられし者の闘争。略言すれば其は此世と肉と惡魔に對する神の教會に於ける神の闘争であつた。彼の良心は刺戟に於ては命令的無容赦であり、性質に於ては人爲的なれば、特別の良心、職務的良心、第二の良心と稱へることが出來やう。然れど其は當時に於ける彼の良心であつた。其命令の下に彼は水火の闘の中に其身を投じたのである。大膽不敵の極を盡して彼は戰鬪場裏に自己の立場を保つた。紀元一〇八五年の初夏、都の空さかる囚虜、友人の年金に衣食するの身として、「我は正義を愛し不義を惡んだ、此故に流竄の中に死ぬ」と最後の氣息に絶叫しつゝ、サレルノに瞑目せし日迄之を追求めて倦まなかつた、十二年の波瀾多き法王職は此に終を告げた。殆ど七十年の彼の生涯は暗き影の下に終結し、英靈は枯槁衰殘の形骸を横へた。然れど彼の勇猛なる生涯、非凡なる事業の結果は滅びない、其結果の重要を史上に見落すものはない。

世界に不斷の反響を起したる最も激烈な闘争は、日耳曼のヘンリー四世との闘争であつた。ヘンリー

「は覇氣を隔つる痼癖を燃やし權謀と武器とをもて、グレゴリーに對抗した。紀元一〇七六年ウオームスに王の召集したる監督、僧院長、貴族等の會議は、グレゴリーを背教僧と宣言し不法行為に法王職を得たる者、魔術を行ふ者、新教理をもて神學を墮落せし者、不潔物を聖物に混せし者、妻を夫より分離せし者、姦淫亂倫を正當結婚に勝れりとせし者、無稽の宗教にて人民を惑はせし者、法王職を荒す者、國事犯の罪ある者となした、仍て廢黜の手順に及んだ——此宣告はアルプスの南に於ても、日耳曼同様衆人の歡呼聲裡に迎へられた。グレゴリーは、畏ろしい呪逐をもて之に應じヘンリーの廢位を宣言し、基督者たる臣下は彼に對する恭順の義務無しとした。他人には眞似の出来ない語勢をもて、歐羅巴の面前に彼の得意の教理を掲げた。文武の威嚴は、神を知らざる時代の産物たりし事、貴族諸侯の存在は、其情慾我慢を縱まにし、惡魔の教唆に乗じ、總ての罪惡の委任を受け、對等に造られた人類の上に主君と敢て自らを立てたるが故に存在するに至つた事、主の司祭等に彼等の道を履ましめんとするは、總ての司祭の長たる神の子に『爾若し俯伏して我を拜せば此等を悉く爾に與ふべし』と言つた惡魔と比較すべしといふ事、是である。

法王の言の烈しい震動が、其自身凡庸の心を警かすに十分であつた。而して羅馬教會の譴責を蒙りたる王者の權は度外視して可なりと、民に訴へて畏るべき民主政體、是れが大陸の心を根底迄攪亂した。其洶湧はカロロ大帝が西羅馬皇帝となりし以來未曾有であつた。後世の雄辯家ボシユエーをして、

赫々たる自國の君主にすら使用せられ得べき、斯る權力に慄然たらしめた。ボシユエーの提出したる教主權に關する佛國教授者の宣言が、此所に動機の幾分を有するは争はれぬ。グレゴリーの提出したる權利の主張は、確かに破天荒であつた。然れど其挑みし鬭争から彼は瞬時も畏縮しなかつた。彼には羅馬教會に於ける信仰が唯一の世界的統一力と思はれた、廓清したる教會は、天に聖徒を誘ふのみならず、地上の萬民を其律法の下に訓練支配するものであつた。日耳曼に遣したる使節に『基督教的共和政治に關する萬事を裁判し正義の司令もて之を管理するは、使徒の位に在る者の攝理的使命に屬するは汝之を知る』と書き送つた。ヘンリーにも、佛蘭西のフィリップ一世にも、英國の倨傲なる勝利者ウイリアムにも同様に書き送つた。ウイリアムに對し法王權を太陽に比し、帝權を太陰に比した。彼の敬虔増進の賞に權力の増進を約束した。

ヘンリーの武力と權謀とに對し、旺盛なる氣魄をもて力戰する間にも、絶えず宣教的活動を續行した。匈牙利、ボヘミア、丁抹、諾威、瑞典の諸國に基督教を宣傳せしめた。彼の熱心に勵まされた教師等が此等遠隔薄待の諸國に遣された、彼は此地方より青年を引寄せ、學問宗教を羅馬に學ばしめんと欲した。彼は強者の横暴を恐れなかつた。又弱者の罪惡に無頓着でなかつた。彼の叱責を憤れる波蘭の王ボレスラスの命で、クラカウの監督が暗殺された。忽ち其王國に禁令が飛ばされた。諸教會は一切の政務を閉され、暴君は廢黜、破門の上國外に放逐せられた。其遁走の途中野犬に喰ひ殺されたと稱せら

る。基督教と法王職とを混同する根本の誤謬は別物として、ヒロデブランドに如何なる過失があらうとも、彼は脅迫や阿諛の爲に、其目的を二三にしたとか。權勢の前に節を曲げたとか弱者をして其弱さが故に重荷を負はしめ、罪人を其強さが故に容赦したといふやうなことはない。彼は其最大の野心エルサレムを回復する十字軍の開始、身自ら先導たらんと希望をば、廓清教會にて歐羅巴を結合、教育統治せんと決心に犠牲とした。唯一度、聖職賣買、教役者獨身の布令を、暫時緩めたかと思はる。晩年に及んで、行路に横はれる困難は超ゆるに難く、法王權其者が不幸なる打撃を蒙らんとするを見、制度の嚴酷を一時中止したことは争はれない、是が唯一の例外であつた。彼は聖禮典の客觀的効力を暗に拒否するの危険すら顧みなかつた。其の効力は司令者たる司祭の人格如何に由るとなし、信者を喚起して、買收主教等の司會する聖禮典を拒絶せしめた。其結果は後に、グレゴリー自ら恐縮する程の効果を來した、然れど當時は躊躇するの違がなかつた。彼は有らん限りの力を闘争に投じた。宗教儀式の廢棄すら彼を畏縮せしむるに足らなかつた。彼の布令に服せざる教會、國家の諸權に對し、人民を磨いて彼に加擔せしめた。彼は其志望に斷乎と踏み止まつた。紀元一〇七七年の一月には、志望が十分に成就されたかの如くであつた。

破門せられ、廢黜せられ叛逆頻々として陛下に起り、母には棄られ敵對せられ、狂暴未熟な心に有勝な、迷信的恐怖に襲はれて、ヘンリーは其年カノッサに於て名高き服従に及んだ。嚴冬の真中に、

アルプスの氷山を超えて——十一世紀の最嚴冬、葡萄酒は大半枯死し、ライン河は四月中旬迄氷結した——僅に皇后と皇子と武器を帯びざる少數の護衛とを伴ひて、グレゴリーの逗留せる、難攻不落のカノッサ城を訪れた、今は荒廢に歸して、レッギオからモデナスに至る途すがら、廢垣斷礎の間に旅客を低徊せしむるのみ、三日の間、王は素足の儘雪中に佇立し、日暮迄斷食し、第一第二壁間の空地に伺候した。四日に及んで、悔罪服を纏ひ、矢張り素足の儘で法王の前に通された。彼は地に俯伏して赦免を請ふた。嚴重な赦罪の條件を諾し呪逐は此に赦され、赦罪之に次いだ。讚美歌を歌ひ、毎節の終りに法王は細き軟鞭もて王の肩を敲き、其から祈禱が濟むと、僧冠を正して、赦罪と教會の交りに復歸せられたるを宣言した。それから聖餐式を舉行して王を之に陪せしめ、之を受くる者若し罪無かりせば、嫁せられたる罪より清きも、否らずば其中に實體を存する主が即ち死を與ふべしとの條件で、同時に之を食するといふ如何にも畏ろしい試験が提出された。

ヘンリーは是迄も誓約を破つた。復た蜘蛛の巢よりも容易く之を破るのであつた。彼は無罪を試験する如何なる形式的誓約にも遂巡しなかつたが、唯此の恐ろしい嚴誓の前に恐縮して、其試験をば避けた。斯くて表面上罪を赦されて法王の前より退いた、然れどグレゴリーの言なりとて沙汰せらるゝ通り、『實際は彼の受けたるよりも一層の嚴責を受くべき』であつた。爾來兵器が王家より離れたことがない。彼はグレゴリーを廢して他の法王を擧げんが爲め戦ひ、或は權謀を廻らし。或はチロール

のブリクセンに會議を召集した。選ばれた其人は、ラヴェンナの大監督ギーベルトであつた。ヘンリーは兵を率ゐて羅馬に彼を案内した。曠日彌久、漸く紀元一〇八三年のクリスマスに之を占領した。翌年のバーム、サンデーに、ギーベルトは、聖彼得寺院に於て、クレメント三世と號して職に就き、イーストルに於て帝冠をヘンリーに授けた。其後羅馬は、グレゴリーの應援に來れる南ノルマン、及びサラセン同盟國の群衆に攻取られ、蹂躪せられ、焚き拂はれ、グレゴリーはラテラン宮殿に招ねられた。彼等が順次、荒都を退去するに及び、彼もサレルノに其後を追うた、前に言つた通り、紀元一〇八五年に其所で歿した。然れど彼の制度は亡びなかつた。ヘンリーは、此法王の下に受けたる災難から二度と回復しなかつた。彼の子息等は相次いで彼に叛いた。彼の妻は殆ど信じ難い罪惡を會議の前に訴へた。時として彼は自殺の岸迄行つた。五十年の統治果て、紀元一〇六六年、不幸多事の生涯はリエージロに閉された。王冠と劍は、恰も押し寄せて來た子息の許へ送られた。

爾來、法王の選舉は、未だ曾て皇帝の裁可を求めたことがない。クレメント三世の召集せし羅馬の大會に於てすら、グレゴリーは、事實聖アンゼロの浮囚たり、大會は帝王に黨しグレゴリーに反對の人々より成立せるにも拘はらず、彼が布告したる原理及び準則が、本質的に受理せられたりといふは、取も直さず其名と同身一體たらしめし制度は、グレゴリーが與へたる大動力を明瞭に説明するものである。皇帝の破門は、其彈力に對する答辯を聽さざるが故に不法であると宣言された。然れど王を破

門するの法王權は忌避されなかつた。聖權賣買司祭の結婚に對する準則は、クレメントにて繰返された。但だ聖禮典の効力は、司祭の品性如何に關せずと主張した。外形に於ては然らずとも、實際に於てヒルデブランドは勝利を得た、其嚴重な品性、大膽なる精神、時代の氣風、萬民をして光明と法則とを羅馬に仰がしめたる根深き風潮、大陸に於ける安全な一統制度の渴望、此等は彼自らは浪死して之を見ずと雖も、彼の計畫に勢力と卓越とを與へて、數世紀の間絶ゆることなからしめた。彼以降、歐羅巴の期待したる唯一の統一は、法王治下の統一のみであつた。一切を包容する世俗的帝國は、最早誰人も夢想しなかつた。

彼の歿後、友人の一人たるヴィクトル三世の短い在位の後、同じく友人の一人たる、オースチアの監督オトーが、ルバン二世と號して位に上つた。クルニーの同じ修道院の出身者たり、グレゴリーの使節又親友の一人たり、又適任なる後繼者として彼に名指された者である、彼は教會の改革及び主權の上にグレゴリー同様邁往直進したと共に、聖地恢復の十字軍といふ大理想を實行する適任者でもあつた。此事は前に言つた如く、グレゴリーには決心得意の計畫にして紀元一〇七四年には夙に回章を以て信者に之を公告し、別ても日耳曼のヘンリーに一臂の力を求めたのであつた。當時此計畫は實現することが出来なかつた。ウルバンの成功は、羅馬教會に生ぜし莫大の刺戟を證すると共に。又歐羅巴の民心が如何許り勢力と勇氣を増進したかの證據である。ベネチクト九世の惡政の下の歐羅巴から、

ヒルデブランドの門生たる歐羅巴への變化は、一世界より別世界に遷つたやうである。分離反目の諸國を東方の共同的冒險に首尾よく協力せしめたるは、カロロ大帝以後絶望の觀ありて、公共的一致を教會が如何に更新したかを示すものである。

グレゴリーの死後十年。紀元一〇九五年に、數千の教役者、教萬の平信徒が、新法王に會せんとて、ミランとバルマの中間なる、ピアケンザに會した。此多數を容るゝに足るの家屋なければ、郊外の露天に集會が開かれた。東方帝國の國使之に出席して、サラセンと土耳其とに對し西方基督教團の援助を求めた。群集の心は深く哀訴に動かされ、運動の時節到來したるが如くであつた。然れどウルバンの賢智、一層好都合の時機と場所とに、其開始を延期した。同年の秋、更に大なる集會を、クレルモンに召集した。ペリル・ズエ・ハ・アミットが前以て國內を遍歴して、聖墓に詣づる巡禮の殺戮と暴行とに遭ひ慘狀を物語り、之に基いて火の如き勸告を與へた。ウルバンは二年前彼の使命に裁下を與へた。高遠な想像に走り易き躁急な佛蘭西人民は、彼の言に興奮して無我夢中になつた。國は噴火山の如く、會議は壓伏すべからざる焔に充たされた。彼自身佛蘭西人なるウルバンが、高き假檟敷に上り演説を始めた時は、神のインスピレーションが、宛らベンテコステの日に顯はれたるが如くに感ぜられた。彼の演説は三様に傳へらるれど實質に於ては皆一致する。神の贖罪者の居住にて名高くなり、苦難にて崇められ、十字架にて買取られ、復活にて榮冠を受けたる王都を汚辱背教の占有から奪回す

るのが其主眼である。基督者に取りて全地は流竄の場所、一層善き意味に於て、全地は其家庭なれば、此遠征の爲に家族の束縛を斷つも不可なしとの思想と、此世に財産を棄つる者は、天國に於て更に善きものを得べく、此役に死する者は、其罪洗ひ去られ、祝福の第宅に永住すべしとの法王憲の約束とをもて、彼の演説を終へた時に「神の命なり、神の命なり」との大叫喚が、宛も火山の破裂して、焔と熔岩とを噴出したる時の如く起つた。十字號に供する赤布が不足を告げた。佛蘭西全土、歐羅巴全土は、枯野を燎くが如くであつた。法王及び教會の權力は、瞬く間にクフゴリー七世の大夢も夢想することの出来ないほど赫々たる絶頂に上つた。外觀は敗死に終り、無駄骨折の如く見えたが、大部分は彼の事變の產物であつた。分離反目の諸邦の上に、教會の操縦權を志せる大膽な精神と不息の熱心とは、基督教國の會議に依然として主權を握つた。

十字軍の効果は、西歐羅巴の民心を、未曾有の程度に興奮せしめた、人々をして理想の大冒險に同情的提攜をなさしめた。武俠的氣風は發揮せられ、社會を束縛破壊したる封建制度の桎梏を解かしめた。農夫も貴公子も十字軍の兵士として二ならしめた。所有地は已むを得ず公平、深切に分配された。巨額の軍需品支給の爲に、商工の富を増さしめた。地方的事件、四隣の鬭争にのみ齟齬して居つた社會思想を廓大向上せしめた。歐羅巴と亞細亞とが、古帝國の二分以來初めて面と面とを相接した。十一世紀の末葉十年をして其出立の三十年とは全く別種の時代たらしめた。全然新しき自由と勢

力とが時代の運動に瞭然として更に優良の状態到来すべきを豫言した。

ウルバン二世が、十一年間の法王職を終へて此世を去つた後、是もヒルデフランドの朋友にして門生たる矢張り一時はクルニの僧であつた。バハカル二世が位に上つた。子息の叛逆に由りて已を得ず破門の最後の赦免を請ひ、又帝國を譲り渡すに至れるヘンリー四世を見たのは彼であつた。然れど亦右廢帝の子で同じ後繼者が伊太利を貫ける破壊的進軍後、之を羅馬の主、彼自らの主、ヴァチカン及聖彼得宮殿の主としたのは此法王であつた。彼は逼られて帝冠を與へ、又嚴約を取結んで多大の讓歩をした。其はグレゴリーが極力抗戦した所であつた。

此世紀の末葉、所謂教會の上ではなく、教義上、精神上の他の運動が起つた。別種の人傑が當時の史上に光彩を放つた。

ペテル・ダミアニは、紀元一〇七二年の死なれば、彼の公生涯は、主に此世紀の四分の第三期に屬する。其感化は死後にも絶えずして、久しく教會に現存した。幾らか偏狭な心、粗暴な氣象、然れど所信に忠にして、反對を恐れず、常習を持ち、禁慾的、教會の清淨に熱望を有せる彼は、卑賤に起りて——一説に彼は遺兒にして豚の群を逐へりと——監督及法王樞機員の高位に上つた、而も彼の欲せざる所を押付けられたのであつた、彼の志望は可なり狂熱的に、而も實際的の者であつた、彼は、拉丁の古典に精通して居つた。社交よりも寂寞を愛した、然れど法王の召集を受けては、公務に於ける難

局を辭退しなかつた。隱者中の頌歌作者、新式の懲罰發明者、必要と認めては法王の不敵な批評家又彈劾者、修道院長たらんが爲に遂に樞機員の冠を擲ちし彼は、其の論文、其の説教、其の書簡、其の聖徒傳に遺せる教訓よりも、品性と克己の實例といふ更に重要な教訓を残した。有名な讚美歌「デ・グロリア」は、アウガスチンの文から暗示を受けて多分彼の作つたものであらう、此に譯出する一節は、彼の行動の説明である。

力をたまへ、おし逼られて、間なき軍に、到らしめば、

た、かひ果て、永遠の安息を與へます日の、あらなため、

常に幸なる、天の所得を、いやはてに我つがため、

武士の猛烈と、僧侶の偏狭と、基督者の燃ゆる信仰及希望とが、彼に於て混合した。

英國史の讀むる、限り、永く忘れざるランフランクは、紀元一〇〇五年に生れ、一〇八九九年英國に歿した。バウエアの生れ、門閥の出にして、法廷の教育を受け、暫く辯護士の職に従事した。後ノルマンディーのアブラレチエスに、自ら神學校を打建てた。終にベツクの修道院に請ふて全然修道院生活を送つた。禁慾的精神、禮容ある態度、教養ある實際的の穎才、論理と學術とに秀でたる彼は、修道院の副院長となつた、其後是よりも大きいカインの修道院の副院長となつた。彼の伎倆と品性とを認識尊敬せる英王ウィリアムの爲に、遂にカンターベリーの大監督に招かれた。アレキサンデル二世の命

により其任を承諾した。英國の教會と國家とは、彼がウィリアム及び後繼者に與へたる感化の故に、彼に負ふ所甚大である。政治家の才能と篤き敬虔とが彼に結合して居つた。彼の作と稱せらるる、聖保羅書簡の註解は、注意深い聖書研究を證明する。聖晚餐に於ける主の實現に關する、ペレンガリウスとの論争は、熱心練達の神學者たるを示す。然れど彼の個人的精神は、高尚なる偉業の媒介であつた。萬人に承認せられたる品性、檢束と威儀との生活は時代の放蕩を誡め、清淨の渴望を勵ました。

更に大なる思想家、更に深遠なる神學者が、カンタベリーの大監督を繼いだ、其名も高きアンセルムである、伊太利出身の人にて、紀元一〇三三年、アルプス山麓のアオスタに生れ、七十六年の後、紀元一〇九年にカンタベリーに歿した。天は、仰ぎ見る華嶽の絶頂に在りと考へ又夢に主に見えんとて巔に上つたといふ其美はしい幼年は過ぎて其母を喪ふに及び「彼の心情の錨を失ひて浮世の荒浪の中に殆んど難破の身となつた」。勉學、思想の盛なる誘引と努力以て身を修むる高尚なる精神的生活中に刺戟とから、彼も亦ベックの修道院に來た、副院長に擧げられ、遂に院長となつた。ランフランクの死後いたく嫌厭せるにも拘はらず、遂に英國の教會的主位を繼ぐことになつた。大監督としての十六年は、奮闘、浮沈、時としては一見失敗の星霜であつた。大半は流竄の中に過した。然れどウィリアム・ルフスの狂暴なる意志も、壓服し難き大膽不敵な氣魄をもて、此國の何れの勇者にも劣らざる立派な奉仕を英國に盡した。彼の偉大なる智力的事業に於て、基督の教會は今日に至る迄依然彼の負債者である。

である。
宜べなるかな、彼は中世紀のアウガスチンと稱せられた。辨證的銳利と力量とに於ては、當時を凌駕したるにあらざれど、崇高至難の題目に、専心不斷又深遠な默想を凝らせる點に於て、他人に見難き性癖を有した。神の存在を證する彼の有名な實體學的論證は、彼の獨創にはあらねど、他人の論法を完成し、之を凌駕したる、全然首肯せざる人々にすら驚嘆を博した。近代の大なる哲學的心意の多數は之を完全視した。神の豫知と人の自由との調和の上に、詳に思を凝らし、兩者の調和を説明することに奮然努力した。

インカルネーションの道徳的基本と贖罪の完全な解釋を示さんと試みたる彼の名篇クル・デウス・ホモは、彼を當時の基督教思想家中の白眉たらしめた。其の莊嚴な死活問題に關して歐羅巴の思想を改革したといふとも過言ではない。死に至る迄、彼の心は同じ状態に従事して居つた。バーム・サンデーの拂曉、彼に侍したる主に在る兄弟等の一人が「父君よ、主のイーストル上國への爲に此世を去り給はんとすと言つたとき、彼は答へて、「此事若し主の御旨ならば欣然として之に従ふべし、然れど主若し、總の起原の上に我が思案しつゝある問題を解き得る迄、尙暫く汝等の中に留まることを命じ給はし、感謝して之を受くべし、我世を去らば誰人か此業を完成するや否を知らざれば」と言つた。深遠なる思想家、卓拔なる教師、偉大なる思想の點火者、嚴格なる生活、一步も譲らざる訓練、而も蜜の

如き同情と慇懃と仁慈の人、雙びなき敬虔家、——罪に穢れて天國に押し遣られんよりは、清淨潔白にして地獄に入るの覺悟ある——彼は世にも稀なる愛を拂はれた。奇蹟を行へりと稱せられた。又瑞兆が埋葬に伴ふたと信せられた。第十五世紀の終りまで彼は正式に聖列に加へられなかつた。前世紀迄は、教會のオーソリチーとして法王の名簿に彼の名が記されなかつた。然れど數世紀以前に、ダンテは、天國の幻像に於て、太陽圈内に、光明、勢力の諸靈の中に彼を見た、豫言者、神學者、法學者等と共に彼を見た。トマス・アキナス。ユーゴー。オブ・セント・ヴィクトル。六翼天使の博士ボナヴェンチエラ。ナタレ・ズエ・シリア。クリラストムと共に彼を見た。此時代は確かに智力的にも道德的にも、確固不毛ではなかつた。又アンセルムの天才、精神の如き斯る産物を現出し得たる強い精神的刺戟に於ても缺乏しなかつた。

十一世紀の後半部に於ける、歐羅巴の新刺戟は有名な人々の出現のみでない。種々の論争が起り熱心以て追究せられた。種々の制度が設定擴張せられ、後代に教訓と奨励とを與へた。聖餐に於ける主の實體出現説が前面に顯はれ、いたく人心を動かした。ツールのベレンガリウスは、ジョン・エリゼナの系統を追うて、主の實體は有形的にあらで、精神的にのみ出現すべく、口を以てとはなく心をもて受くべきもの、麵麩と葡萄酒は實質不變の儘で存すと主張した。其説は賞讃を受けずして却て非難せられた。ランフランクが手強く反對の筆を揮つた。紀元一〇五〇年の羅馬の大會及び、紀元一〇七九

年に至る迄の諸大會、諸會議に於て、彼の説は反駁、呪逐せられ、一再ならず危急に陥つた。然れど此問題は討議を専らにしたといふ事實、彼に對するに論辯が使用せられたといふ事實、彼の思想に同意せしもの少なからざりし事實、法王及び羅馬教會が侮蔑の言を發ちながらも、最後の嚴酷を加へざりし事實——此等は、前世紀の蕭索たる痲痺時代からの積極的道德進歩を示すものである。オルレアン其他の神學校に於て、極端な異端説すら出現傳播したるは、西歐羅巴の人心に於ける同じ豫言的醜醉を示すものである、此世紀に於て、罕少高價な羊皮紙の代りに、綿紙といふ記録通信の新器械が、始めて歐羅巴人の手に入りしことは、無意味に看過することは出来ぬ。之が使用の最初は例外稀有であつた。然れど益々記録通信、所信の發表等に廣益を與へた。

幾分は世の終りを豫想せし人々の莫大な寄進の結果として、此世紀には、修道院の増加富有を來たした、グレンブルに近き、グランド・シャルトルスは、紀元一〇八四年にコロインのブルノーに建設された。シトーの大修道院は、紀元一〇九八年にブルグンディー公の保護の下に、モンスムのロベルトに建設された。ダジョンの聖ベニグヌスの大修道院は、此より前の建設にして既に廣大、有力であつた。クルニーは監督及び法王の爲の著名な神學校であつた。オルデリクス・ヴァイタリヌの故に、世に聞える聖エウールの大修道院は、此世紀の中葉に始められた。モント・カッシンの古修道院すら、紀元一〇七〇年に其大會堂を竣工した。

其間に大陸全體に、新富豪の寄附にかゝる今迄よりも宏大壯麗な會堂が續々建築された。不徳者の恐怖と敬神家の獻身とが共謀した。メルリンの豫言が成就して蕁蕁と百合花との二つから薊金が搾り出された。ラウエル・グラベルの言つた通り、脅嚇的末日後基督教人民は擧つて宏大な會堂を建設せんと競争するが如くであつた。『全世界は、宛ら往時の襤褸を脱ぎ棄て、會堂の白衣を装ふが如くであつた』。八百年後の今日吾人をして驚嘆せしむる、ヴェイニースなる聖馬可寺は、此世紀末迄は竣工しなかつた、堂々たる均齊と其和諧的部曲の完備は、共に人を驚かしむるビザの中央寺院は、紀元一〇一五年に起工し、此世紀と共に竣工した、シエナ、モデナ、バルマ其他の伊太利都會の中央寺院は、同時代に屬する。一方北歐羅巴に於ては、新興の精神的勢力が、同じく莫大な建築物となつて俄然表現した。ベルナードが後日十字軍を説きたるパデンなるフライブルグの會堂は、此時代に屬する。ストラスブルグ、メリアンス、トレーブ、ヨームス、バセル、ブルツセル、デジョンは何れも宏大なる會堂の花を咲かした。尖頭アーチと飛迫控と、革命の火にすら免れたる不思議な硝子とで、歐羅巴に其名も高きシャートルの中央寺院は、大部分は次世紀に竣工したれど、紀元一〇六〇年の頃の起工であつた。殆ど現代迄持續したる長さ五百八十尺、幅百二十尺の、クルニーなる修道院會堂が、其巍峨壯麗に完成されたのは後年の事なれど、紀元一〇八九年の起工である。オーチユン及びボアクチーの中央寺院、ヴェズレの修道院會堂、カインなる聖ステパノ寺院、其他の多數は皆同時代のものである。北歐羅巴全土は、

宛らアルプスの山麓が氷雪の桎梏から解放されて、一時に爛熳たる百花の装ほはるゝが如く、優美宏大なる、基督教建築物の花を咲かした。

教育は復興した、カロー大帝の舊圖が再び廣く施行せらるゝに至つた。假令ば少年教育、僧侶養成の諸學校が、主要な中央寺院都市に建設された。寫本の文庫は夥しく蒐集を始められた。此時代に起原せる蒐集の中から、其最も高價なる皮紙が少なからず近世に傳へられた。中世讚美歌中の佳作の一たるヴェニ・サンクテ・スピリツスは此時代のものとしてせらるゝ。日禱書は此世紀の中葉後に完全な形體を具へた、英國教會の祈禱書は是から其威嚴と魔力とを傳來した。新興の説教熱は普通語にて國民に説教するの途を開き後日の慣例を遺した。法理學の研究が此時代に重大な刺戟を受けた。紀元一一三五年迄は、アマルフイ市が未だビザの略取する所とならなかつた。其後現今フロレンスのラウレント圖書館に存する前には、殆ど聖典の取扱を受けしヂヤスチニアン法典の有名な謄本がビザに移された。ヂヤスチニアン法典の考究が蓋し此人から開始せられたるイルネリウスは、既に十一世紀の初葉にボロニアに於て講讀した。其他の教師等も之に加はつた。數多の學生が彼等の許に集つた。原文不明の言語及び文章の註釋、又は欄外解釋が造られた。古法理學の研究から社會に於ける人々の關係が幾らか限定解放せられ、大陸の教導者は、光明を與へられた。

詩情も亦此時代に發揮せられ、從來之と其不昵疎遠の人々の間にも、諧調的辭句か持て囁かれた。佛

蘭西のツルーパーズル期が既に始まつた。之に次げる日耳曼の方はオーヘンスタウフエン侯の即位が次世紀のこゝとて、未だ到来しなかつた。然れど最も古き戀愛詩人は、既に信と愛と武勇の歌を歌ふて居た——其樂しい方面に於ては自然界を、美はしい威儀に於ては女性を、人生に於ては喜劇と悲劇を。プロウエンスに於ては是よりも前に此種の歌手が見られた。抒情詩で其時代に鳴つたギエヌのウイリアムは、紀元一〇七〇年に生れた。彈唱詩人等が抒情詩競べを吟誦する愛の庭と稱するが、此世紀の暮近く、プロウエンス及びカタロニアに催ふされた、ノルマンディーのウイリアム及び其軍隊の前でテイルフェの歌ひしと傳へらるゝ、シヤンソン・ヅ・ローランは、其以前に熟知せられたるは明白である。ニーベルンゲリード若くはグールドルン及びヘルデンブッフの後篇の日耳曼に於ける起原は未だ分明でない。然れど彼等の中に集成的表現を見るに至れる史話が、夙に人民間に流布したとは、ライネケ、フツフスと同じく疑ひ無き所である。有名な「英雄傳」の幾部分が、適者生存の理で、カロ大帝の通俗英雄唱歌集に現らはされたであらうとは、時に推量せられた通り事實不可能の事ではない。最も古いアイスランドのエツダも蓋し同世紀に溯る。此故に次の時代のやうな精妙な實質及形式は、未だ見ることは能はずとするも、眞の詩歌が既に存在したことは否定することが出来ぬ。カーライルの奔放にして光燄ある象喩は、文學史に絶えず實例を見出す「活動は鑿り開く岩石から閃光を發せしむ、詩歌は、其が險路を照して赫灼として天に懸る」と。

略言すれば、十一世紀は、始めの三分の一を經過せし後は、受動的過渡の時代にあらず、發動的變形の時代であつた、歐羅巴の人民は之を經由して、十世紀の暗黒から比較的明かな光と健全な空氣の中に到達した。教職の清潔、俗権からの解放、俗権の上に於る清淨教會の優越、是等を指しての教會の反動が右の結果を貢獻したのである。國家の上に法王の完全な統治を目的とせし限りは、著しい過失であつたが、然し此上の進歩に缺くべからざる統一の新意義を暫く歐羅巴に與へた。神政的形體の下に古帝國を復興し又凌駕して最上の精神的法術ありとの自覺から、人民を自由の民たらしめ、帝王をして暴虐を滅せしめた。第十回の最も熱中せる十字軍が、此世紀の最終の年の七月十五日金曜日、エルサレム略取の戦勝を得たりし時は——主が十字架に釘けられたる其日の同時刻と恭しく記憶せられた——其結果は僧職又は法王權の増大のみではなかつた、基督教信仰を告白する人民は、爾來相互の扶養をなすといふ新關係を生じ、又遠隔の地が比隣となりし結果思想の擴大を來し、又雄大貴重の冒險に於て協力を對する能力の訓練を來した。それから自然の結果武士道の教養武士道に加へたる宗教的調子、封建制度的束縛の解放、所有地の廣く有益なる交換が之に伴うた。東方の沙地に流せし血は徒費でなかつた。歐羅巴は豫想せざりしものを其から受けた、然れど一切の聖所を終始領有したらん程には價値ありと思はなかつた。

以上不完全ながら、ベルナアド以前の時代を略述せんと試みた。其は彼の經驗の歐羅巴が數世紀

の遅々たる勞苦を経て漸く到達したる形勢を成たけ明瞭ならしめんが爲めである。彼と其の事業を配置せんとするは、ヒルデブランドの後、ウルパンの後、第一回の十字軍が歐洲を旋風に捲き上げたる第十二世紀の歐羅巴に於てである。以上の摘要によりて、彼の生涯の四圍の状況を了解せらるれば満足である。過去の重苦しい厭やな影が矢張り其上を蓋ふ。猛烈な惡の成分が、善の萌芽と其中に相争ふ。其歴史には憂々たる武器の響があり、挑闘失望の叫喚が聞え、教會に於る上流教役者の紛擾が喧しく。權謀、戰略、鬭争が記載せられ。呪逐の反響がする、粗雑な思想、幼稚な迷信が權要に居て武器を揮ふに會ふ。貧困は解放された。權力は通例壓虐の器械と思はれた。之に生活するは言ふ迄もなく困難な世紀であつた。

然れど畢竟するに、カロロ大帝以後の恐怖時代から其中に歩を遷すや、少なからず進歩開進の愉快な徴候に會する。十世紀及十一世紀一部の狂態と渾沌とは既に過ぎ去つた。帝國は名のみの再建にして往時の世界的性質を失なつた。最早大陸以外には擴張せず。昔包括したる擴大な面積は、道徳的には合同すれど、政治的には離別したる諸王國に分裂した發展の大自然は斯く銘々の上に到來した。共通の教會生活が諸王國に普及した。領土の帝國主義が、事實靈魂の帝國に讓歩した。軍事制度は以前ほど顯著有勢ならずして、道徳的勢力が新時機を占めた。法王は正しき人物を引見するに至つた。彼等の勢力が幾分公安の助けとなつた。概しては高尚稀有の品性に對する感應が民心に増加し。優良時

代に對する多望の感念を増加した。指導者にして、若し博愛、敬虔、博學、剛毅を兼ね又雄辯の勢力を有せば、之は従ふに水火を辭せざるの覺悟が増加した。歐羅巴に於て此時代程斯る人物を要求したことはない。斯る人物の前に開かれた廣大な機會は、確かに古今未曾有であつた、其頃世に顯はれ出で、新時代に同情もて活動する道徳的威力の眞天才は、機會を認め、誘因を自覺すべき筈であると言はねばならぬ。

大なる風潮が我等の前に、其一瀾を示した。其所に豫言的徴候が認めらるゝ、封建的城廓を取り巻ける民屋の一群は、村落と成りかゝつた。發達しては市區を爲し、以來自由の巢窟となるべきものである。ウイリアム、ルフンがウエストミンスターに打建てし館は、當時は貴族の享樂に目論まれしものなれど、國史上の重大事件の舞臺たるべき運命があつた。十一世紀と共に閉ざれ西班牙の古詩にインスピレーションを興へし、シッドの生涯は、傳奇的武俠的氣風に人心が向ひ勝であつたことを證する。社會の精神にも教會にも、新しい豫想が表はれ初めた。それと共に徐々に發展に於て、廣き目的、新しき勇氣、道徳的勢力の信頼、鼓吹的希望が生じた。優良時代への回轉は歴然として明かであつた。十一世紀の末葉十年に於て、法王、ウルパン二世が、日出日没に先立ちて寺鐘を鳴らし、感謝、祈禱を民に促さしめたるは無意味とは思はれぬ。其指定せし祈禱の發語から名づけしアンゲルス、及びアヴェ・アリアの鐘聲は普く歐羅巴に聞かるゝやうになつた。鐘聲は昔鳴り渡つた。而も新

らしい時代に鳴り渡つた。其豫言的音楽の下に、我等は遂に個人的題目に従事することゝなつた。ベルナアドの生涯がブルグンデンに始まりしは殆ど同時代なる紀元一〇九一年であつた。

第三章

クレールヴォーのベルナアド。其個人的特色。

前章に於て、ベルナアド及び其事業の解説に必要なる事項を明かにせんと試みたが其れは少くとも三つであつた。第一は歐羅巴の道德生活及社會状態に、徐々ながら改善の希望を與へて優良状態、文明の變化が、十一世紀の終へざるに既に確定した事、第二は此變化の起原及其擁護の中心は王公又は下民の何等畫策にあるにあらで、基督の王國の利害を心に懸けて、其爲には水火をも辭せざる教會の人々にあつた事、第三は天京號令の才と熱烈なる確信と根氣強き鼓吹的意志とを具へたる聖靈性の人が、次世紀に於ける自己の立場に立たば、前代に勝りて大業の機會を有する事であつた。野心は依然として猛烈、感情は依然として粗野、壓虐は依然として暴戾、非行は依然として無數であつた。然れど悽慘な零落の長期から反動が起つた。寂々たる將來指しての風潮が、西方基督教國に於て消極的に開始されて、優良な勢力の勝利は正しく多望であつた。有力な歐羅巴の輿論は未だ顯はれずとも可能となり來つた。獨特の精神的資格に於て嶄然時代に抽んづる人は有名無實の位階があらうと無からうと、上流及下民の二つを催促指導して効果を收むる二つが出来た。

此等の事が自分と同じく諸君にも明瞭ならば前章の目的は達しられた。ベルナアドの纖弱秀麗の姿が、彼に高度の光彩を與へたる時代の眞中に据えらるる許りである。彼を動かしたる刺戟、彼の追求したる目的、其無私なる目的を追求したる方法すらも、吾等の理解に瞭然たるに至るべく、又稗史小説の領分に渡さるゝ、恐るべき彼の非凡な生涯の若干の事實は、歴史の白光に照らされて吾等の前に分明なる輪廓を示すであらう。

彼は紀元一〇九一年にブルグンヂーなるヂヨン市を距る約二哩フオンテニス城に生れた。數哩を隔てたモンパールの領主母方の祖父ベルナアドに因んで多分命名されたのであらう。

ブルグンヂー州は其頃も其後もミシユルの言へる如く、『立派な土地にして各市葡萄の枝を徽章とし各人互に兄弟又は従兄弟といふ——善良なる住民と愉快なるクリスマスの國』であつた。其翠綠滴るが如き斜地、日當りのよき高原佛蘭西文學を飾れる雄辯能文の男女、或程度に於て佛蘭西魂を形成したる人々を産み出した。ボシニエーが此に生れた。——巧妙なる論争家、浩瀚なる著述家、王者の顧問、ベルナアド以後佛蘭西に於ける最も雄辯なる説教家、ブフォンが此に生れた。自然法の擴大なる研究と詩的直覺は物理学に一時期を盡し其名は斯界に熟知せらるゝ所のマダム・ド・セヴィネーは多分此所のシャートー・ゾ・ブールピリに生れた。其活氣ある書簡——剽輕皮肉、而も情深い、考へ深ひ——が後世の一娛樂であつた悲劇詩人としての成功が、ヴォルテールを激せしめたるクレピロンは

ヂジョンの生れであつた。奇警な諷刺詩で其時代に鳴つた。ピロンは同じ生れであつた。ヂドロローは數リীগの距離に生れた。近代に於てラマルチンはブルグンヂーの人であつた。彼は詩人、歴史家、政治家、首領を兼ねたる人物であつた。其れと相似たるエツガギーネーは少し後れて生れた、彼は日耳曼魂の熱心な通譯者近世文明に就きての光彩ある論文家、講演家であつた、ブルグレヂーの空は數世紀の間、葡萄のみならず斯く才子を寒らした。武士と教會との頌榮にとて、ベルナアド三世紀後に設けらし金羊毛の勳章は、少くとも名目に於て、此隆盛な地方の富と温情とを適切に代表した。

ベルナアドの生れし頃、此州は古ザルダンヂー國の爾餘の部分は既に離別し、ヒユーカープの後裔が其有力な地方的君主であつたから、佛蘭西王國に直接の政治的關係があつた、ヂジョン、マイコン。シヤロン、シユル、ソニス。オイクゾン。ヌセミユー。ヌヴェル、オイクゼール。シアロルレーの八伯が其中に含まれた。ブルグレヂー公は、領土の廣大富饒の故と王統の流を汲むの故で、代々佛蘭西に於ける有力な貴族であつた。彼等は計畫に於て用意周到戦闘に於て進取勇敢であつた。時代の標準によれば、明かに宗教的の人々であつた。其一人たるヒユー第一世は、ベルナアドの誕生少し前に其位を兄弟に譲り、クルニーの修道院に退かんと決した。グレゴリー七世から院長に宛て、叱責の書簡が到來した。斯くばかり多數の貧者から甘んじて保護者を失はしむるを摘發し、使徒的訓書と共に貧者の嘆息と涙とが反證に擧げられた。ヒユーの後を嗣いだる其の兄弟は、シトーの大修道院建設者の

一人にして、バレステナへの途中タルツに歿した。其後裔の一人は其後の十字軍に主動の位地に立つた。暴風雨に襲はれし時の誓願を果たして、デジョンに有名なサン、シアベルを打建てた。紀元一〇二年遂にツロで歿した。

河流及道路の便に由り、交通は佛蘭西の何地へも容易であつた。パリは二百哩以内である。ドーツイネ、プロヴエンス、リオンネーとは往時の政治的關係は絶えなれども、親愛と通信とは易ることがなつた。北方及南方の言語。——二世紀後には共通佛蘭西語の全く混同したるが、ブルグンディーに於ては、南語に近くはあれど二つ乍ら使用せられた。又ブルグンディーの公子が、カスチリヤ及びレオンの皇帝アルフォンソの女と婚し、葡萄牙の伯爵を受けたる關係で西班牙とも特別の關係が有つた。此結果から、ブルグンディー人は、シードの國土の事情に通曉し若干、軍事的刺戟を受けた。此關係から後ベルナアドの注意を惹きたる出來事が起つた。十一世紀が將に暮れんとして、彼の生れ出でし茜さす州は、其頃以上の有様であつた。

父のテスランはシアーチロン伯爵家の後裔にして幼少より兵馬の間に育ちし練達卓越の武士であつた。彼と其妻とは共に暗黒時代に少なからざる人々、ルーテルガ加拉太書の注釋に言へるが如き人々の部類に屬した。曰く『福音の本文と洗禮とによりて、神の召し給へる人々がある。彼等は質朴謙遜な心もて歩み、僧徒、托鉢僧、又監督から膏を注がれし如き人々のみを思ひ、謹直神聖たらんと思ひ、

汚穢鄙俗にして彼等に比ぶるに足らざるを思ひ、此故に神の怒と實物とに備ふべき何等の善行を自己に有せざれば、基督の死と苦みとに通れ行きて、此簡易に於て救はれた』と。テスランに關しては、斯く傳へらるゝ、家系高く家産裕なれども、態度慇懃にして、貧しき者を深く愛し、孜孜として敬虔の徳を養ひ、正義に對する非常な熱心を有した。人が他人に對して正義を守るを難しとし、分けても恐怖又は利得の故に之を躊躇するは、彼の驚くところであつた。彼は最も勇敢な戰士であつた。然れど他人の切望する賞讃に就ては避易した。彼は己が地方の防禦の爲めに明約を結んだ封建的君主ブルグンディー公の召集にあらずんば漫りに武器を執らなかつた。而も一旦戰場に臨めば勝利を得ざることはなかつた。昔の或ベルナアド傳記者は特に斯う傳へて居る。或時は門地に於ても資産に於ても、彼の下に位する一人と争論を惹き起し、風習に従ひ決闘の上で問題を決することとなり、其時日が定められた。彼は打物執つては遙に敵手の上であり。勝利の曉は多大の利益を贏らすけれど金言を心に留めて、其仇讎と知を結び、總ての争點を放棄したといふことである。深い宗教的感性が確かに活潑々地テスランに顯はるる。而して彼の精神全部は令望以て父の名を世に記願せしめたる其子の精神と一致するを見る。

然れどベルナアドの秀麗なる稀代の資格は母アンタの方に、最も多く負ふ所あり、彼女の熱心なる敬神の氣質が最も分明に彼に於て複寫された。

若しも時代の粗荒なる故を以て、當時の女性は少しも尊敬を惹くことなく、基督教婦人は少しも、榮譽の地位を占めざりしと思はゞ。大なる謬である、「大伯爵夫人」と稱はれたるマチルダの例は、此感情を驅逐するに充分である。誰人に就かずとも彼女の意見に傾聴したるグレゴリー七世の親友、又高懐ある撰手なる彼女は、羅馬教會の熱心なる信徒。智慧と先見と無双の勇氣とを以て國家の大事を處置し、内國の如何なる智識、技藝にも通じ、佛蘭西、日耳曼、プロヴンス語を自國語の如くに操つた。而も此等を凌ぐ一事は正道と信する所に勇まじき獻身をなすにあつた。武士も兵卒も、主教、司祭、僧侶も皆彼女を尊奉した、又二世紀の後に、サマゼエーが僅に傳説に遺れる彼女の面影を、後世の爲に彩畫せんと試みたる、亦榮光輝やくベアトリチエの乗車に先立てる天上の使者としてダンテが彼女を表顯したる、何れも異しむに足らぬ。彼女は其令名の反射する彼女の時代を吾等に解釋するものである。

亦マチルダを薰陶せし敬虔なる其母を忘るゝことが出来ぬ。ビザに存する石櫛には、彼女の命によりて斯く記さるゝ、「罪人なれど我はベアトリチエスと稱へたる貴婦人である。此墓中に伯爵夫人たりし我は臥す、誰人も、我魂の爲に三度主の祈を唱へよ」と。亦ヘンリー四世の母アグネスを忘るゝことが出来ぬ。彼女は、魂の安寧を求めて、宮廷の榮華を打棄てた。曾て精神上の助言を求めて一僧院長に書を送りしとき、自らを「女皇又罪人たるアグネス」と記した。然れど先方からは「恵まれた

る貴婦人、貧者の敬虔なる母、寡婦の尊ぶ裝飾」と尊稱された。亦ブイロンのイダを忘るゝことが出来ぬ。彼女は其時代に「敬虔に満ち、文學に精通せる」と、記された。其子ゴドフレイは、謙遜、柔和、公正、貞潔、軍を指揮する整然、敵を撃つ先登第一との頌詞を得た。敵手すら「戦の熱心に就きては其父を見よ。神の奉仕に就きては其母を見よ」と言はざるを得なかつた。十字軍がエルサレム略取の曉、主が棘の冕を著け給ひし所にて、彼が黄金の冠冕を辭退せしは、彼女の精神が彼に再現したものである。次に英國のマチルダを忘るゝことが出来ぬ。オルデリクス曰く「容姿端麗、高貴なる門地、修養ある心意、高尚なる道徳が相結んで此著名な女皇を文飾する。而も信仰堅固、基督の奉仕に身を捧げて、熱心以て日々の施物を領つとの不朽の賞讃に比ぶれば他は言ふに足らぬ。

此等の婦人は、門地低くして精神同じき他の多數を代表するに過ぎぬ。彼等は教會に身を捧げた、教會は彼等の心には具體的基督教であつた。不完全ながら、福音をもて世界に基督教を宣布したるものは教會であつた。彼等に保護と訓練とを與へ、最善なる一切の母たりしものは教會であつた。其周囲の虎視耽々たる兇猛な勢力を掣肘するものは教會であつた、時代の壓力が彼等の高尚な渴望と協合して、彼等を信心家たらしめた。教職は不善でもあらう、主教等は驕傲、懶惰、不信でもあらう、然れど潑刺たる信仰は、婦人等に維持された。而して彼等の鼓吹的道德勢力の全部は、自ら負ふ所深しと認むる制度の恢弘に、果てしなく注がれた。彼等は屢々僧院生活に入らんと欲した。之か實行に難かりし場

合には、其兒女を教會の奉仕に聖別奉獻した。聖別の熱烈は、ベルナードの場合に見るが如く、其感化を其子の生涯に及ぼした。

専ら宗教的出離生涯に入りし人々の中でビンゲンに近きルーベルツベルグ修道院の尼院長、ヒルデガルドの右に出づる者はない。ベルナードは名聲の日盛りに、法王の特別な注意を彼女のの上に促がした。ネアンデルは其普通歴史とベルナード傳とに於て、其浩瀚なる紙數を少なからず彼女の爲に割いた。其時代の道德的特色が、數多彼女の歴史に説明せられる。彼女は其赫灼たる大氣中に優麗又豫言的な數多の事實を齎らす、されば少く此に低徊するを許るせ。高貴なる家門の出ではないが、榮譽ある家系に生れ、乳兒にして修道院に獻せられ、八歳にして之に加入した。幼時より奇異なる光輝を見、又靈的諸權に寄り來るを感ずる癖があつた。彼女は久しい緘黙の故にいたく健康を害したれど、此異様な經驗を深く秘した。四十三歳の頃、語れとの命が天より下れるを感じ、遂に慰藉を得た。且つ不思議な光彩身に添ひて神聖と證せられた。爾來諸侯に對し、主教又は人民に對して、靈に感せし人の自由と大膽と、權威とを以て語つた。彼女の神秘的精神は、獨り宗教の範圍のみならず、音樂の崇敬に於ても顯著であつた。音樂は神の靈の御聲に其起原を有し、地上の諸曲は其反響たるに過ぎないと明言した。然れば此藝術は、敬虔な心的態度で修行せらるべきものと主張し、オルガンに於て遺憾なく奉仕する者を『賢哲』と呼び做した。彼女は亦實際的見地に於ても穎敏にして、宛ら超絶的思想界

の門外漢たるかの如くであつた。彼女は其の意見を求めし一尼院長に書き送つて曰く「人若し禁戒の度を過ぎて其肉體を制慾せば、嫌惡其中に萌し、其嫌惡の故により、適度の營養を許すにも増して、却て放縱の情に惱まされ易さを屢々觀察す」と。他の尼院長に書き送つて曰く「聖書を熟思し、確と把持せよ、聖書は聖靈に植ゑられ又培養せられ。又神の智慧に於て書かれた。聖書は神を見るの鏡である。吾等は神を試みてはならぬ(奇問を發して)。謹んで彼を崇拜すべきである。人は屢々神自らの刺戟によるかの如く、知るを許されざる事を知らんと欲し。斯くて神の服従を離る。此方彼方に失敗するを見て惡魔はいたく歡ぶ。敵は屢々人の心情に此の如き矢を發ち。之によりて神を誤解せしむ。斯る事を欲せざる人、其矢を受けざる人、死の苦悶の中にも神の事物に生くる人は幸なる哉。——善事を爲さんと欲望は、精神を花咲く樹木の如く美しからしむ。熱心以て善事を爲すは、果實の實る樹木の如く遙に善い」と。

當時ベルナードの承認せし如く、ネアンデルも亦此非凡な婦人に豫言的先見の力ありと認むるが如くである。其眞偽は兎もあれ、教會及國家の惡弊を識別し、此等を指摘批議して恐れなかつた。神の御旨を解釋し精神的宗教を主張するに於て、彼女は確かに一豫言者であつた。コロンの副監督及牧師に嚴厲な手簡を送り神の復讐爲に彼等の頭を撃つべし、彼等神をも人をも恐れず、又不義を憎まざれば、彼等肉慾に従ひ、神の榮と魂の救の爲に勞せざればなりと戒めた。彼女の修道院の權利を侵害

したるメリアンスの牧師にも同じ嚴厲もて書き送つた。如何なる位階も如何なる權勢も若し其生活が福音的精神を顯はさずば、彼女の熱烈な抗議と骨を刺すの非難を免るゝものはなかつた。彼女の述作が此に審査せられ、又其人物と事業に就きてベルナードが自己の見解を言明したるトレイヴの會議が終へてから、法王エウゲニウス三世自ら筆を執りて、神によりて行はれたる新しき異能をいたく驚愕した事、神は其聖靈をもて彼女に満たし、見えざる物を見又啓示することを得しめたといふ事を書き送つた。神學者の議論も彼女には兜を脱いだ。當時の君主中最も大膽で又宗教的服従には容易に傾かざりし一人なる、皇帝フレデリク・バアロツサも、彼女には尊敬を拂ひ其助言を求めた。富も位も武力をも有せざる纖弱な一婦人が、其長壽なる生涯を通じて現はしたる、精神的勢力によりて退隱勤學の人のみならず、粗暴なる兵卒にて、勇武なる貴族にも倨傲なる皇子にも、尊敬を獲得し服従を誘引し、彼女の唇を通じて神の言を求めしめたるは、以て當時活動し掛つた善勢力を説明するに足りる、彼女の著名な物語は、其自身、道德的光彩を時代に添へる。

修道院に入らで、城郭の内又は寒門の家庭にて身を家事に任せたる人々の中には、アンヒニムの母エルメンベルガの如きがあつた。或はサルツブルグの大監督エベルハルトの母の如きがある。此婦人は常に施與と祈禱とを事とし、彼女の願通り己が所有地に會堂の建築せらるゝや、素足の儘で、壁石を運んだといふことである。

ベルナードと永く親交を有したるビーター・ズエ・ヴエネラブルの母も亦此種の人であつた。オーヴエルギウの屈指の家柄である。豫て修道院に退かんと切望したれど其夫の存命中は貞節を盡して望を果すことが出来なかつた。夫の没後、家事の整理を終へ、最後の墓參をも済して、富貴も榮譽も世の快樂も及ばない安息と慰樂とを得んが爲に、マルシニーの大修道院に向つた。其子に對する母の感化は柔和、智慧、勇氣、敬虔を以て世に知られたる修道院生活に既に彼を指導した。彼は其母の歿後、感恩嘆美の基督者的優しい談話體で、母の事を兄弟に書き送つた。

粗雑暗黒の世紀の真中に、基督教婦人が教會に大なる勢力を有したといふ事及び彼等の言の感化が、其子等の進路を指導し社會を教育するに於て、屢々偉大な勢力となつたといふ事實を明かならしめんが爲め、多數の中から以上の實例を引用した。此一般的事實の光の中に、信實、高雅、敬神の婦人、前掲の何れにも比肩すべく、其生涯の效果に於ては誰人も凌駕することの出来ないベルナードの母アレツタを置かんとする。

ブルダンチーの公爵家に血脈を有する歴々たる家系の出。夙に修道院生活を志したれど、兩親の命により十五歳の時、フオンテータの騎士テスランの許に嫁し、六男一女を擧げた、自分だけは城中に在りて修道院の規定を守つた、己が職分にかゝる一切の記憶と子供等に拂ふ勞働の中にも、自ら貧家を歴訪し、窮乏者と病羸者とを搜索して、食物を與へ、病者を勞はり、手づから彼等の碗皿を洗

ひ、召使の手を借らずして彼等の爲の賤務を果たすを常習とした、取分け傳へらるゝは、其子等は神に捧げしもの、實に神の御爲に生みたればとて、母の乳と共に母の精神が注入せらるゝだらうと信じ然る身分の慣習に従はず自ら哺育したといふことである。取分け第三子メルナアドは、眞理の驍將たるべしとの夢兆ありしことゝて、全心全力もて基督の奉仕に獻げた。此事實の影響は、彼の生涯に歴然として顯はれをる。

神より選ばれし此婦人の敬神貞淑なる生涯には、餘り澤山の椿事は記されてない、唯臨終の物語に就てのみ、其甥の記録せし者が今に遺されてある。フオンテニーヌの教會の守護的聖徒、聖アムブロシアン祭日には、附近の教職を館に招待するのが彼女の常例であつた。死に先立ちて不思議にも、其祭日に此世を去るべしとの強い豫覺が起つた。此事を夫と家族とに告げたれど、祝祭の準備は中止せず延期もしなかつた。祝祭の前夜、事實烈しい熱病に罹つた。翌日聖餐及終油の禮典を受け、會合の教役者が晩食の終るを待ちて床邊に集はしめ、末期の切迫を告げて、永眠の連禱に聲を合はせた。悲壯又雄壯な祈願「爾の十字架と苦痛とによりて、おゝ主よ、彼女を赦るせ」に達するや、其聲は絶えた。然れど其手を舉げて空中に十字架を畫き、安らかに其靈を渡した。恐怖も悔恨もなく、信仰の平安に於て天の使の歡迎を受けんとて去つた。

遺骸は、チジョンなる聖ベニグヌスの修道院長から、院の珍寶にとて所望され、垂首流涕其所に送られた。途すがら十字架、蠟燭を持ちたる民衆に迎へられ、非常なる歡喜と尊敬とをもて大廊堂に安置せられた。後クレールヴォアの僧徒が大修道院長の母の遺せる「聖體」の全部を乞ひ之を受取るに至る迄、一世紀半其所に留められた。

古記より取りたる此簡單優雅な物語は、女性の慈悲及び敬虔の美が當時認められずして、政治及武器の軋轢、災難のみに人心が占領せられたりと想像する人々の答となすに足ると思ふ。

若しも母の願望、祈禱、基督教的助言が其子の品性と行動とを定めたとすれば、メルナアドの母は彼の品性と行動とを定めた。母の死は未だ幼年の頃であつたが、その面影は何時迄も彼の目に鮮明であつた。彼は母の言を記憶した、己が爲の母の計畫をば哀慕の情もて默想した。一度ならず母自ら彼に現はれたと感じた。修道院生活に最後の獻身が即座に實行せられたのも此やうな印象に關係する。彼は母の存命中はシアーチロンの中央寺院學校に送られた。優雅と天才と好學と儕輩に抽んでた。當時既に獨居を愛し、表面の榮華を厭ひ、多辯ならず、思慮深く、親切亦從順、信實亦慎重、神に對して熱心、注意を以て兒童の純潔を保つ者を注目した。彼の身の窶みは、當時から既に婦人の如くに細心であつた。而も丈夫の烈情を其中に有した。

母の死後目の當り此世に向へば四條の別路が其前に開かれ、成功利達は何れを追ふとも疑なき所であつた。其優麗なる風采、高雅にして人を引くの態度、之に兼ねるに活潑なる心意、大膽なる精神、

他を號令するの力ある彼の如きには、宮廷と陣營とが、莫大なる富と位と快樂とを約束して、有ゆる機會を提供した。若し此兩者に志がないならば、駭々として重要な度を増加し、遂には大學にまで發達すべき當時の學校が、其天才に大なる誘引の舞臺を展開して居る。此に巧妙なる辨證法と默想の力と、天然の雄辯とを、充分に發揮することが出来る。彼は此誘引を自ら感じたのみならず、兄弟朋友、いたく之を勸めて、最後の判斷は結局延ばさせた。次に若し苟も特別の宗教生活、即ち教會と教會の職務と榮譽、其巨大なる建物、赫灼たる特權、多大の役得を選ふならば、王者の如き位地、歳入、名譽は、心に任せて得らるゝのであつた。他人は努力して此の機會を得るに力め、彼は勞せず求めずして之を得られる。本來野心に満ちたる人ならば、欣然斯る機會を捉へたであらう。

然るにベルナアドは是等の一切を顧みず、嚴厲刻薄な修道院生活を選んだ。而も田園は斧鋌と耒耜とによりて僅に荒蕪を離れたる、四隣荒涼の名もなき貧寒なる新設の修道院を選んだ。斯く決したるは明かに母アレツタの全靈全生が彼に與へたる印象に基く。謹慎柔和なる彼女には、絶大なる品性の光輝があつた。其熱心なる敬神の念は遺骸の上に生き残り、死に打勝つた。母の神聖なる記憶が其子に鮮かにして、彼が大事の選擇に立迷ふ時、長嘆訓戒して、彼の面前に立つが如くであつた、ベルナアドが獻身の情は燃ゆるが如く、弟アンドルーをも説伏せんとて之と論談を交ふると、彼が火の如き言に動かされアンドルーは突如として『母上が見ゆる』と叫んだ。ベルナアドも鮮明な同一現

象を自白した。父より承けたる男性的な横風な精神と結合はすれど、アレツタの熱烈なる道德的生活が彼に於て圓滿に複寫されたと感じざるを得ない。正義の念、公人的才能、號令的手腕、忍耐、精力はテスランの特色とする所で、敬神の感性、精神的熱烈、義務と真理の直覺はアレツタの分與する所。此兩者の結合に、彼の名を不朽ならしめた天才と品性と事業との秘密が存する。

彼の容貌、姿勢、態度にすら、父よりも母の方が再現されたと感じざるを得ない。幼年には容姿温雅、容貌佳麗、態度優美と認められた。後年のことは次の如く記さるゝ、身長は殆ど中脊なれど長身に見え。瘦身にして金髪を頂き赤ばめる髻は老いて霜を混じ、頬は潮紅し易く、目は涼しく且つ鳩の如く、容貌に獨特の光輝あり、全體の容姿は、精神の優美より來れる心を奪ふの魔力で漲つた、彼の肉體の孱弱を見而も彼の勞力を知れる者は、宛ら耒耜を曳かんとて装はれたる小羊の如くに感じた。然れど彼は修道院の總ての作業に携はり、而も外末の山なす勞役を身に負ふた。彼が激勵して語る時は、身體の輕弱は跡なく消散し、變貌したるが如くであつた。其子の爲に心を籠めて祈り、其生涯に多大の刺戟と抑制とを與へたる母が、其子の風采にすら再現したことは明かである。

然れど外貌の優麗よりも更に多くをアレツタから遺傳された——即ち天上の性質を帯びたる靈性が是であつて、智力と果斷とが其に獨特の結合をなした。當時の諸大家と彼とを判然區別するものは是であつた。一代の間歐羅巴に於ける威風雙びなき人たりしは、主として之が爲であつた。

テスランが周囲の光景に自然の美を感じたか否かは知り難けれど、彼の法官的武人的の氣風と日常生活とから推せば目に見ゆる神の御業に、ベルナードの感じたる深遠な喜樂は、其母から得たものと推考せざるを得ない。彼女の多感と精緻と優雅と反應的精神と何所にも神を尋ね索めたるは百事に明かである。而して城西に連亘する、丘陵「黄金の斜地」と、其間に横はる明瞭なる風景とは屬々彼女の眺望せし所なれば、山水の感化が其生活に入つたと言ふことと、平和、昂騰、快樂、又天上の豫想すらも、其れと共に彼女の魂に齎らされたといふことを。啓示を受けし彼女の目には、神の善が、透明な幕の如く、其を通じて鮮明であつたといふことは有り得難きことではない。果して然らば、數年の後其子が、聖書と其靈的意味は、榊木と榊との外に良師なき林野に於て、黙想と祈禱との間に得たる者と云へる其本意を解することが出来る。同じ意味で彼は、煩瑣哲學の碩學、後にヨルクの大監督たるムールダツハのハインリヒに書き送つた『經驗によりて學びたる人を信せよ。君は書籍よりも林間に尙ほ大なる者を發見すべし。樹木及岩石は人の師より學ぶ能はざる者を教ふべし。石より蜜を搾り、燧石岩より油を搾る能はずと考ふるか。山は甘味を滴らし、丘は乳と蜜とを流し、谷は穀物種々たるにあらずや』と。彼の最上教訓は、常に其學んで倦まざる聖書から得た。然れど大教訓と神來の暗示は、神の貴き愛の御業に之を得た。彼は當時最多忙の人にして、宗教的、世俗的大運動が、絶え間なく彼の注意を促せし間にも、田園の趣味を保存し、其舊知『牧場や小森、水の流地とよしなへて見なれ

し者』を棄てなかつた。都會は彼の精神を壓迫した、靜肅平和の自然界は之を復活せしめた。然れど是よりも更に重要な特性、更に深き特色が、母の遺傳を表示する。彼の情深い性質より出でたる柔和と熱切とである、此特性は彼の傳記を學ぶ者の忘れ難きところである。弱年の親戚ロベルが、安逸放縱に迷ひて、有福なるクルニーの修道院に入らんとてクレールヴォーを去つたときが、其一例である。ベルナードの情は此服従の爲に有形界の災害よりも甚しき打撃を受けた。而して目的の峻嚴を欠ける此門生の靈的安全の爲に憂慮に堪へなかつた。其時認められし書簡は宛ら艶書の如き熱情あり、宛ら一篇の論文の長さであつた。『我は最早我悲哀を包むに堪へず、我憂慮を隠すに堪へず、我悲嘆を偽はるに堪へない。然れば正義の順序には反すれど、傷けられたる我が、傷けたる彼を呼び戻さんとして已むことが出来ない。輕せられたる我が、輕じたる彼を追求せねばならぬ。害を被れる我が、害を來らしたる彼に満足を申込まねばならぬ。略言すれば、寧ろ我に哀願すべき筈の彼に、我から哀願せねばならぬ。然れど悲哀は熟考を重ね。屈辱を認む。道理に諮るの違はない、品位を貶すを恐れない。規則に依らない。正しき判断に従はない。方法と規則とを無視する。全心は其が得んとして惱む所を免れんとし、其が求めて悲む所を得んと欲する此一事にて占領せらる……我は悲慘の者なるよ。何となれば汝を失へるが故に、何となれば汝を見ざるが故に、何となれば汝無くて生くるが故に。汝の爲に生くるは我の生命である、汝無くて生くるは死である。唯歸り來れ。總ては平和とな

る。歸れ、我は安息を得べし。我言ふ、歸れ、歸れよ。然らば我欣びて『死したる者生き、失はれたる者見出さる』と歌はん。汝の去りたるは言ふ迄もなく、我過にもよるであらう、またかよはき若者に對し我は嚴厲に過ぎたであらう。我自ら苛酷もて汝の柔和を遇したるは苛酷に過ぎた。……我言ふ所は、我子よ、汝を困しめんとて言ふのではない。親愛なる我子を論さんが爲である。設令汝基督に於て多くの師ありとも、多くの友を持たぬ。若し汝然か言ふを許さば、我は教訓と實例とをもて、宗教生活に汝を産んだ。汝の爲め寸毫も勞せざりし者が、汝に於て誇るは汝を如何で喜ばしめんや』是は一部の拔萃である。全文は情緒亂れて糸の如くである。僧徒間には斯く傳へらるゝベルナードの多くの書簡同様に、書記をして屋外に於て羊皮紙に記さしむ。其時、驟雨の襲ふ所となりて周圍は悉く濡されたるに、此數ページの愛の焰は毫も之を濡れざらしめた。此故に書簡集の劈頭に置かれたと。奇蹟は或は疑ふことが出来やう。感情の焰に至つては現存する。此の書簡も即効は顯はれなかつたが、其人は後にクレールヴォアに還つて、爾來其所に居住し、又多年フサンソンの教區なる一修道院の院長たりしとは、聞くに愉快なことである。

或點に於て更に著しくベルナルの非常な温情を見るべき他の實例は、彼が四十七歳の時、クレールヴォアの修道院に歿したる兄弟ゼラールの死後の説教である。初は規則整然例の如く其務を果たし、其平靜は一見情に動かさる者の如くであつた。彼の習慣として説教に取懸つた。説教は雅歌の講解にして其日の聖句は『ケダルの天幕のごとく、またソロモンの帷帳に似たり』であつた。然れど聊かの前置きを述べて、講解は熱情悲哀の火山的爆發を漲らした。左の拔萃は之を示すに足るであらう。

『然れど我悲哀は終止を命ずる。不幸は忍ぶに餘る。我哀腸を燬がし、我生命を燒盡す内なる焰を何時迄か伴はり又匿さん。固く之を鎖せば私かに膨脹し、猛烈に荒れ狂ふ。悲嘆の淵に在るの我此雅歌を如何かすべき。猛烈なる悲哀我目的を妨げ、主の憤り我靈を飲み盡す。彼は我手より取去られた、彼、我前に在れば我が神の研究は常に自由であつた。彼我と共に在れば我眞情は我を見棄てた。然るを今迄は感情が信仰に打勝つて見えざらしめんが爲め、我魂を強制し今に至る迄伴はつた。人の涕泣するとき、我は乾ける目もて見えざる屍骸に隨行した。葬儀の行はれし間我は乾ける目もて墓に立つた。司祭の衣を着け、我唇もて慣例の祈を果たした。習慣に従ひ、我手をもて、同じく土に化すべき聖者の屍骸に土を投じた。我を見た人々は泣いた。而して我泣かざるを驚いた。人は皆、彼にあらで彼を失へる我に憐憫を寄せた、ゼラールに生殘る我を見ては、縱令頑鐵であらうとも、誰の心か、動かされざらん。我等全骸に實に共通の損失はあつた。然れど我一個人の哀別には比ぶべくもない。然るを如何なる信仰の力もて我感情をば支配し之に逆らひ。自己に對して努力し、漫りに動かされざらんとはしたる。唯是れ自然の配付、總ての人に負へる負債の償却、我等人類の普通の出來事。其命

令は力あり、其審判は正しく、其打撃は怖るべき主の聖慮によれるのみ。斯く考へて、如何に烈しく攪き亂され、如何に悲嘆に満さるゝとも、涕涙を忍ばんと自制した。……然れど彼の外誰かは分けて必要なりし。誰によりてか、彼程には愛せられたる、彼我骨肉の兄弟にして、それにも優れる宗教生活に於ける兄弟であつた。我は肉體虚弱であつた、彼は我を扶翼した。我は精神薄弱であつた、彼は我を諫めた。我は不精怠慢であつた。彼は我を激勵した。我は不注意又健忘であつた。彼は我に忠告した。嗚呼何故に我より引裂かれしぞ。何故に我腕より奪はれしぞ。——我と同心の汝よ、我に同情の汝を。我等聖に於て相愛し。何故死によりて割かれしぞ。嗚呼最も傷ましき死の外爲す能はざる別離よ。我未だ生に居るに、生けるセラールは誰の爲にか我を見棄てたる。是は皆死の仕業。此の恐るべき離別よ。總ての佳快の敵なる死のみの外に、誰か佳快なる相愛の契を結ぶを惜まざる。——我問ふ何が故にか我等は愛し又何が故にか失へる。堪へ難き状態よ。然れど憐れむべき運命は彼にあらで我身の上である。何となれば汝親愛なる兄弟よ、汝は此に汝の愛する者に別るゝとも、更に優りて愛する者に相會ふべければよ。然れど我慰藉者たる汝の去りたる後は、如何なる慰藉か我に遺れる。……我も疾く死して汝の跡を追ふともよしと誰かは我に許すべきか。汝の座に死なず汝の榮譽を騙取せざれば、今より後汝に生き残るは努力又哀傷である。我生くる限りは、魂の悲哀の中に生くるのである。我は悲嘆に生くるのである。而して我悲哀によりて我も亦倒るれば必ず我慰藉であらう。……流れ出

でよ。流れ出でよ。汝熱涙よ流れ出でよ。汝の路を妨げたる彼自ら消失したれば、懊惱たる頭の早瀬を切り開き泉をして噴出せしめよ。若し或は神の怒を受くるに足れる罪の汚れを洗ひ去るかも知れぬ。……然れど我涕泣は不信の標號ではない。人間の表號である。打たせて哭くが故に打てる者を咎むるのではない。言は悲哀に満つとも其中に怨言はない。善且つ義なる神は萬事を善くなし給ふ。汝に歌はんオ、慈悲と審判の主よ。汝の僕、セラールに示し給へる慈悲が汝に歌はん。我等が受くる審判も亦歌はん。一方に正義なる如く他方に恵み深き汝は願ひべき哉。……然れど涙は復た我言を終止せしむ。オ、汝、オ、主よ、涙の限度と終止を命せよ。

此の長文からの断片的抜萃すら、ベルナードの深い温情と、溢るゝ熱情の一端を覗ふに足りる。而して是は柔和、敬神、雄壯の母の胸からの往ける遺傳である。彼が一方最強者には強きと共に、熱情の婦人の如く激昂し又愛に溺れたのは、彼女に之を負ふたのである。而して或は嘆息し或は悲傷し、或は基督者勝利の絶頂に上れるは、彼の中なる母の靈であつた。同じ優麗の特性、女性的なれど女々しからず、柔和なれども勝りて雄壯なる特性が、總て彼の品性と生活とに顯はるる、其は野心肉慾の誘惑と奮闘したる彼の發程に明かである、彼が同心の記事は之を我等の前に躍如たらしむ、敵城を圍める、兄弟等に参加せんとて、彼はブルグンヂー公の陣營に馬を進めた、其時失望と非難の色ある母の姿が彼の魂を占領した。祈りぜんとして路傍の一寺に退い

た。諸手を天に擧げ瀧なす涙もて、神の御前に其心情を吐いた、此時より全然宗教生活を送らんと彼の進路は確定し、彼の目的は不變であつた。學業の魔力も彼を抑止する能はず。教會の位と富とは毫も彼の意志を擾だすことが出来ぬ。社會にも陣營にも、聖別生活の志望を蠱惑する何等の引力がなかつた。兄弟等の許に到達するや、刻下の熱心をもて。彼等を促し、彼に與せしめん欲した。而して不思議な成功を得て歡喜措く所を知らなかつた。一々彼の苛立て、熱誠に服して、彼と共に一つの和合團を結んだ。第二子のセラールは其死別に於ていたくベルナアドを哀哭せしめた人である、思慮賢明、行動不敵、名聲拔群の青年勇士にして味方となすに最も困難と知られたが、彼の抵抗すら久しからずして讓歩した。ツイロンの領主なる叔父も、ベルナアドの嚮導に附隨した。家庭に友と戯むれた最年少者のニヅアールも、久しからずして兄弟の跡を追ふた。斯く精神的結合をなせる人々と取敢へず或教會に登つた、ベルナアドの耳にせし朗讀の聖句は「神は信實なる者なり。爾曹の中に善工を始めし彼自ら、耶穌基督の日までに之を全うすべし」であつた。彼には天より直接に降れるが如く思はれた。羅馬の陣營から數世紀前老使徒の書きたる言を通じて、神の靈が直接に彼に物言ふと思はれた。然れど此高情多感の士の自信と感情とは、毫も一時的偶發的のものでなかつた。彼の熱心は、深い又道德生活に根を下して居つた。此故に熱烈なると共に永續的にして、如何なる障害にも屈せず、如何なる反抗にも辟易せず、又如何なる道も、最上目的にだに導かば遠きに過ぐるはなく、難きに過ぐる

はなかつた。彼の愛情は柔和、彼の感情は奔放なるが如く、彼の勇氣も亦完全、彼の忍耐も亦非常であつた。人の安寧、神の榮光の爲に、何等かの奉仕犠牲が必要とさへ見れば、何時にても實行するの覺悟があつた。而して如何なる義務の遂行にも、力一杯の努力を以てなしたれば、黨與をして必勝を豫期せしめ、又彼に抵抗するの不可能は石弩を發したる石を停むるに等しかつた。其精神其目的に於て徹頭徹尾摯實無私なる彼以上の人が、使徒以來存在したとは思はれぬ。狡計暴虐の恐怖より來る制裁に束縛せられざる彼以上の人が、曾て此地を踏んだとは思はれぬ。

其領土内にクレートツォーの修道院を有する、シヤンバーニーの伯爵が、臣下の一人に損害を蒙らせた。其家族の災厄に心を動かされたベルナアドは、初は其償却を伯に申込み、次に州内の誰人も敢てせざる嚴烈なる書面を彼に送つた。「我若し金銀若くは其類の者を汝に求めなば、相違なく其等を受けたであらうと思ふ程、汝を信頼する。露も求むることなく、汝の豪俠よりして數多の賜物を受けたりしに、然るを何故「我求めたらんに」と我いふや。我爲の故にあらず、唯神の爲の故に、我自身の故にあらず寧ろ汝の故に、我が汝自身から求めたる此一物、我が受くるに足らざる如何なる道理か存する。……「爾曹が度る所の量をもて爾曹も度らるべし」との聖書の言を恐れざるか。汝がヒュンベルの相續權を剝奪した程容易く——然り、比類なき容易さもて——神は天の相續から汝を逐出し得ると知らざるか」と。伯は剝奪したる權利と物件とを當人に還さんと約束した。然れど利得者の反對から

して其實行を等閑に附した。仍でベルナードは再び書を送り。事に忙はしき人を煩はすの氣の毒なるを述べ、借言うやう『若し我再三の書簡によりて汝を立腹せしむるを恐るゝならば、況して艱める者の爲に執成をも怠りて、いと尊とさ神を立腹せしむるをや。汝はヒュンブルの辯疏を容れ、及彼に對する誣告を斥けたる、此事に於て汝より蒙れる愛顧に對して我感謝を酬ゆる。然れど彼が妻子の嗣業は彼等に還すべしと汝が判決したるに拘はらず、何者が其尊き宣告を之に伴ふ實行より妨ぐるか怪しまざるを得ない。……彼の汝を貴ぶは虚偽にして眞實でない、彼の助言は詐欺にして信實でない。彼は自己の貪婪の爲に、汝が誠實の名聲を蔽はんと企てた。彼は可憐なる貧者に己が目的を成就せんとて、汝の唇より發したる言、神を喜ばしめ、汝自身に相應しく、宗教的に正しく、正しく宗教的なる其言の意味を空しからしむ。汝の約束の眞實が充分に示されんが爲め是を實行せよ。ヒュンブルの嗣業をして其妻と其子等に還付せしめよ。』州内の有力無責任なる君主、ウヰリアム、勝利者の孫、財寶軍兵二つ乍ら裕にして佛蘭西王と互角の戦を爲すべき彼も、正義を行ふに遅々たるときは、ベルナードには農僕にも等しかつた。其の個人的親切も、彼の精神を晦ますことが出来ない。況して全力を盡すとも之を嚇すことをや。

更に著しき不敵の實例は紀元一一三五年に起つた。傳記中の最も著名な一つにして、殆ど小説の紙面に屬するの觀がある。アキテーヌの公爵ウヰリアム、其領地はボアツト。リムトサン。舊ガスコ

ニ公國に擴がり、西南佛蘭西の豊饒なる地方を包括し、更に廣大なる傍系的君主權をも有する、此ウヰリアムが曾て若干の監督を其位より逐ひ出し、自分の身方を之に充てた。彼は長大にして膂力絶倫威風四邊を拂ひ、粗暴、淫蕩、馴致し難き氣質の人であつた。其廣い領内に彼を制すべき一の權威がなかつた。而して彼の禽獸的生活は宗教に對して常に輕蔑の態度を取つた。四年以前ベルナードは、既にシヤテリエーの修道院に於て彼と會見したが、持續的印象を與ふことが出来なかつた。公は此熱情僧に目醒まされたる悔恨の情を採消さんとするもの、如く、一層甚しく其呪ふべき生活に立戻つた。分けてもボアクチエーの監督に對しては殆ど狂熱を示した。無慈悲、兇暴、制し難きに加へて有ゆる人力を藩屏にしたる此惡漢に、法王の使節を命せられたるシヤートルの監督ジュオフレ一の同伴として、ベルナルは、再び會見するに至つた。剛愎不逞の公は、インノケントを法王と認むるに同意はしたが、廢黜せる監督等を其位に還すことは謝絶した。彼等は宥恕し切れぬ程彼の氣を損じたのであつた。彼は必ず彼等と調和せずとの誓を立てた。殆んど熱帯地の嵐を説き伏せ、野獸に議論をし懸くるが如くであつた。ベルナードは無用の辯論を止め聖餐禮を執行せんとて教會に向つた。公は教會の譴責の下に在る人の如く、戸口近くに留められた、會衆が聖別せられた時、ベルナードは其手に聖碟を捧持したま、輝やける面、憤懣威嚇に燃ゆる目をもて、つか／＼と彼の前に進み寄り、怖るべき權威の語調もて言つた。『我等汝に求めたるに、汝は我等を斥けた。神の僕の此一團が別所に

汝に會して哀願したるに、汝は彼等を輕じた、見よ、汝が迫害する聖母の子、教會の頭、又主、此所に汝に來る。汝の審判此に在り、天の上、地の上、地の下に在る總ての膝は其御名に屈まん、汝の審判此に在り、汝の魂將に其御手に渡されんとす、汝亦彼をも斥けんとするか、彼の僕等を輕んじたる如く、彼をも輕んせんとするか」と。滿堂水を打ちたるが如く、奇蹟の頭上に臨めるが如くであつた。狂暴なる公も精神を刺し通され、手足弛緩して地に倒れ人事不省になつた。扈從の武士に引起され立つことも物言ふことも見ることも出來ず、口より泡を吹いて復た倒れた。ベルナアド起きて神の審判を聽承せよと命じた。其位を追はれしポアクチエーの監督を引合はせ。其場で和睦の接吻を與へ、其の位に還すことを命じた。

膽を抜かれた武夫は答ふるの勇氣もなくなつた。唯命のまに／＼服従して、接吻をもて監督を其位に還した。背後には軍勢あり、己が鐵拳將た權威の一撃でベルナアドを粉碎し得べき彼も、人を壓する不測の意志の進撃には降参した。雷に此時のみならず、爾來飄然として罪を悔い宗教の奉仕をなすに至つた。久しからずして聽ジャツクの廟へ悔悛の參詣をなすに際しコンポステラに歿したと傳へらる。其頑強な精神は畏ろしい會線に破られ又挫がれた。柔和なれども熱烈なベルナルの眼光は彼には後來『火の焰』と呼ばれし其儘であつたらう。

クレールヴォーの修道院長が父と母との二つから得たるに相違なけれど、別ても女性的熱心の火先

が顯著と思はる、其勇猛果敢を顯はしたるは、斯る粗暴の人々に接したる時のみでない、其は彼の語氣に一種の斷定を與へた、ランスの大會議に於て神性の問題が法王及法王樞機員の前で、佛蘭西の博學な教役者と討論せられた、ベルナアドは駁論の對手たる有力な一監督の或言語が書留められんことを求めて、承諾された。然るにベルナアド自ら、討論を續くる間、敵手に荷擔せし樞機員等を怒らしむべき語形を用ゐたれば、苛立てる監督は、彼の言語も亦書留められんことを要求した。『諾』、ベルナアドは、如何なる襲撃も亂すことの出來ない熱烈な決意もて言つた。『其を金剛石尖頭の鐵筆もて記して、岩石に刻め』と。而して語勢を更めて前に言つた通り繰返した。

佛蘭西のルイ七世は、シヤンバーニエ伯を憤りて其州に侵入し、火と劍とをもて之を荒らした。伯のテオバルは其臣下に背かれ彼に對抗することが出來なかつた。ベルナアドは憤懣、譴責の言を王に書き送つた。汝が受けたる善良穩健なる助言より汝は太だ迅速、太だ輕卒に後戻りした。而して如何なる惡魔の教唆かは知らざれど汝が前に悵然たりし不善に、早や再び立戻りたりと聞く。惡魔以外誰よりか此助言は出づべき。其助言によりて火に火は加へられ、殺戮に殺戮は加へらる、貧者の叫び鐵鎖の呻吟、斬殺の血が、父無き者の父、寡婦の審判者たる彼の耳に響いた。斯る犠牲は人類の仇敵の喜びとする所である。何となれば彼は太初より殺人者なれば。……汝は平和の言に傾聽せず汝自身の約束を守らず、賢き助言に注意せぬ。却て、(神の如何なる審判の下かを我は知らぬ) 耻辱を榮譽とな

し、榮譽を耻辱となして一切を曲げた。汝は安全なりし所に恐れ、恐るべき所を蔑にした。汝は汝を憎める者を愛し、汝を愛せんと欲する者を憎む。汝に罪を犯さざる者に對して舊怨を繰返せと汝を煽動したる者は、汝の榮譽を求むるにあらで、彼等の利益を求むるのである。然り、彼等自身の利益よりも惡魔の歡心を求めたのである……人類の殺戮、家宅の燒棄、會堂の破壊、貧者の離散に於て、汝は盜賊及惡漢に荷擔した。豫言者の言の如く、「汝盜人を見ては彼と共に走り、姦淫の者共汝の所得を取れり」。宛ら汝自らに不善を成すに足るの力を有たざるが如く……斯る兇惡の進行は直ちに止めんことを汝に勸告し且つ信實に助言する。萬一或は悔悛と謙遜によりて、ニネベ王の例に従つて、汝を打たんと準備しつゝある彼の手を止むることもあらん。我言は峻嚴である。是は汝の爲に備へらるる更に峻嚴なる者を恐るるが故である、然れど智者の言を記憶せよ「其友の與ふる創は其敵の偽の接吻に勝る」と。

ベルナードの熱烈壯嚴な譴責は即効を見なかつた。然れど程經て其効は顯はれた。第二十字軍にルイの容易く出軍したるは、此戰役の殘暴を悔恨したるに依る所が多い。彼は後日テオバールと和睦し其女を娶つた。

英蘭の王、ノルマンディーのヘンリーに對しインノケントを法王と承認せんことを求めしベルナードの言語には、憤激的嚴烈は少ないが、道徳的豪膽は少くない。英國の監督等が此事に反對したるが

故に、王は且つ遲疑し且つ實際に拒絶した「汝何を恐るゝか」、「ベルナルは熱烈に訴へた「インノケントを法王と證認するによりて罪に會ふを恐るゝか、汝の他の罪は汝自ら神に陳辨すべしと知れ、此一事は我に任せよ。罪は我身の上にあるべし」と

神の任命を受けたる教會の首領として、崇めたる此の法王其者に對しても、場合の要求あれば、燒くが如き批評と、鋭き抗辨とを書き送つた。インノケント二世が、彼の權威をもてベルナルと結び約束を等閑に附し且つ此事に關しベルナルの送りし書簡も無効であつた。此時クレールヴォーから更に送られた書簡は、顧られず居なかつた。「誰が汝に對して我爲に公平を行ふべき、我若し其前に汝を召喚すべき何等の判官を有するならば、我は直ちに汝が當に我手に受くべき所を汝に示すのであつた——我は苦痛に惱む者の如く之を言ふ、實に基督の法術は此に存する、然れど神は其前に汝を召喚するを禁じ給ふ、我は寧ろ、其が汝に(將た多分我にも)必要であらうとも我全力をもて汝に代つて立ち汝の爲に判官に答ふるであらう、此故に世界に於て目下判官たるを許されたる彼即ち汝自身に立歸り、汝自身に答へん爲め我汝を召喚する、我と汝との間を審判せよ」

同じ法王に場合を異にして書き送れるに曰く「我は眞に愛するが故に忠實に語る……此は忠實を以て民を統轄する我等一同の輿論である。正義は教會に滅び、鍵の力は廢れ監督の權は蔑視せらる、監督は皆、神に對して行はれたる損害に報ゆるの力を有たず、管區内の不法を罰する能はざればと。

彼等は此原因を汝と羅馬宮廷に歸する、彼等は曰ふ、彼等の正しく行へる所は汝の爲に顛覆せられ、正當に破壊したる者をば汝之を再建すと。罪を犯し、争を好む人民又は教役者と、修道院より放逐せられたる僧侶とは汝の許に走り、歸來、激昂の態度もて彼等が所罰者を見出すべき所に保護者を見出したるを誇る。……愚かや、教會の仇敵即ち恐怖將た寵愛の爲に汝が正道から誘はれたる其等の人々の中にすら嘲笑を招き又招かんとする、汝の友は惱まされ、信實なる者は侮辱せられ。監督は到る所凌辱せられ、其正しき制裁は輕んぜられ。別けても汝自身の權威が毀損せらる」と。

己が修道院門下生の一員であつた次の法王、エウゲニウス三世に訓誡の言を書き送つた其は門生に於ける彼自身の生命を知るべき鍵である。「一切の汝の仕業に於て汝は唯人たゞを記憶せよ、王公の呼吸を奪ふ彼に對するの畏懼を絶えず眼前にあらしめよ、短日月の間に如何に數多の法王の死を、汝自身の目もて見しど、此等の先輩をして汝自身のいとも確かなる當來の死を忠告せしめよ。彼等が統治の短時期は、汝自身の日の短きを汝に明言する。現在の過ぎ行く榮光の阿諛の中に、汝自身の近狀を忘れされ、汝が今聖職を繼ぎたる其人々に、汝は又速かに死に於て繼ぐに相違なければ」と。彼は復た短篇沈思録に於て、一層の長文を送つた。定めなき榮譽の欺瞞を拂ひ棄てよ、彩れる華奢の燦爛を輕んぜよ、母の胎より出でたる赤裸々の儘に汝自身を考へよ、汝徽章をもて飾られ、寶石をもて輝やき絹布にて焔めき、羽冠にて覆はれ、金銀の刺繍にて脹らむか。若し朝霧の如くに消散すべき此等の一

切を默想より驅逐せば、此に一人の人汝に顯はるべし、赤裸、赤貧、窮乏、悲惨の人、彼も人なれば悲み、彼の赤裸をば慙ぢ、彼の出生をば歎くの人、榮譽にはあらで勞力に生れし人、女より生れて罪に定められ、其生るるや須臾にして恐怖に滿ち、悲惨もて充滿し、彼等の故に泣きたる人が」と。教會は野心家充滿して、其要求執拗なるべく、若し自ら何等の訴を聞くことありとせば、其は寡婦の訴、貧者の訴を呈すべき賄賂を有たざる者の訴たるべしと彼に忠告し、且つ眞の法王の道德的肖像を確乎又壯嚴に彼の前に掲示した。——感情の躍進をもて書き下したるは明白である、其は言々句々に個別の力あらしめた。

「先づ第一に、汝を首領とする聖羅馬教會は、諸教會の頭にして、其主婦にあらざるを記憶せよ。又汝自身は監督の主にあらずして、彼等の一人に過ぎず、神を樂む者の兄弟、神を恐るゝ者の共事者たることを記憶せよ。餘は汝自身、左の責任の下に在る者と思へ。即ち正義の肖像、神聖の鏡、敬虔の模範、眞理の爲自由の回復者、信仰の擁護者、國民の教師、基督者の嚮導、花舞の友、花嫁の介添、教役者の主幹、人民の牧師、愚者の主人、被虐者の避難所、貧者の辯護士、受難者の希望、孤兒の保護者、寡婦の判官、瞽者には目、啞者には舌、老者には杖、罪惡には復讐者、惡事には恐怖、善には榮光、有力者に對する笞、暴君に對する鐵鎚、王者の父、律法の指導者、宗規の管理者、地の鹽、世の光、至上者の司祭、基督の代理、主の受膏者、我言ふ所を記憶せよ」附記して曰く「主は理解を汝に與へ

給ふ」と

法王の權威が廣く大陸を掩ふに至れる、混亂、野心、恐怖の時代に於て、最高位に屬する義務を法王其者に憚らず提出せし此の如く人を出したるは決して無意味でない。亦彼自身の基督者魂及奉仕の理想が、自ら其言の中に明示せられた。彼は法王の書簡に於て、不知不識彼自身の輪廓を描いた。

彼の勇氣は主教、王公に對するのみではない。兇徒の狂暴に對しても顯はれた。而も勇猛に匹敵すべき同情が之に伴ふた。次の一例は之を示すに足りる。

ベルナアド時代の西歐羅巴に於ける猶太人の状態は今日の我等に殆んど合點し難い。主の殺害者の後裔、機會あらば欣然其罪惡を反覆すべき者として前代の宗教が彼等を憎み又呪ふた。商賣又は高利にて得たる富は、猛烈なる嫉妬の中に彼等を露出し又彼等に欺かれ若くは凌駕せられたる人々の復讐心を促した。彼等は蔑しまれ又棄てられて、猶太袋若くは佩囊の城砦内に銷沈した。粗末な外衣が屢々千百の惡漢を垂涎せしむる富を包んだ。其黒ずめる面色とセムの容貌とは彼等をガリア・チユートの人民から除け者にした。彼等は他の住居する所に住居が出来なかつた。彼等の罪惡に關する恐ろしい風説が容易く信せられた。假令ば基督者の兒童を窃み私かに磔殺し其臟腑を魔術の目的に供したとか、又基督の實體の表現せる聖麵包を窃み、鑿もて刺し、油にて煮、或は炭火に熔つたとかいふ類で

ある。庶民は動もすれば常軌を外づれた狂暴を彼等に加へる。彼等若し逃ぐれば有罪の證據と見做され、若し止まれば片意地及惡意的反抗と罪せられた。誰人も憎惡的嫌疑を蒙らずして彼等の爲に仲裁が出来なかつた、ピーター・ズエヴエネラブルの如き賢明善良の人すら、彼等は教會の聖器から物を取り賤しき使用に供すと非難した。而して漫りに殺せとは推薦しなかつたが、彼が見積りたる彼等の罪科同量の刑罰を受くべしと助言した。生命は容赦すべし彼等の金錢は沒收すべしと。

別けても、十字軍を振起したる氣風が、歐羅巴を猛烈に風靡したる時に猶太人に對する憎惡が沸騰點に昇るのは自然であつた。『パレステナに十字架の敵を殺すか、必ず然り、然らば何故、カルバリに基督を驅りたる暴徒の子孫、此等貪婪、汚穢、鉤鼻の徒を、我等の市街に於て第一着に殺さるるか彼等を殺せ。然る後之に次で厭ふべきサラセンを殺せ』強情殘忍なる日耳曼僧ルドルフが、此内國十字軍を企つる主の任命を受けたりと公言し、ライン沿岸に『猶太人に死を與へよ』と説教し、忽ち雲霞の如き黨與を得た、時代氣質は斯る有様であつた。コロイン、メリアンス、ウォルムス、ストラスブルグから、パレステナ第二遠征の爲に集まれる數千人は、其銳鋒を猶太人に向けて夥たしき殺戮を行つた。殆んど一人だに遺されざる有様であつた。慈悲深きメリアレンスの大監督も、此殺戮的狂熱を遏めんとして寸効が無かつた。それからクレールヴォアの修道院長に援助を求めた。ベルナアドが其大監督に送れる書簡にはルドルフと其の行爲とをいたく非難し、其人物を無情、無耻なりとし

彼が非情の痴行は十目の見る所、彼は説教の役目を横領し、權威を蔑視し、殺戮に免許を與へたと記した。附記して曰く、「教會は日々猶太人を心服せしめ、回心せしめて、剣もて立どころに全滅を加へたらんよりも、更に莫大の勝利を得、不信なる猶太人の爲に日の出る所より日の入る所に至る萬國の教會に於て、神彼等の心より覆面を除去し、暗黒より真理の光明に導き給はんことを祈りて止まざるは、何の故ぢや、今は不信に居れども、眞の信仰に達せんことを望むにあらずば、彼等の爲に斯る祈禱を捧ぐるは如何ばかり蛇足又無益のことか」と。ルードルフの教理は、彼自身のものにあらずして、彼を遣はせる父なる惡魔の教理である、彼は殺人者、虚言者、虚偽の父なる其主人に比肩するに足る。「オ、奇怪なる教理よ」。彼は附加した「オ、何たる兇惡の助言よ、豫言に逆行し、使徒に敵對し、事實、敬虔、恩寵の一切を壞亂する助言よ、——教理の瀆神的娼婦よ、虚偽の眞精神とて受胎し、苦惱を孕み、邪曲を産み出す娼婦よ」と。又猶太人は迫害、殺害、流竄せらるべきでないとい書いた。「彼等は萬國民の中に散らされた、是は彼等の罪の正當の贖罪をなすと共に、我等の贖罪の證人たらん爲である」と。基督者の高利貸は、若し實に基督者と稱せらるべく、寧ろ受洗せる猶太人と稱すべからずば、猶太人よりは更に惡しと宣告した、而して高慢に打勝ちて卑き者を宥恕し、別けても律法と約束とが與へられ、教父等を其有とし、肉によれば基督も其中より出で給ひし其人々を宥恕するは、基督敬虔の一端なりと主張した。

彼の抗議は嚴烈なりしかど、殘忍なルードルフと無智狂暴の人民とに効がなかつた。仍こで自らメーアンスに往きてルードルフに面會し、前にアキテヌのウイリアムに爲したる如く彼の精神を打挫いた。ルードルフが采配を棄てしが故に益々荒立てる暴徒にも面會して、萬軍の力も及ばぬばかりに之を追ひ散らした、彼は猶太人を壓殺から免かれしめた、其徳は彼等の感佩した所である、實に彼の言動は爾來教會諸權の猶太人に對する態度を改ためしめた、又常に此被害民の擁護であつた。

教會を離れ、又不眞面目有害の説を立つる異端派の人々にすら、彼の精神は不憚を加へた、彼等に即決處分を與ふるは彼のいたく悲める所であつた。曰く「彼等は武器に由らで議論もて壓服すべく、教訓と説得とをもて信仰に立戻らしむべし」と。斯る方法が効を奏せざるときのみ、統治者は腕力に訴へて、災害の傳播を防止すべきである。

彼の個人的默想に於ては、基督の主たるたと榮光とよりも、御受難と穩和なる招致とを默想し勝ちであつた。勿論此種の默想は當時彼のみに限られ基督者經驗の珍とすべかりしといふのではない、然れど當時に勃興、傳播して、大に後數世紀を支配したる煩瑣哲學の風潮が、自から幽玄な問題に忙しく、實際的利害を遠ざかれれば遠かる程人心を引いた、主の御生涯別ても測り難き御苦難の默想より來れる、篤い信心、勇しい奉獻の鼓吹が之には皆無であつた。一方を願れば、邪曲の激流を止め、野心、情慾の焰を鎮めんと、銳意努力する人々は、監督の懦弱な方面を動もすれば從位に置き、主とし

て主たる基督審判者たる基督を細論したのも時代として致方がなかつた。之と同時に教會内至る所往々其が上流の中にすら福音に全然不信仰の人々がありた。彼等は舉行せんことを要求し乍ら聖餐禮をひやかし、口には言はずとも、一百年後の皇帝フレデリク二世が歸拜者の間に聖麵包の運ばるゝを見て、『此欺瞞何時迄が續くべき』と言つたに同感であつた。

ベルナードは、社會の大氣に於ける微妙な影響に感じ易き人であつたが、遂に其襲撃に破られず手傷も負はなかつた。是は彼の魂が常に基督に集注し、殊に難を受け榮光に入りたる贖罪者として彼に集注したからである。王公の頑冥に對して主の審判の無情恐怖に訴ふるを運疑しなかつたが、然れど彼の心が自から基督の受難に向ふは其恭敬の中に美にして意味深き者があつた、野外なる櫛の木蔭説教と黙想する離れ家、若くは彼の密室に於て此は彼が思想の得意の題目であつたと自白して居る。雅歌一章十三節「わが愛する者は、我にとりてはわが胸のあひだにおきたる没薬の袋のごとし」を取りて、説教して曰く、『兄弟よ抑も我が回心の初から、我は荒野に富める場所に於て、没薬の束を拾ひて我胸の上に置かんと心懸けた。其は即ち我主の遭ひ給ひし一切の憂慮、悲哀から集めたのである。初めには彼が幼年の困窮を、次には説教の辛勞、旅の疲憊、祈の徹夜、斷食の誘惑、同情の涙、言語の畏を、終りに僞兄弟の中の危難、罵しられ、唾せられ、打たれ、嘲けられ、辱しめられ釘けられし等、我等人類の救済の爲に忍び給ひし之に類する事共を、其は福音の森に、汝は知る如く豊かに現

出する所である……斯る黙想は艱難の日に我靈を引擧げ、繁榮の日に之を節制し、此世の悲哀歡樂の間に王者の大路を歩まんと志す者に安全な嚮導である。……此故に汝等の知る如く此等は屢々我唇に上る神の知り給ふ如く此等は常に我心に在る、誰人も知る如く、此等は常に我筆に馴染む。耶蘇基督と其十字架を知るは我最上の哲學である。

又他の講話の苦難を語つて曰く『主の御業を見よ、如何なる奇蹟を地上に成就し給ひしか、鞭もて打たれ、棘もて冠せられ、石もて傷けられ、十字架に釘けられ、非難もて覆はれ給ふ、然れど總ての悲哀を打忘れて、父よ彼等を赦したまへ』と曰ふ。此故に（我等會得す）彼が肉體の多くの苦難を、此故に彼が心情の愛憐を、此故に苦惱、此故に同情を、此故に喜びの油、此故に地に滴る血の味を……オ、爾の慈悲の深さは如何に大なる、オ、主よ、爾の思想と我等の思想とは如何に遠き。不虔者に對してする爾の愛憐は如何に久しきに耐ふるよ。實に不思議なるは『十字架に釘けよ』と猶太人の叫ぶに對し、『彼等を赦し給へ』と叫び給ひしことなり。彼等の言は鎗の如く、彼の言は油よりも柔かである、……オ、猶太人よ、汝等は石である、然れど汝等は汝等よりも柔かき石を打ちて、其より愛憐の答が鳴り出で、慈悲の油が噴き出でた。オ、主よ、爾を十字架に釘けたる者にすら斯く慈悲の油を注ぎ給はば、況して爾の喜びの河に飲みて爾を歡ぶ者をば、如何に爲し給ふべき』と。

も雄壯なる者を昂騰鼓舞するばかりであつた。彼の十字架の思想は福音を照らし教會を輝かした、總ての冒險に盡きざる鼓吹も彼を導いた、主は慈悲深くおはしたれば、彼は天上の氣風を自己に複寫せんと努力した、恩寵と榮光の王が、彼の爲に何事も敢てし且つ忍びたれば、彼は主の最上の奉仕に於て恐るべき危難ある畏縮すべき苦痛がなかつた。要するに、彼の品性は情深い默想的習慣と、太だ實際的精神とを結合した當時全然比類なき所と斷言することが出来やう。若し前者を其自然に放任せば、默想的神秘家たらしめるのであつた。若し後者を其自然に放任せば、彼の生涯を勿論有効ならしめたが、器械的外交的たらしむるのであつた。兩者の結合は彼を卓絶ならしめた。宛ら熱と光とが天日に融合せるが如く、兩者が彼の魂に微妙なる融合をなした。

忘我的默想に多くの時が用ゐられた。其時には視聽其他一切の官能を使はなかつたと見える。人は忘却せられ自然も彼を誘ふに足らなかつた。或時の如き、歐羅巴第一の莊麗明媚なるゼネヴァ湖畔に沿ふて、馬を進めながら、薄暮に至る迄傍に湖水ありしことを知らなかつた。斯る時には神の愛を默想したのである。友人に書き送れる言にて其經驗を知るとが出来、曰く「大なる人は自己の爲の故に自己を愛する、一朝彼自身の存立し難きを知るや、自己に入用の者にも信仰によりて神を求め神を愛するに至る、然れば第二段に於ては神の爲の故にあらで自己の爲に神を愛する。然れど斯くして、自己必要の故に神を欲し、思想に就て勉學に於て祈禱に於て服従に於て神に頼るに至れば、此類

の昵近によりてすら、神が漸々其人の知解に入り其思想に本來の愛慕となる。斯くて趣味によりて主の如何に甘美なるかを知れば、人は第三段に遷り、此度は自己の爲にあらで神の爲の故に神を愛する。人は此段階に留まる。誰人か此世に於て神の爲の故にのみ自己を愛する第四段に到達せしものぞ。誰か若し是を經驗したりと斷言せば、我には不可能と見ゆると自白するの外はない。然れど主の善且忠なる僕が全く彼の喜びに入り、神の家の富を交付せらるゝの日此事の成るを疑はぬ。其時は宛ら歡喜もて酩酊したるが如く、不思議なる自己を忘却し、靈的に自己を離れ出で、全く神に上り、爾來一つの靈として神と合一するであらう」と。

斯る忘我的默想に於て、天上の教會の快感、其幻像に近きものがベルナードに到來した、其は屢々其講話に顯はれた。曰く「聖徒の魂が住居する陸土は、忘却の陸土でない、従事せざるべからざる勞力の陸土でもない、要するに、其は地にあらずして天である。天國の住居は、其所に迎へし靈を頑固ならしむべきか、其記憶を剝奪し其愛情を掠奪すべきか。兄弟よ、天の淵大は心情を收縮せず却て膨脹せしむ。心意を爽快ならしめて、理性を剝奪しない。愛情を伸張せしめて之を檢束しない。神の光に於て、記憶は透明となり、矇朧とはならない。神の光に於て、未だ知らざる所を學び、既に知る所を忘れない。本來天に住居する尊き諸靈すら、天に住居するが故に地に蔑視すべきか、却て之を訪づれ屢々往來するにあらずや。彼等は常に父の御顔を見るが故に、彼等の奉仕に愛情を缺くべきか。

却て彼等は救の相續權を有する人々に仕へんとて遣はされたる奉仕の靈にあらずや。然らば如何。天の使すら遍なく行きて人に授くるに、如何で我等の有なる聖徒が我等の事を識らず彼等自身惱みたる事に於て我等に同情することを知らぬであらうか、大なる艱難を出でたる彼等が、尙其中に留まる人々を認めぬであらうか」と。

地の暗黒から天の光明に遷された人々を屢々默想するは、ベルナード程に基督と密接ならざる人には或危険の伴ふは言ふ迄もない。即ち幕の中に入りたる人々の祐助と仲保の祈禱とを求むるの危険である。ベルナード自身には此理想は恰當自然の刺戟であつた、祈を聴く者としては、基督が彼の思想の最上位に居つた。惠まれたる死者は其美德を摸倣すべき鼓吹的努力を表するに過ぎずして、神の前に執成をするのではなかつた。曰く「其舉動に倣はんと工夫せしめよ、其驚くべき經驗は我等欲するとも企圖することが出来ぬ、其人に於ける其生活の謹直に競はしめよ。其敬神の情、其精神の柔和、其身體の貞潔、其唇の緘守、其心意の純潔に競はしめよ。我等の憤怒を制し、我等の言語を慎み、睡眠を少くし、祈禱を多くし、詩と聖歌と靈的の歌に於て語り合ひ、夜を日に繼いで神の禮拜に従事せしめよ。最上の能力に於て彼に競はしめよ。即ち柔和、謙遜の靈の如何なるかを彼より學び、貧者には寛仁に、朋友には愉快に、罪人には忍耐に、總てに對しては仁慈ならんことを努力せよ。此等に於て彼の美もて印象せらるべし。彼の奇蹟の榮光に至りては我等は唯己を卑うせらるるのみ。奇蹟は

喜ばしめ、此等は徳を建つる、彼は我等を勵まし、此は我等を高尙ならしむ」と。彼の廣大多様の文書に於て見出しの多きに拘はらず聖徳の祈禱に言及せし者は甚だ少ない、其少數すら専ら遲疑的口調である。或僧の死に關する説教に述べて曰く、「然れど父の前に祈禱をもて我等の保護者たらんが爲め、彼は取り去られたる誰かは知る。其は然か有らんことを希望する」と。又曰く、「人は神を恐れ、自ら神に近づくに足れりと思はざるが故に、他人が彼等の爲に懇願するを願ふ」と。我思ふに、死者の祈禱に頼るの風は後世こそ然ばかり顯著となり、教會の經驗、禮拜の力を微弱ならしめられたれ、ベルナードには既に見えざる世界に入りたる人々の思想が、時として彼等を視るが如くに鮮明且不變なりしに拘はらず、比較的疎遠であつたことは明白である。

母の幻像は一度ならず彼に現はれた。基督及聖母の幻像も彼は一度ならず見たと思つた。曾て小兒の頃、クリスマス夕の儀式の遅延せるを待ちつゝ會堂内に眠りし時、主は生れ立ての嬰兒として夢に現はれた。又曾て重き病に罹りし時、聖母自ら來りて彼を助け且つ癒やすと思つた。彼の新修道院が瓦解の淵に臨み、いたく胸を痛めて祈禱に魂を注げる時、彼の周圍の丘陵が様々な衣服、風體の人々にて充滿し、谷を差して下り來り、谷も彼等を容るゝ能はざるに至りしを見た。エタムプの會議は、佛國教會が何れの競争者に法王の椅子を與ふべきかを定めんとするのであつた。彼は特に王と主の召集を受けた、彼の言によれば、恐れ戰きつゝ之に向へる途すがら夜に入りて、神の讚美に心を

一にする人々もて充滿せる一大教會の幻像を見た。之が爲に教會の平和は最早保全せらるゝに相違なしとの豫想を得た。彼の晩年殊に危急存亡の境遇に於て亦幻像を見た。ダロリア・イン・エキセルシスを歌ふ遠方の僧徒に聲を合はすの幻像にして、之が爲に他人には前途暗澹の光景の中に完き平安を其心に得た。

彼が默想に耽溺せる時の精神状態は、正氣と精神錯亂との境界を通過して、少くとも實務に不適當の危険を思はしむれど、事實之に反して彼の如く整然と日課を處理するものはなかつた。彼は修道院の最も卑賤なる勞を分ち、其説教は頻繁又熱切確實と智恵とをもて院を支配した。教會美術に關しては殆ど偶像破壊者、本然の清教徒ともいふべき程實際的であつた。サン・チエーリのウイリアムに送れる書簡に曰く、『美はしき聖徒の畫像が縦覽に供せられた、其色彩の燦爛たるに比例して神聖と思はれて居る。人々は之に接吻せんとて突き進む。彼等が寄進の心は鼓舞せられる、彼等は其神聖を尊敬せず却て美を驚嘆する、諸教會には寶玉入りの花冠にはあらで、炬火を立て廻はしたる大車輪が据附けられ、炬光は寶石の光にけあされ、燭臺は宛ら大木の立ちたるが如く、黄銅の塊は技術家の技巧を弄したるものにて、上に戴ける燈火は寶玉の光にけあさる、此等の物によりて何を得らるゝと汝思ふや、悔改者の痛快が將た觀覽者の驚嘆か。噫空の空よ、無益にも過ぎたる愚よ。教會の周壁は煌めけども貧者は此所に居ない。黄金もて石は覆はるれども、其子供等は赤裸である。貧者の出資もて富

者の目を樂しましむ。好奇心は其好む所を見出せど、艱難は微塵の救済をも見出さぬ。土足に踏まるゝ鋪石の上なる雲なく、聖徒の肖像に誰が尊敬を拂ふべき。屢々天使の口に唾することあり、屢々聖徒の顔に靴を打ち當てることがある。斯くばかり忽ち汚さるゝ者を何とて飾るや。さばかり速かに傷けらるゝ者を何とて色彩するや。……又修道院に讀書する兄弟等には、其馬鹿げた異形が何を成し得べきか、其惡むに餘れる美、其美はしき醜陋がよ。其所には何故汚らはしき猿、又何故野蠻な獅子があるか。何故半人半馬の怪物及半人形があるか。其所には數頭に於て一體の物、一頭にして數體の物を見る。一方に蛇尾を有する四足獸あり、他方に四足獸の頭を有する魚がある。彼所には前部馬の如く後部野羊の如き獸あり。此所には後部は馬なる有角動物がある。……縦令人は斯る妄誕を耻ぢずとも、神の爲の故に何故彼は此等の費用を悲まざるか」と。

默想的夢幻的氣風が、ベルナアドの心の實際的方面を壓服しなかつたことは明白である。彼は如何に高くとも如何に卑くとも、有ゆる奉仕を辭せなかつた。十字軍を説教し、大會合を鼓舞し、王公に助言を與へ、法王を訓戒し、異端に對抗し、修道院の細事にも携はつた。彼の晩年を照したる驚くべき落暉の下に紀元一一五二年に書かれたる最終書簡の一は、豚のこととシャンパーニュの幼伯に送つたのであつた。其數頭の豚は附近の修道院長が羅馬に行くとしてベルナアドの保管を依頼したるもので、伯の臣下に窃取せられたのであつた。曰く、『彼等が寧ろ我豚を盗みたらんことを欲する。汝の手

に此等を要求する」と。古今に稀なる神に親近の生活を送り、又往々天開けて其周圍に超自然の生々たる姿鮮やかなる光を見たる時は、亦佛國の誰人にも譲らざる冷靜明晰な頭腦を有し、各種の活動に堅忍又不拔であつた。キアモン・キングスリーが彼の性質に「ヒステリーの成分」があると云つた。此形容詞を何ういふ意味に用ゐたか知らないが、通例は習慣及氣風に間歇的、發作的、本來痙攣的な或者を表示する。若し是の意味であつたとせば、ジョン・カルヴィン若くはユリウス・ケーザルと等しく、メルナアドにも其が有つたと言はねばならぬ。

彼は其公生涯を通じて不幸な病身であつた。其一ヶ年の健康は常人の一週間の健康に匹敵するに足らなかつた。彼が早年の峻厳なる生活は殆ど嗅味の官能を失はしめ、水又は葡萄酒と誤り手近なる油を飲んで其異なるを知らなかつた、されば適當の物を彼に取らしむるには、與ふる人の方にて忠實に之を擇ぶことを要する程であつた。彼の常食は湯にて濕したる一片の麵麩と少量の飲料とであつた。食物の思想其物が彼の厭ふ所であつた。食物は生を養ふに効なくして、死を延ばすの用に過ぎざるかの如くであつた。或時の如き朋友側の強請により一年間全く修道院より退居して、地方なる醫師の監督の下に獨身にて茅屋に起居するの已む無きに至つた。メルナアドは道理を辨へぬ野獸と此醫師を見做したれど、多少の改善は與へられた。當時彼は牛酪と生血の味を區別することが出来なかつた。而して咽喉を冷やす水の外は何をも賞味しなかつた。其れにも拘はらず、此所を訪へるサン・チエイク

のウィリアムは言ふ癩患者の爲に路傍に建てられたやうな陋屋に在りて、宛ら樂園の歡喜をなせる彼を見た。又神の祭壇に近づくが如き尊敬を以て其中に入つたと、又若し心に任せて擇ぶことを得ば、常に此病者と共に居り、之に仕ふるに勝りて何をも願はぬであらう程、佳快の氣が其場に瀰漫して居つたと。曰く、「斯くて我は神の人を見出した、斯くして彼は其の寂寞に住居して居つた、然れど彼一人居るのではなかつた。神彼と共に在り、天使の擁護と慰藉彼と共に在れば」と。ウィリアムには交互に打交はす天の聲樂隊が其所に聞かれると信するに毫も困難は無かつた。何となれば彼には此茅屋より發する光に於て、新天新地を見、黄金時代がクレールヴォールに來るが如く思はれたれば。

メルナアドは其修道院に自己の精神を印刻した。然れば其の不在の時も存在同様であつた。彼は又如何なる肉體の虚弱、靈の大觀の中にも、其孱弱多病の身に異常の勇氣を與へたる滾々たる意志の力をもて、終世自ら努力したるのみならず、周圍の人々をして、同じく人生最高の目的に努力せしめた。彼の注意は遠近の別無く均等に準備配慮せられた。若し門生の信せし如く、聖母が彼の大患に聖徒等と共に現はれ、靜かに手を觸れて、苦惱を救ひ、病を除き、其唇より烈しき垂涎を止めたとせば、其唇が、當時歐羅巴に聞かれし、最賢明最威烈の言を自由に語り得んが爲であつた。

彼が爲すを欲せざる唯だ一の事があつた。彼は教會の役目を、其尊稱、餘祿と共に受取らうとしなかつた。教會の榮位を拒絶したとは其時代に異常の感と與へた。これは生前のみならず死後に於ても

彼の傳說的肖像の畫布面に於て之を拒絶した。即ち彼の僧冠は書籍の上若くは足の邊に狼藉せるを見るのである。ラングル、シャロン、シユル、マルヌ、ゼノア及びビザは彼を監督に所望した。ミランではアムブロースの唯一の適任後繼者として其大監督の位に彼を熱望した。佛蘭西の大都ランスは同じく大監督の顯位に彼を熱望した、然れど何者も彼を動かすことが出来なかつた。彼はクレールヴォーの修道院長として生き又死なんことを欲した、然れど感化力には制限がなかつた。高職を輕視せしによりて、そは却て擴張増進した、其感化力の秘訣が其人自身及び其獨特の人格に存することは既に表示せんと試みたところである。

自然及人類の愛好者、温情又熱情貧者の友、僧徒の助言者、權力の對抗者に對する無畏者、熱心又仁慈、忘我的黙想、不撓の努力、神に於ける篤信、十字架の主に對する敬愛、殆ど幻想に近き天國の理會、非凡なる雄辯。——彼は努力と言語との何れによるも偉功を奏せざるを得なかつた。非精神的時代氣質すら、彼に便益が無いではなかつた。何となれば彼の獨特の氣象及生活が、時代の經驗に超越し意表に出づるものがあつたからである。然らざれば彼は戰鬪的貴族無遠慮な王者、野心に燃ゆる教會の君主、前數代の領袖と判然たる對照をなすことが出来なかつた。彼は時として怒り易く全然不條理なこともあつた。ピーター、ズエ、ヴェネラブルとの間柄にすら折には之があつた。然れど人々は彼が運動し飲食し、又睡眠することも出来ず、精神の激烈のみにて生くるが如くなるを知らば

之を十二分に宥恕した。却て其氣象の居常、晴朗、平順なるを驚嘆するのみであつた。彼が身體の孱弱は益々天上の色を添へ、其美は斯くも彼の道徳力を援助した。彼は天に至る道に於て地を歩み、手に觸るゝを得るの靈とより外は思はれなかつた。而して肉體の欲望又は虚弱を度外にしたる彼が魂の最上權に至るまで、當時の人々には全く人間以上に見えた。

彼は以賽亞又は聖約翰に劣らぬインスピレーションを受けたと人々は考へた。彼は出來事を豫言し得ると信せられた。若し宗教の奉仕に獻身せずば、鐵鎗忽ち汝の横腹を貫くべしと兄弟ゼラールを戒しめた時の如き、程なく事實となつた。又佛蘭西王に王若し其行爲を改むるにあらざば、血氣盛りの長子が遠からず死すべしと忠告した時の如きも然うであつた。皇子は不意の出來事で横死したれば其言は明に豫言となつた。曾てウイリド・フォリウムと稱ばれしラングドクの或城下を訪うた、此所には一百の精英騎士を有する城郭があつた。彼に對して劇しき喧嘩を起し、説教は全然妨げられた。此所を去るに臨みて、『汝青葉の城よ、神は汝を枯らし給はん』と言つた。其後災害、戰爭相繼ぎ、城邑共に零落し領主は窮乏してツールイスに通れたるは彼の言の恐ろしい實現の如くであつた。

彼が奇蹟を行ふことの出來たのは争はれなかつた。彼は神の前に謙遜なれども、奇蹟が自己によりて行はれたことは自ら知つて居た。且つ其が爲に往々迷惑を感じた。ツールイスに於て異常なる事起りし後、其兄弟等に語つて曰く『我いたく驚く、此等の奇蹟は何を意味するや、又我が如き者によ

りて何故神は此等を行はせ給ふや。何となれば種類に於て此等に勝る休徴を我は未だ聖書に於て讀みたりと思はざれば。勿論異能は神聖、完全の人にも欺瞞者にも行なはれた。我は自ら神聖とも欺瞞とも思はない。奇蹟に名高き聖徒等の功績に比肩するは我事でない。神に認められざるに、神の名に於て多くの異能を行へる人々の階級に我は屬せずと信する」と。異能の意味に關して、彼は密かに靈的人々に語り遂に自ら説明を得たりと見える。曰く「我知る此種類の休徴は一人の神聖を企圖するにあらで多數の救を企圖するを。又知る神は由て以て休徴を行はせ給ふ其人の道德的完全よりも其人に對して懐かるゝ見解に注意を拂ひ給ふことを。其は神の器に屬すと信せられし神聖を同じく人々に推薦せんが爲である。事は之を行ふ人々の利益の爲に行はるゝにあらで、之を見之を知る多數の爲に行はる。神は他人以上の神聖を立證せんが爲に或人を用ゐて斯る事を行ひ給ふのではなく、他の人々をして神の神聖の熱心な愛好者、探求者たらしめんが爲である。休徴は私一身の何物をも含まない。何となれば我生活にはあらで、寧ろ我名聲によりて惹起せらるゝを知れば、此等は我に賞讃を與へんが爲にあらで人々に訓誡を與へんが爲である」と。彼が斯言をなしたる精神は、彼の奇蹟に劣らざる不思議と言はねばならぬ。彼の神的聖情に競ひ彼の靈的足跡を追はんとするは、彼の不思議な所業の奥意を洞察せんと試むるにも劣らざる困難にして、又遙かに有用な事である。若し事實の目撃者と稱する人々の證言を信すべからば、彼の常備的幫助を求めた人々は、彼を通して非

常な力が働いたとは争はれぬ。勿論彼の獨特にして印象的な人格に歸する所多く、神の使者として彼を受けたるに歸する所が多い。亦勿論、民衆が道德的幼稚の状態にあり、特に高貴なる道德的命令の言に感じ易かりし、其時代の輕信、無智、無批判的の性質に歸する所が多い。自分は彼の死後僧徒の古傳に記された多くの奇蹟と、別けても神經疾患の治療又は半精神錯亂状態の治療に關する奇蹟をば容易く除却する、然れど彼の對面、彼の言語、彼の觸接の爲に、熱病が癒され腫物が除かれしとは同時代の人々の斷言する所であり、又彼の秘書たり、後にクレールツォーの修道院長たるゴドフレイが、聾者は聞き、瞽者は見、癱瘓は歩みしを自撃せりと斷言するあれば、奇蹟に關するネアンデルの言を容るゝより外に致方はないと思ふ。曰く「此等が愛の精神に動かされたる基督教氣質と關連して出現せば、人性の中に基督の誘ひ入れたる高等な生命の力の唯一の所業と見做すは當然である。多少意見を異にするところはあれ、歐羅巴の人心は此等を奇蹟と承認したことは確かである。ベルナードは、人の信仰又は行爲の上に、奇蹟に基づける何等の權威を要求しなかつた。却て人々が斯る權威を知らず識らず彼に歸した。若し誰か彼は暫時此地に立還り給ひし主なりと公言したらんには群衆は火の如き熱心をもて其言を受けたであらう。彼は人の身體又は魂の何れに何等の効果を生じたりとて意氣揚々たることはなかつた。彼は常に美はしき謙遜をもて自己を語り又書いた。其は、彼の特性の主要なる者又最も愛すべき者と交友の認め

たところである。パロニウスが言つた通り彼が「公同教會全體の裝飾又支柱、佛蘭西教會の名譽、榮光、又歡喜であつた」時にも人々が彼を法王以上の法王と稱び、彼等の事件を彼に委ねた時にもミルマンが言つた通り。彼が「基督教國の指導的首腦、同時に統治的首腦」であつた時にも彼の謙遜は易ることがなかつた。最初の一傳記々者が言ひし如く、「彼が名譽の宏大は彼が心情の謙遜にもおされた」王公民衆より溢るゝ計りの稱美と諂諛とを受けても、自らはベルナードにあらざして代人であるかの如く思ひ、卑賤な同胞と歡話を交ゆる時の固有の人格にのみ自己を認めた。自己に寸毫の功績なしとの感は、弱年主を求めし時より世を終る迄痛切であつた。絶筆にはあらねど口授せし最後の書簡の一つは——此時は全く睡眠が出来ず、飯食も出来た、四肢には痛まじし腫脹を來したれど、其心は潑測として平常の如くであつた——ボンヌヴァルの修道院長なる其友に送りし者にて左の悲壯な言がある。「如何なる罪人の死をも欲し給はざる救主に祈れ、時宜に適へる此世の發途を延ばし給はずして主が之を擁護し給はんことを。寸毫の功績無き者の臨終を、汝の祈禱もて護れる所あれ。即ち我等を計らんと待伏せする者が微傷だに負はしむる所を得ざらんが爲に祈れ。我胸中を汝に知らしめんが爲に現下の状態に於て此等の言を口授した」と。

自己に寸功を認めざることを斯の如くなれど、世を去りて基督と共に在るの備へはあつた。彼の爲に捧げし僧徒の祈禱が、幾分の回復を來したるが如く見えし時、「汝等何故不幸の人を引留むるや、汝等

は我よりも強くして我に勝つ。赦るせ、容赦せ。懇願する。去るを許るせ」と言つた。彼等臨終の枕邊を取圍み、「我等の父よ、汝我等を憐まらずや、今に至る迄汝の愛の中に養ひし者共を憐まらずや」と涙と共に哀哭したれば、彼も諸共に泣きつゝ、鳩の如き目を天に擧げて、彼等と共に留まると基督に往くと、何れを選ぶべきかを知らず、二者の間に介する旨を答へた。彼は其一切を神の聖意に委ねた。其れが最後の言であつた。彼は其言と共に眠つた。「多幸なる移轉よ」と、枕頭に立てる一人が言つた。「勞力より休息へ、希望より報酬へ、戦闘より冠冕へ、死より生へ、信仰より智識へ、流浪より故郷へ、世より父へ」と。

地との生活は斯くして終つた。紀元一一五三年八月二十日朝九時頃享年六十二。

不完全乍ら斯く描寫したる此人物と次の講演に新に開陳したいと思ふ彼の成したる事業とを想ふに、無學、罪惡、殘忍なる争鬭、無法なる野心に満ちたる時代、而も之が爲に數世紀の準備あり、又之より大なる感化力が次の時代に及ぼされた時代に於て、彼が不斷の熱心もて最高目的の爲に努力せし其非凡の勢力を認むる。次に父の城郭に彼の幼時を追跡し、而して彼を生み彼を教へ神に獻じ、又敬神の熱心もて、母の乳と共に母の精神を脈管に注入せんと欲したる聖徒らしき母アレツタを想ふ。——而して八百年の昔、ブルグンディーに歿したる其敬神の婦人が、爾後世界の文明を改めたこと、彼女の不朽なる靈が、今も諸君及我心情に接觸することとは感嘆敬畏の情もて認むる所である。

第四

クレールヴォーのベルナード、其修道院生活

如何なる制度も、廣潤健全なる人の意思に基礎を有せず、人類の道徳的要求を充たさざる者は、數世紀に互りて存在し、永く教養ある人士の尊敬を收むるに足らぬ。又若干時の後には他の制度が新陳代謝して其任務を履行するに至るであらうか、然れど其が持續する限り、人々は之を欲望し尊重すべき理由を見出し、之より特殊の利益を受けたと假定して差支無い。聖書物語の方舟は、飛ぶが如き汽船の動作をなす能はざれど、當時に於ては、漫々たる洪水より人類を救ふことによりて、其必要を有し又其目的を達した。

東方に起り久しく歐羅巴に流布し會て隆盛を極めたる所には、今も一定の位置を占むる其修道院生活の制度にも以上の主意は適用が出来る、此制度に對する新教徒の輿論は、蓋し此制度は徒に不幸を來したるに過ぎぬといふのである。又社會の發展に充分貢獻すべかりし勢力を其自身に吸収したといふのである。又其中に集合せる男女の精神を教化向上せしむるよりも、常に壞亂腐敗せしめたといふのである——彼等をして我儘に、氣むづかしく、狂信的ならしめ、企業及家事を蔑視し、屢々肉慾に走

らしめた——勿論、此制度の古今の歴史には幾分此感を暗示した事實がある。ヘンリー八世の時代に修道院禁斷の理由とせられし其等の如きである。若しも道徳的衰頹が禁斷を容易ならしめたにあらざれば、設令王者の權力を以てすとも、隆盛な羅馬教團體の真中に禁斷は行はれなかつた——又レツキ一氏の『歐洲道徳史』に哲學的に聚められた事實の如きである。我は證據の提供せらるる何等の告訴に對して此制度を辯護せんとする者でない、其が再興を擁護せんとする者でない。却て近世文明の勢力が絶えず之に逆行するは欣賀する所である。而して尙未だ其存在を見るあらば、其は上流の水河より流れ来る氷山の如きものである。縱令暫らく水面上に屹立すとも、其底を包圍する溫流の爲に密かに滅盡せらるゝ。其溶解的潮流を或は妨ぐることは出来やうが變化することは出来ぬ。

然れど吾等が此に顧みんとする修道院生活は、其が近代との關係にもあらず、又腐敗に變じたる其の結果でもない。吾人は特にベルナードの時代に關係して之を見、又熱切深遠な精神的心意の渴望を充すべき或物に對し彼が感じたるが如き欲望に關して之を觀察せんとするのである。是の心を以て之を見れば、何故久しく隆盛を致し、廣く擴張を見たりしかを知り、又何故彼が如き品性を以てし、彼が如き境遇に在りて左ばかり之に牽引せられ戀着したりしかが解る。

彼に對する義理一遍でも宜しく彼以前の遠遠にして光彩ある歴史を追懐し夙に之を振起したる強き道徳的刺戟を明白に理會すべきである。然れば實務を離れ主として禁慾的修業と祈禱と默想の中に日

を返したる隠遁生活の風潮は、基督教以前、既に世界に現はれ、異教國に現はれたとを忘れてはならぬ。主の時代に於て、希伯來にエッセネ派ありたるは人の熟知する所なれど、埃及、印度、中央亞細亞、支那に於ては尙數世紀の昔に溯ることが出来る。印度は僧道の源産地であるとの説は不可能でない。其大宗教は二つ乍ら、此精神を精髓となすものである。而してメヌの法典は、大部分禁慾生活に關する規定を以て満たさるゝ、佛教今日の僧院は、羅馬教諸國の修道院と不思議な類似を呈する。之を見たる旅客は何れか他を摸倣したりと思はざるを得ない。某羅馬教徒は曾て西藏、タタルの佛教僧院は後世の基督教制度の、豫想的、魔的對偶であると邪推した。相互の懸隔然ばかり甚だしき宗教及制度の間に、然ばかり密接の類似が、永續したといふことは、史上に著目すべき事實の一つにして、亦修道院の提供するが如き活動の形式に對する人の靈性に於る強大不易の道德的趨勢を證するものである。其所には、餘所に満足し難き心情の渴望を充たす物がなければならぬ。

基督教の宣傳後幾許もなくして此等の傾向が、各方面に大勢力をもて出現した。埃及の神殿に接續して久しい間僧團が設けられた。而して『最初の隠者』テイベのバウルが聖アントニーと共に三世紀の後半に出現したときは、コプトの太氣は既に彼等を歓迎し、忽ち摸倣する所となつた。一世紀の後ゾメンは斯う言つた。アントニーの弟子は埃及のみならず、亦パレスチナにも——ヒラリオンに誘入せらる——シリアにもアラビア及北亞弗利加にもあつたと。又或首領が三千人の弟子を有した事、

他の首領の一千人、アレキサンドリア附近に於ける二千の僧徒、ニトリア地方に於ける五十の修道院の事をも記した。山も沙漠も彼等で充滿したるが如くであつた。四世紀の末若くは五世紀の初めに、各階級の僧徒が埃及のみで殆ど十萬と算せられたるは、蓋し無法の計算ではない。其人々の勇氣、忍耐、謙遜、慈善、沈黙、斷食、禁慾に就きて、驚くべき物語が行はれた。

寂寞を住居とする初代の山僧は、暫時にして、目的を同する團體居住の會僧に席を譲つた。ゼロム、アタナシウス、バシルズエ、グレイト。大説教家、眞勇又殉教者たるジョン、クリソストム。グレゴリー、ナズアンゼン。グレゴリー、オヴ、ニツサ。其他の教會先覺は、此制度の雄辯なる辯護者となつた。四世紀の中葉に、多分アタナシウスが、伊太利に之を誘入した。而して首府及其附近を始として半島全部に忽ち其建設を見るに至つた。アウガスチン及びアムブロースは其辯護者となつた。ツールのマルチンは之をガリアに誘入した。夙にブルグンデ、西班牙、ドナウの沿岸、エールスの谿谷及び愛蘭に出現した。富者、名門貧者の別なく修道院に入籍した。六世紀の初めには、ベネヂクトの規則が彼の大修道院モントガツシノの爲に制定された。此規則は爾來各地に散在する地方修道院の典範となり又彼等を結合する帶となつた。

西方の實際的組織才能が、此制度を斯の如く型に入れて、從來之に伴ひし弊害を止め、其高尚なる目的を保全したれば、迅速廣大の發達を來し、歐羅巴の一大勢力となつた。若干の修道院は長じて

一大宣教的中心となり、或者は夙に智識及文學の本場と認められ、或者は實際的技術を以て知られた。其が首脳には屢々有名の人々ありて其手中に大勢力を収めた。王公は欣然平僧の籍に列つた。中には全然修道院に加入したるもある、名門、顯貴にしてまめしく庖厨、水車に立働さ、薪を伐り、作物を刈入れ、欣然として野に豚を逐ふた。ノルマンディー公、ウイリアム一世は全く此世を棄て、ジユミエージウの修道院に退隱せんとしたれど、院長は之を許さなかつた。ブルグンディーのヒュー一世も、同じ希望をクルニーに試みたことは前に言つた通りである。日耳曼の皇帝ヘンリー二世が、フエルツンなる聖アンの修道院教會に於て、詩篇記者と共に『是は我選びたる安息所なり、我永久の棲居たるべし』と叫んだ。之を聞きたる一僧は事の由を院長に通知した、院長は皇帝を招き其趣旨を尋ねて僧たらんとの決意あるを知りたれば、僧團の規則に基づきて、死に至る迄從順なるべき約束をなさしめ、俗言ふやう『然らば汝を一個の僧として歡迎し、今より後汝の魂を注意すべし、我命する所をば、主を恐れて、實行せんことを勸む。いでや、主が汝に託したる帝國の統治に立歸れ、而して恐懼、戰慄、全力を擧げて、王國の安寧を注意せよ』と。皇帝は彼の誓約を如何ともする能はず殘念乍ら之に從つた。爾來帝位に在りて、真正の修道院生活を送り後に聖徒と崇められた。十六世紀改革の時に至る迄、男女兩様の修道院制度が、縱令其多數は初めの理想から離れ、中には其腐敗言ふに忍びざる者あるに至りしと雖も依然として許多、依然として有力であつた。其以降は再び秀才を牽引する

ことが出来なぐなつた。而して社會狀態の一變と共に彼等の回復すべからざるは疑なき所である。然れど數世紀の間、世界に於て然ばかりの位置、勢力を有したることが、意味深く記憶すべき事實である。ベルナードの個人的行動を研究せば之を忘るゝことが出来ない。

彼の活動的生涯の幕が開かれた第十二世紀の初には、修道院制度は必用と名聲の絶頂に上りかゝつた。獨身の誓約は、人生の親縁を解かした、貧窮の誓約は、此世の所有を棄てしめた。柔順の誓約は、少くとも我意を制し、倫理的規定遵奉の習慣を成さしめた。然れば凡そ神的生活もて其魂が浸潤透徹せられんと願へる者は、自然此等の避難所に誘引された。凡そ其靈覺が刺戟訓練せられて、幻像に親しむに至り、又地上生活、天上生活の境界に間髪を容れざるに至り、又時代圈内の魂が既に永遠と相結べるを感ずるに至らんことを欲する者は、人々と共に天上道德の險路を攀ちんとして修道院に引寄せられた。斯る人々と共に亦、兩美なる人事智識を求むる人々、若くは、時代の喧騒の中に平穩靜肅の生活を永め、他には得難き同志との親交を見出さんと欲する人々が集つた。此等と共に亦多數の弱者、貧者、怯者、被虐者が、僧徒の間に避難所を求めた、修道院は封建的城郭に對抗して、彼が掠奪した者を此は救護した。淑女は貞潔を防禦する爲に尼庵に加入した。假令ば後に英國のヘンリー一世の妻として『善良なる女皇マウド』と青史に知られたる皇女マチルダの如きは、淫奔なるノルマン貴族の追跡を免れんとて少女の頃ロムセイの尼庵に加入した。

修道院生活の精神及び組織は前世紀に一大復興を來した。其は言ふ迄もなく、教會の發展にグレゴリー七世の與へたる大刺戟を感じたのであつた。一方に新僧團の設立を見、他方に舊設既存の者は再び世に時めき、更めて發奮興起した、若干の修道院には大記念祭が行はれた。僧徒は概して歐羅巴の開拓者であつた。勞役を常とし、辛苦に慣れ、死を輕んじ、洞窟樺の窟を住居とし、堅忍不拔の勞力もて、治ねく野蠻國を從へた。——森林は暗く、荒蕪はむさく、水澤は實らず、沼澤は水溢れ、麋鹿野牛、熊、狼は山間に横行し、樹陰に徘徊、鬪争する蠻人は之にも増して剽悍なる——。修道院が都會の中心となつたことは一再ではない。又混亂紛争の時代に於て、文明的工業の中心たる道徳的渴望の表號であつた。又上部の慘虐に對して不斷の戰鬪を持續し、社會は強者を保護すべき責任ありとの基督教々理を標榜した。又神と將來とに共通の關係を有する人類相互の關係といふ嚴肅な感想を高潮した。斯の如く、貴重なる勢力を用ゐて、社會の向上に貢獻した。

修羅の巷たりしがリアに修道院生活の一陽來復より様々の奇譚を生じて修道院に光彩を添へた。設令ばローノマールの一聲は、狼の歩みを停めて其貪噬を免れたる聖レオノルが穀物に逼迫したる時、白き小鳥の小麥粒を齎らして其所在を告げたる。聖イミエは夜半草庵に於て、未だの院鐘を聞き其後を追ふて、今も彼の名を留むるジュラの泉に至りたる。名門の出なるサン、チエリのテオヂユルフは、二十年間院の耕作を掌り、院長たるに及びて、其粗末な犁が、近村の會堂に聖なる記念として吊さ

れたるが如きである。

別けてもブルグンディーに於ては、ベルナードの時代に、修道院の建設漸く頻繁となり、人民はいたく之を歓迎した。デジョンなる聖ベニグヌスの修道院——其院長はブルグンヂ公の登位に誓約を提議し、衣服、指環、及び公爵冠を與へた——又マコーンに近きクルニーの修道院は最も有名であつた。デジョンより十二哩のシャイロンに近きシドーの修道院は、其頃未だ貧弱にして世に知られなかつたが、其後數多の分院を生ずるに至り、二三世紀の後、シトーの院長は諸國に散在する三千有餘の分院の長上と崇められた。ベルナードは幼少の頃、封建的領主ブルグンヂ公が、未だ名を成さざるころ修道院の拜殿にて祈り、其近傍に一軒の家を己が爲に打建てた。彼はエルサレムに至る途中に客死せんとして死體は彼所に送られ寢室に安置されんことを遺言した。此故に、戰の霹靂が此土に轟き僧徒は其が隱棲して逝きし恩人の魂の爲に祈を捧げたとさも、彼の遺骸は此所に安臥した。

母の死後ベルナードは、有ゆる他の行路——武器、宮廷、文學、教會の上職——を避けて分明なる宗教生活に入らんと決心したる時、抑へ難き刺戟に動かされて、修道院と其嚴律とに志を向けた。彼の道徳的熱誠は此世と其野心、教會に瀾漫せる世俗的氣風、是等と雲泥の對照をなせる、嚴酷な修道院生活の體制を選んだ。同じ目的に勇める彼の兄弟、親戚、及び彼に心服する知人等——高貴卑賤の別なく——を彼の周圍に牽引したれば、彼は自他共々修道院生活の準備に取懸つた。人を動かす雄辯

と比類なき人心の主宰とは、當時既に鋒鏖を露はした。彼が此世の果敢なき歡樂と、地上生活の山なす不幸と、瞬く間に來る死と、善惡共に無窮たる墓の彼方の生命とを語れば、確信の閃光が人々の魂を貫き通したと傳へらる。貴顯も紳士も民衆も深く感動して其言を聞いた。彼の演説の印象の驚くべきは、其説得の聲に有ゆる對抗的誘引も力なからんことを恐れて、母は其子を彼の及ばざる所に遠ざけ妻は其夫を妨げて彼を聞かざらしめ、朋友は其友の注意を他に轉せしめた程であつた。幾日も經ざるに獻身の同志團と共に學窓たりしシアーチロンに退隱して自他の志望の誠實、堅固を驗し、修道院は加入の準備を完成せんと決心した。斯くて六ヶ月を經過し、此世に於ける一切の事務的關係を結了したれば、彼等はシトーの修道院に入ることを申込み、之を許容せられた同勢三十餘名、其鼓吹的嚮導は僅に二十二歳であつた。

外形に於て、當時シトーの修道院は、到底クルニーの修道院に及ばなかつた。其裕福にして森嚴なる建物は、既に二百年の星霜を閱し、ブルグンヂー修道院中の巨擘にして、歐羅巴に於ける名聲は、ベネチツクの建設したるモント、カッシノの修道院に亞ぐものであつた。前に申した通りセルデブランドは此所より進んで法王に上つた。彼の後繼者の中ではウルバン二世、バスカル二世も亦然うであつた。一法王、一帝王、數君主を隨員の一行と共に差支なく響應することが出來た。院長は邦土内の事實的君主にして、己が領内の通貨を鑄造する權力を有した。其後程なく、法王カリキスツス二世の

寵を蒙り、羅馬教會の常設樞機員長となり、其他の特權をも與へられた。幾多の有名なクルニー修道院長は聖列に加へられた。院の勢力と名聲は當時其の絶頂に近づいた。紀元一〇八一年に起工し紀元一一三一年に、インノケント二世の獻堂する所となる其宏大な修道院會堂は、當時は勿論完成に程遠かつたが。其後佛蘭西に於ける前古未曾有の大教會となつた。面積七萬方尺、巍峩として半空に聳え、莊麗目を奪ふばかりであつた。七百年の後、遂に革命暴動の餌食となつた時に、之を破壊するにすら數年を費した。而して紀元一八一一年に大鐘樓が遂に顛覆せられた。其凄まじい震動と音響とが近在に及びしことは今も生存者の記憶に残る。

富と名とを集め、教會顯職の登龍門たる、且つはベネヂクト法規の自由な解釋を常とする此修道院に、若しベルナアド及び其同志の門を叩くあらば、忽ち歡迎と尊敬とを受けたであらうに、之に反して、彼が七歳(紀元一〇九八年)の時に漸く建設せられ、而も統治の嚴重に過ぐるが爲に彼が青年の頃既に衰勢に向ひし、微弱にして人目を惹かざるシトーの修道院を選択した。斯る嚴酷な訓練に心を寄する發心者は少なかつた。多數の僧徒は日に減少した。搗て加へて疫癘の爲に近頃亦著しく其數を減ぜられ、修道院の命脈は旦夕に迫れる有様であつた。斯る貧弱荒涼たる、死の影を翳せる建物へ、ベルナアドは同志を率ゐた。彼等は嚴肅に迎へられた。先づ其年中は見習として過し、其後本僧たるを許された。

彼の理想とする嚴律的生活は遺憾なく此所に見出された。其は一の改革修道院又一の清教院修道院であつた。ホレイス、ワルポールが、何教羅馬教徒とならざりしかと問はれて、「其與ふる所、嘸むべき物多きに過ぎ、食ふべき者少きに過れば」と答へしと云ふ。シトーの僧徒は何れも困難に感じなかつた。彼等は食ふ所少なく神の教理を吸収する所多ければ多い程、其目的を果たし天に近づく思がした。一日一食、通例正午の頃にて、獸肉魚肉鶏卵無く、牛乳の無きは普通にして、果物若くは野菜が形ばかりの夕食であつた。衣服の蓄は更に無かつた。丁度帝國時代の伊太利農僕に見るが如く、實際は其から籠を取つたのであつた。早天の朝拜を以て始まり、夕の八時若くは八時過に晩禱を以て終るに至る迄は、祈禱、唱歌、黙想、讀書、筆録、祈禱の連續にして之を遮ざる者とは唯孜々たる勞役があるばかり——是がシトーの生活規則であつた。其刻薄嚴烈は、奢侈を遠ざけ世と隔離せんとする有ゆる志望を充たすに足る者であつた。

斯る嚴律すら、ベルナードを十分に満足させなかつた。睡眠の間は實際死せるに等しければ其に費す時間をば浪費と見た。縱令覺醒の中に徹夜する能はざりしとするも、確かに人類の及ぶ限りは之に近づいた。彼は過度に食を斷てるが爲め、全然其が嗜好を失ひ、殆ど同化の力をも失ひて、終生病弱の身となつた。肉體の虛弱の故に、院の普通作業を爲し難き時は、一層嚴酷なる奉仕の欠陥を補はんとして最も下賤の任務を負ふた。肉體の自己訓練に於て彼の志望とする所は肉慾に打勝つのみならず、

慾望を喚起する感覺其者に打勝たんとするのであつた。實際其機能を停止して『身體を服従』せしめんとするのであつた。此故に遂には見れども見ず聞けども聞かざる心的狀態——虛心の狀態他物先入の狀態、感覺的事物に無關係の狀態、身軀より離れたる狀態——になつた。室内の三窓も彼には一つ同様であつた。如何なる外界の出來事が身に起るとも、其記憶には少しも印象を留めなかつた。唯祈禱と黙想が彼の慰藉又支柱であつた。天地自然は亦前に言へる如く彼の魂に對して、其優美、鼓吹的魔力を存した。

一年の終に嚴肅な定例の下に本僧の告白をなした。其より一年餘にして紀元一一一五年、彼が廿四歳の頃、十二人の僧徒と新修道院を建設せんが爲め、彼は院長として派遣された。彼が數多の同志とシトーに入りたる事が、微弱荒涼の建物に大なる刺戟を與へた。容るゝに餘る多數の志願者が風を望んで集つた、既に二つの分院が生じた。其の一はシアアロンに近きフェルテの修道院、他の一はベルナードの舊友マーコンのセユーの許に打建られたボンチニの修道院である。第三は即ちベルナードを嚮導とする者であつた。十二人は十二使徒を代表した。首領ベルナードは十字架を持ち、聖歌をうたひつゝ先導し、彼等に對して主の位置に立つた。然ばかりの弱年にして任務の困難なる事業に補充せられたることは、彼の優麗強毅の性質が彼の同伴に與へたる印象、彼が棟梁たるの力、人々の充分な信任を明かに説明する。

別れを悲むシトリーの僧徒と袂を分ち、母の墳墓の地デジョンを過ぎ、生ひ立ちの地フオンテースを過ぎ、少年螢雪の地たるシャーチロンを過ぎ、丘陵起伏の地を超えて北方に行くくと殆ど二百哩にして、とある谷地に達した。長さ八哩、幅三哩、東方に向つて開け、森林に覆はれ、オーブ河の急流が之を貫流する。此谷地はシャンパンニユの騎士セユーが修道院の所在地としトリーの院長に與へた所である。若き植物繁茂するによりて往時は『にがよもぎ谷』の名を負ひし荒蕪地であつた。盜賊の隠家たるによりて其名は實際的切となつた。ベルナアドが修道院を建て、土地の面目を一新したるによりて明るき谷即ちクレージュオーといへる新名を生じたと、屢々想像されたのは無理ならぬことなれど、彼の來ぬ前から新名を受けたと思はる。

殆ど同じ高さの兩山脈が西に於て相接する、其所が修道院の所在地である。之に反して東に向ては遠く相隔り、後年田圃、牧場となりたる廣き面積を抱擁する。此所を例の河が貫流する。朝暾は谷一面に照り渡る、午后の日蔭漸く修道院の上に落つれども、南北兩邊の丘陵は落日を浴びて大氣は日一杯明麗である。或は伐り或は掘り、或は墾き或は植ゑ或は刈り、或は流を分つ等、僧徒の耐久、巧妙の勞力が、山地及び草地の上に注がれし後、此地は雙び無き閑寂な光景を呈するに至つた。此方の丘陵には葡萄園あり、彼方には果樹園があつた。支流を導いて石垣の下を走らしめ、製革製粉の車輪を轉せしめた。東方には花園、果樹園、草地及び魚池を設けた。西方には清冽な泉が湧出した。全所

の光景は田園の潤澤と愛嬌とに満ち、此所を住居とし、額に汗して之を化成したる人々は最早此所を離るゝことが出来なくなつた。然れど此結果は堅忍不拔、奮勉努力の幾春秋を経て達せられた。其が最初の生活に至つては、僧徒の敵手(若し斯の如きものありとせば)をすら同情の餘り、緘黙せしむる程であつた。

彼等がシトリーを去りたるは六月であつた。徒歩なるが上に行きも各人自ら擔ひたれば、道中に二週間餘りを費した。然れば此谷に達したる時は播種の期に後れたる上に草木がいたく生ひ茂つて居た第一着に彼等の草庵を打建てねばならぬ。禮拜堂も食堂も寢室も仕事場も皆一つ天井を頂き、土間を床とし、木牀を寢臺とし、丸太を枕とする。秋に至つて漸く其工を竣へた。次に彼等の前に横はる仕事は森林を取拂ひ、荒蕪を墾き、水澤を乾かし、原野に栽培して、荒れ果てた自然から、着物と食物とを取ることであつた。五百年前グレゴリー、ズエ、グレートは斯う言つた、懶惰に生活するは石にあらで柔かな土を枕するのである、随つて天使を見ることはない。又怠惰は不潔なる思想の養育者である、又活動的生活と理想的生活とは二つの目の如くである、顔面と同じく此二者の結合を要する

と。

ベルナアドの同志は、グレブリーの所謂左眼を操練教育する有ゆる機會を有した。叢林を伐採して薪に束ね、荆棘を根扱ぎにして天火に曝し、樹木の成長を妨ぐる傍芽、徒長枝を剪除する——此等は

常に彼等が勞役の一部であつた。最初の程は殆ど其全部であつて其間の艱難は信ずるに餘りある程であつた。夏季に於ける彼等の食物は大麥及び稗の粗末な麵麩と、水漬けの榲葉及び大葉菜の副食物であつた。榲葉の實及草根は冬季の食物に備へられた、鹽が全然無くなつた。ベルナアドの信仰は之に連れて顯はれた、程遠からぬ村落の市日に、鹽を買ひ來れど一僧に命じた、而も一厘錢だに所持しなかつた、空手にして往かば空手にして歸るべしとて遲疑したれば、院長は斯く答へた。「恐るゝな、財寶を持てる者汝と共に在りて、我遣はす所を供給することあらん」と。聽て彼の僧に豫想外の道が開け、希望以上を得て歸りたれば、ベルナアドは「我子よ、信仰程基督信者に必要な者はない、信仰を有て、始終汝に好都合であらう」と、言ふのみであつた。

然れど困難の絶ゆる時はなく、酷烈の度を増すのみであつた。飢寒と恐怖とに驅られて、僧徒は爲にシトーに歸らんとした程であつた。其時ベルナアドは跪づいて祈つた。天よりの聲が彼に答へたと感じた。彼等に祈りたる所を問はれて、簡單に「其儘止まれ、汝等知るべし」と、答へた。程無く未見の人が十リーヴルを彼に齎らした、刻下の欠乏は之にて充たされた、又一人は其子の重病に彼の同情を求めて、十三ソヴルを齎らした、又最寄の修道院の僧徒が困難を耳にして、其院長から數多の需要品を送り越した、月日の移るに連れて不十分ながらも、開墾地からも物を産するに至つた、絶對的の飢餓は最早無くなつた、修道院は都合よく其歩を進めた。古の史家が「神は御恵の中に顧み給ふて、

一時の救助も永遠の救助も欠くる所なからしめた。主を恐るゝ者は、總ての善き物を欠くことなしとの約束に従ひて」と言へる通りである。

修道院所在地を其管区内に有する、ラングルの監督が不在なりし爲め、シヤロン、シユルマルヌの監督が紀元一一一六年にベルナアドを修道院長に聖別した。此監督は、著名の講演者ウイリアム、オプ、シヤンポーと史上に知られたる人にしてベルナアドの賢明にして熱心なる朋友であつた。前講に言へる如く、一年間院より身を退いて、構外の茅屋に籠居せしめ、斯くしてベルナアドを救はんと工夫したるは彼であつた。初年の苦行の悪結果は到底回復しなかつたが、此茅屋を離れた時から、世界に於ける大仕事を爲し得る身となつた。修道院は數に於ても勢力に於ても日増に隆盛になつた。更に大なる建物が、一層好適の地に打建てられた。數多の分院を各地に作したことは、毎年平均四個以上であつた。修道院生活の最高美德の名稱が歐羅巴に響き渡つた。

ベネチクトの規定が、ベルナアドの存命中は勿論死後と雖も感化の消えざる限りは、嚴守せられた。此規定に従へば、院長は縱令僧徒の選舉せし者とはいへ、彼等の間に主を代表すれば、彼に尊敬と服従とを拂はねばならぬ。そは此規則中の顯著なる者である。肉慾を委にする勿れ、虚言戯語を弄する勿れ、謙遜なれ、傷害を忍べ、粗品と賤役とに満足せよ、宗教的儀式を絶たざれ、勞作に一定なれ等である。罪過に對しては訓誡を設け、尙惡しき罪過には懲罰、矯正し難きには放逐が設備された。

私有財産は勿論許されなかつた。僧徒は順番に庖厨、食卓に給仕した。食ふに物言はず、聖書の朗讀但だ之に伴ふ。毎夜晩禱前に、精神的講話が授けらる、晩禱後は沈黙あるのみ。夏は黎明より十時迄は勞作、十時より十二時迄は讀書、點心、休息、午後は晩の歌迄再び勞作である。冬季は時間割に多少の相違あり、戸外の勞作は制限中止せられた。然れど勞作、讀書、祈禱等の連續に至つては同一である。老人には多少の斟酌があつた。病者には入浴及肉食が許された。四旬齋には特別の謹慎が命せられた。日曜日には、教會の儀式以外の時間は、讀書を課業とし文盲驚劣なる者の爲めには他の課業が設けられた。

此規則が歐羅巴の修道院に概して名目ばかり行はれたに反して、クレールヴォーに於ては實際の規則であつた。クルニール同様、多數はいたく弛廢して居つた。ベルナードの鋭利なる筆鋒が古への謹戒謹慎に代れる今の豪奢を叙述し、之を排斥して曰く「聖なる教父等が此生活法を設定し、之によりて多數が救に入りたる事と、規則其自身を壞亂せずして、弱者の爲には規則の嚴酷が調節せられたる事は、明言せられ又實に信せられたる所である。現今多くの修道院に目撃するが如き、虚榮と冗物とに至りては、設立者の心に遠しと言はざるを得ない。然ばかりの不節制が、如何にして僧徒間に確立し得たかを驚く。即ち宴樂、衣服、臥榻、馬術、建物の構造に於て、見よ節儉は貪婪、謹直は峻嚴、沈黙は悲哀に等しと思はるるを、之に反して懶惰は慎重、浪費は寛大、饒舌は慇懃、洪笑は歡喜、柔かさ衣服は

馬の飾りとは威儀、朗讀者の無用たる慎重は文雅と稱はるゝにあらずや。聖書について何事も行はれず、魂の救に何事も行はれぬ。唯譚語、戲言、浮辭の空中に投せらるゝのみ、耳は譚語にて充ざるゝ如く、晝餐に於て顎は稱味にて充され、且つ食ふに餘念なければ節制の影だにない。食皿又食皿、禁戒の獸肉に代へて、大きな肴の數を重ねる。第一品に飽ける後、第二品となりて而も初めて箸を取るが如き心地すべし、其苦心と技巧とを調理に用ふるや四五皿が食膳の上りても、初めと終りとは低觸せず、腹は満ちても食慾は減せぬ程である。雞卵が如何なる様に搔かれ又傷められ、如何なる注意もて上下に反復され、柔かにし又固くせられ、敲かれ、油に揚げられ、火に炙られ、詰物にせられ、或は他物と刻まれ或は其儘食器に盛らるゝを誰かは能く叙述し得べき、單に口のみならず、目を喜ばしめんが爲め、外觀其者に注意せらる。胃は屢々あくびを催して飽滿を示すに、好奇心は底止する所を知らぬ。水に就いては、我何をか言ひ得べき、誰人も水を飲まず、葡萄酒を混へたるをすら飲まざれば、吾等僧徒となりし日より皆胃腸を患ふれば、葡萄酒を用ふる上に使徒の教誡は怠りぬ。唯其訓言の「少しく」といへるを省きしは如何なる理由か知らぬ。純粹の葡萄酒ならば、其少量にだに満足すべきである。之を語るは我が耻辱である。然れど之を行ふは更に耻辱である。之を聞くは汝等の耻辱であらうが之を改むるは汝等の耻辱であるまい。汝等は晝餐に半ば葡萄酒を容れたる三四の杯が、一見して最強烈のものたるを示しつゝ、持廻らるゝを見ん、其は味はるるよりも寧ろ嗅がれ、味はふに

しても全くは飲まぬ。祭日には或僧徒の中には蜜を混じ、香粉を振り掛けたる葡萄酒を用ゐる常例ありと聞く。是れが胃弱の爲に行はるゝと言ふを得べきか。着物の選擇も亦、有用を主とせず、其美麗を主とする。寒を防ぐにあらで、高慢に供せんが爲め、我は慨然として之を言ふ。謙遜の徴たる我等の常服は、今時の僧徒に倨傲の徴として着用せらる。吾等が謙遜以て着用すべき者を州内に見ることが出来ぬ。兵卒と僧侶が「頭巾、外袍の爲に同一織物を分つ。若し我等が其人の風を摸して装はゞ、令王たり縦令帝たりとも此世の誰人か我等の衣服もて纏はるゝを恥とせんや、然れど汝恐らく、宗教は心情にありて衣服にあらずと言はん。甚だ可し。然れど——言ふ迄もなく心の庫なり、外部の惡を出すのである。高ぶる心が虚榮の目標を身體に與へ、外部の奢侈は心の高ぶりの索引となる、柔かな着物は、魂の柔弱を示す、美德の爲の精神の修養が先づ忽にせられずば、身體を装ふに然ほど注意を拂ふことが出来ぬ。

斯く忌憚なき嚴酷の筆を向け乍らも、ベルナードは彼の社中に他人に對する敵愾、侮蔑の精神が無きやうに祈つた。曰く「若し吾等の中に、他人に對して、侮蔑的バリサイの高慢あり、吾等自身に過ぎて他人を賤しむ者あらば、我等が生活法の節儉及び嚴酷とは吾等が衣服の質素も、勞作に於ける日々の汗も、斷食及徹夜の實行も、吾等が生活の特別な苦行も人に見られん爲に行ふにあらざんば我等に何の益あらんや。然れど斯る者に對して基督は言ひ給ふ、「眞に我汝等に告げん、彼等は既に其報賞を拂ふことが出来ぬ。」

得たり」と。若し基督に於る望を此世のみに有するならば總の人の中にて我等は最も不幸なる者ならずや、然れど彼の奉仕に於て若し一時の名聲のみを求むるならば、此世にすらも基督に於て望むことが出来ぬ。……地獄に至るよりも容易き道が見出されざりしか、若し彼所に往かねばならぬとならば、何故多數と共に死に至る其廣き道を選ばざるや」と。

縦令其放逸は非難すとも敬神同情のベルナードは決して他人を侮蔑しない。彼は、後世の清教徒と同じく「神の國は汝等の中にある」ことを確信した。即ち彼の言へる如く、其は衣服にあらず、食物にあらず、内なる人の美德にあり、又謙遜なる心をもて褐を着たるは、高慢にして外袍を纏ふに優ることを確信した。彼は、ベネチクトの規則を賢く解釋した。即ち彼の僧徒中の病者、老者には寛大であつた。自ら手を下して之に仕へ、周到なる注意をもて彼等の慰安を圖つた。之に加へて鼓吹の心的勢力と、世界に於ける無雙の位置と、神聖なる生活とによりて、彼は彼等の優さし敬愛を博した。然れどクルニーに非難したるが如き弛廢は、彼の管理の下に起つたことがない、彼は神に彼等の報告をなすべき者として、管理を委ねられた人々を見張りする院長であつた、其修道院規則の嚴重な厲行は、智慧と深切とで調節するありとも確實又堅固であつた。

快適なる現代社會から之を見れば、其は奇異なる生活である、其生活状態の多は困難にして粗野、愉快なる社會的優雅の何等之を慰め之を装ふものがない、女性的愛情の何等柔和なる服務がない、育

兒房の牀上に何等幼童の跳躍がない、何等歡喜、自由、何等最善に對する嬉しい刺戟物を家庭の爐邊に見ることがない、之に伴へる夥多の道德的危險がある、勇氣よりも服従を學べる人、知解的信仰及び聖別以上に感情の利己的興奮を重ずるに至りし人、別けても女性を疑ふことを學び、犬儒學徒兼戀愛論者となりし人、此等多數の精神及び性質に、莫大の損傷を來らした。吾等は人性より推論が出来る如くに亦歴史に於て之を見る。『アイヴァンホー』の讀者は、愼密、高雅而も無慙なる酒食の徒、修道院長アイマアとして、歴史的真實として、スコットが描出したるは、ベルナードが其名聲の盛んなる日に聖別を與へたるシステルス僧團の僧侶たりしことを記憶するであらう。愼密高雅と其鍍金とは我慾と終始しなかつた『獨居の人は野獸となるか、然らざれば天使となる』と言へる伊太利の俚諺は屢々證明された。而も地上に於ては天使よりも野獸となり勝である。不自然な抑制は、多數の人々に適用するに、不自然の放逸に反動する傾向がある。嚴律に對する情慾の反衝は銃鎗を飛び越ゆる暴徒の突進を思ひ出さしむ。自分は修道院生活の辯護者でない。却て其が開墾したる荒蕪、其が征服したる森林もろ共大部分消失したるを慶賀する。之を喩ふれば、死火山又は初期の哺乳動物の如きものであつた。然れどヴォルテールすら是認するに躊躇しなかつた如く、若し修道院生活が不行跡となりしならば、世俗生活は更に甚しかつたことを忘れてはならぬ。而して之を公平に評價せんとには、修道院を取圍みし、前世紀の影體たる猛烈亂暴の氣風即ち其時代の野蠻的荒暴、貪婪強慾の爭鬪、狡計及

詐術、殘忍又破壞的野心以外に之を置いて觀察せねばならぬ。其關係其對照に於て之を描かば、ベルナードに統治せられし修道院は、其中に強大なる引力を有した事と、又常に弱者性者貧者のみならず、教養の熱心と篤信とを有する優美高尚の人々が、殆ど不可抗力をもて之に引寄せられた事とは異しむに足らぬ。

彼等が誓ひし約束の不變其者が、多數には平和の條件となつた。此世の褒美及追求より我から離別した。然れば概して、彼等の選擇したる状態に不和を感じなかつたとは、宛がら自己の身長、自己の容貌、自己の家系、若くは自己の一股の喪失と争はぬに等しかつた。永久に自己を制裁、拘束するを悔しともあらうが、出來得る丈け其心を之に適合せしむる。俗生活からの孤立を、折々遺憾に思へる僧徒は勿論少くはなかつた。然れど今は確定したる事なれば、變更し難者として争ふを止め、多數は出來る丈けの最善事を之より作り出さんとその本能に従つた。

次に修道院の位置が、高尚な心意に對して最上の引力を有した。即ち此世の喧噪混亂の最中に神聖生活の大理想を持して變ることがなかつた。彼等をして之に加はらしめた刺戟は、世に打勝たんと欲望と不滅の經驗を準備せんと欲望であつた。彼等の日常生活は、彼等が準備して居つた永遠を彼等の前に設くる地は滅び、地に在る物は焼け失する。然れど彼等が求むる所は神の生くる限り、又彼等の魂が神の前に生くる限りは永存する。然れば百年地上の短日月を宮廷に送るとも、將た茅屋

に過ぐすとも、滋味に飽き榮華に耽り、或は糝糠を食ひ、僧の糞溷に横はるとも夫れ何かあらん。然れば百年、世より隔絶して基督に近づき、全心を盡して神を求むるとも、將た精神を荼毒したる奢侈に生活し、窮極の破滅を齎らす我慾と高慢とに生活すとも、何等無限の相違がある。ベルナードの如き僧徒には、永遠世界は近く鮮やかにして我を掣肘するものであつた。彼等の特別な生活法は、彼等を此嚴肅高尚な默想の高さに引擧げた。

天然又は練習にて、此良習の素地を有する人には、高尚、多産なる默想の機會が豊かに與へられた。是は時に大祝福の一であつた。人は最善を爲さる爲に、反省と沈黙とに於て、折々自己の中に引退せねばならぬ。監督ホールンが、洗禮者約翰に就きて記したる如く「智慧と神聖の途に、他を指導する任務を企てんとする人は、先づ暫く世界から退隱の状態を送りて、其目的に自己を合格せしむべし。其所には心に懸る憂慮も、目を欺く快樂も亂入する能はず。また其の注意を散漫ならしむるとが出来ぬ。其所には、何等懷疑的宗派的的精神も、其の理解を暗ます能はず。また上よりの光輝を遮ざることも出来ぬ。略言すれば、イスラエルに顯はるゝの日まで、漸々成長し、精神ますます強健になるべき所である。ベッドフォードの獄舎は『天路歷程』の適當なる搖籃となつた。世より離別せしめたるミルトンの盲目は、樂園の門を彼の爲に開いた。『聖徒の安息』は彌久の病床から出た。パスカルの『ペンセー』は不安孤立的煩悶の生涯から生れた。ノルサムプトンの森林、靜かな木蔭の默想にエドワ

ードは神と神の國との莊嚴な思想を得た。暫らく外界の事物を遠ざけ、社會の射利的突進の反響が聞えざる、學者の室内又は神學校に於て、如何ばかり智的聖的生活の高尙なる努力及成功を得るかよ。其所には博愛と宣教とが生れた。其所には眞理の直覺が聖書に新意義を與へた。其所には神との血縁を魂に確言して永遠不滅が眼前の事となつた。

往時に於ては斯の如くであつた。神的事物の幻像に咫尺せる渴望的、思想的精神は、王宮に見出し難き自由と機會とを、僧の密室に見出した。ランドルの言へる如く、寂寞は彼等に「神の謁見室」であつた。ペーコン公が、學問の進歩に必要と見做したる者を彼等は享有した。曰く「基礎及建築補助金支給及び政府の訓令此等は皆生活の平靜及内密と、憂慮勞苦の解除に用立つ」附記して「ヴァージルが蜂の巢に因みて規定したる營所の如く」と。風雨の亂入し難き人類の蜂房の中に、實に蜜が藏められた。

如何にして過去及將來が、現在の如く豫言者の心に映じ、確信をもて此等を理解公言せしかの問題を默想しつゝ、アンセルムガベツクの修道院に臥せる時の事であつた。中間の障壁を透して拜殿及び宿房の僧徒を見た。彼等は朝拜の爲に食堂及び祭壇を整へ、一人は鐘を鳴らし、其の響につれて僧徒は皆儀式に向つた。彼は其の幻像に驚いた。然れど斯く多くの障害物を透して、彼をすら目撃し得べからしめられたれば、神が其靈をもて將來を豫言者に示すは易々たる事と思ひ付いた。他日又、神を其永

久と遍在、全能、聖なる性質とに關する教理が如何にせば簡略に表示證明せらるべきかを熟思し、禮拜にすら此疑問が付き纏ひて、惡魔の誘惑にあらざるかを疑はしめし時は、是も夜半であつた。彼が徹夜の最中忽然として其心に光を得、全問題は氷釋して、魂は勝利の歡喜に満たされた。

此等は勿論異常な實例である。單に是だけを擧ぐるならば、修道院生活より産出し又は養育せられし智的狀態の法外なる、寧ろ變體なる或物を表示するが如くである、然れど其生活は又心意を醫やし、不規則狂妄の狀態を止むべき、外界の勞力をも數多所有せしことを記憶せねばならぬ。其仕事は多種多様にして肝要なものであつた。自分はクレールヴォーの僧徒の細かい日程を知らない。勿論彼等は實行に忙はしく之を記すに追がなかつた。斯る思想其者が馬鹿らしく思はれたであらう。彼等は唯彼等が開始したる勞作は、後年にも續行せられしことを知る、但だ其勞は輕くなり、面白さは加はり、報いは與へられて果樹園は即ち成熟擴張し、荒地は即ち穀物と草とにて笑ひ、葡萄園は累々たる美しき房を垂れ、水車は製革製粉に力を添ふるに至つた。

然れど柔和な仕事向きの人には野外の力役が大抵筆仕事に變更せられた。ベルナル前後の時代の寫字室は、書籍の謄寫に従事する各種の人々に適合せしめたものであつた。通例温暖を添ふるなく點火することもなかつたと見ゆる、メイトランドはゼロームの『ダニエル書註釋』の寫本に附記せらるゝ對句を引用する、之によれば、筆者が筆執りし間に凍え、日の光にて終へざりし所を月光星光にて

終へたりと筆者自身が云ふ、然れど記録に用入な道具は供へられた、インキは煤煙又は象牙、煤に樹膠を混じ、酢にて稀薄になしたる者にして、現時の品よりも遙に耐久力があつた。ペン、白蠟、羊皮、紙を熨すべき輕石、之を裁つ小刀、定木、罫の距離を測るコンパス、インキ壺、「句點附け」の革錐、時にはまた蠟板記録用の鐵又は骨の尖筆。——例へばアンセルムがインキを符合はせず其プロスロギオンを蠟板に記した如き。其が後日紛失破壊を來した。十世紀以後屢々用ゐらるゝに至りし綿紙は、高價な羊皮紙の代用品として、寫字室の要求に應ずるやうになつた。羽製のペンは夙に世に出たれど多數は尙蘆葦若くは蘆筆を用ゐた。院内の他室同様の沈黙が、寫字室にも守られた。仕事を爲すには精勵と忍耐とが必要であつた。寫字室の維持の爲に多額の寄進が行はれ、時としては他所に遺された然れば其室は多數の重じたる所にして、之が爲に捧げられし祈禱が、八世紀の一文書に、大なる文字で記された「オ、主よ、汝の僕等の此寫字室と其中に住まふ總てを祝福するを許せ、如何なる聖き文書が此所に彼等に讀まれ又記さるとも、主耶穌基督によりて理解をもて授けしめ、又之に善き効果を與へ給へ。

僧徒が斯く謄寫又は述作したる書籍は、亦彼等に裝釘せらるゝのが普通であつた。多くは羊皮又は豚皮の表紙であつた。時には珍らしき彫刻を施せる木製の者、時には鉛板であつた。成績良好の者又は特別重要な者あれば、或は象牙、寶玉の裝飾を施せる天鵝絨を用ゐ、或は銀板を用ゐ、其上は黄金

又は遺物もて、裝飾した首文字は、屢々鬱金、淺藍色又は深紅色もて挿入せられた。裝飾せる縁邊が附せられた。往々精巧なものである。繪畫が屢々欄内に畫かれ又數頁を隔て、畫かる。多くは密畫にして中には略畫がある。パリの國民圖書館のは柏の厚表紙にして、黄金を被せ寶石を鑲め、磔殺及復活を鏤細工せる黄金の矩形板を有する。又象牙板に精細な彫刻を施した者もある。ムーニヒに在るのは、美麗な眞珠もて飾られし金縁の表紙である、其には主が片手に福音書を持ち、片手を動かし、天の福を宣言する所が描出せらる。斯くの如く鍛冶の術は寫字室の製作品に屢々鼓吹を受けた。傳ふる所によれば、英國博物館にある、殆ど五百枚の裝飾せる美麗な積皮紙は、アルクインがカロロ大帝に與へた聖書の寫本にして、其準備に二十年を費したといふ。

僧徒の成就したる謄寫の業のみでも、範圍宏大、價值無量であつた。ハラム氏の言は當を得たるものである。中世紀の修道院が現代に致したる重要な貢獻は、『書籍の安全な貯藏所として』であつた、今日の有ゆる寫本は、此方法で保存されん、他の道筋にては我等に傳來することが出来なかつたと、修道院に毫も嗜好を有せざるレッキ氏すら斯く言ふを躊躇しなかつた。其は『智的勞作の一區域となつた、而して數世紀間其位置を占めて易らなかつた』と。縱令絶對にはあらずとも、歐羅巴に於て、圖書館と呼ぶる、圖書館は、當時の修道院にのみ見出された。此等に由りて基督以前及當時豊富、宏大な世界の文學が傳來した。聖書又は初代教徒等の著述を始めとして、異邦の詩人及雄辯家、歴史家及哲

學者に至る迄、僧徒の保存せし所に對して、騷擾破壞時代の靜肅な寫字室に於ける、彼等の管理、勞力とに、我等は深く負ふ所がある、蓋し彼等は此部門に於ける己が仕事の價值を知らなかつた。例令ばクルニーに於ては彼等が所要の書籍を告ぐる時に、若しヴァーゼル、又はハレリス、キケロ又はプラトリーの如く異教徒記者の寫本を求むるときは、疥癬病犬の如く耳を掻くことを慣例とする規定であつた。

然れど其仕事を好む好まざるに拘はらず彼等は之を行つた。而して其書きたる所を記憶し、之を例證に用ゐ、又之から反省の題目を興へられた。例へば、ジョン・オヴ・サリスベリーは、其唯一の書、『ボリクラチクス、イン、ヌギス、クリアリウム、エトセトラ』に於て、テレンス、ジュヴェナール、オヴ・イド、ホレリス、ベルシウス、キケロ、プラトリー、アプレイウス其他多くを引用する、——之を算へた人の言によれば、古代作者の引用一百二十人以上に及ぶといふ。十一世紀の寫本『クロニク、デ・タス』に二百以上の詩句が、種々な古典記者ヴァーゼル、オヴ・イド、ジュヴェナール其他から採萃せられた、總てが次第をなして排列せらる、其は唯韻律量を定むるの目的に過ぎなかつた。ジョン・オヴ・サリスベリーの主義は之よりも聰明な目的に用ゐられた。即ち總ての書を讀むべし。或者をば擯斥せよ、或者をば輕視せよ、或者をば瞥見せよ、或者をば研究せよ、人を善良ならしめざる者に心を留むる勿れ。但だ如何なる方面より來るとも、眞理は不朽又不可朽として之を見るべしと。異教徒記者に對

するの偏見は屢々烈しかつた。ギゾーが驚嘆の語を放てるアルクイン自らは、其著書にビタゴラス、アリストートル、アリスチッパス、プラトール、ホーメル、ヴァーギル、セネカ、プリニーを引用し乍らも、晩年には門生が、ヴァーギルを讀まざらんことを欲した。其理由は聖死人をもて足れりとすべく、マンツァ人の不潔な雄辯に汚されざらん爲であつた。クルニーの院長の一人が、ヴァーギルを讀まんとの愉快な計畫をした。其夜の夢に、美麗なる大甕に蛇充滿し出て來りて彼に纏はんとした。彼は之を以てヴァーギルと其不潔な暗示とを表示すと推し、爾來世俗的詩人を遠ざかつた。

然れど多數はジャスチン、マートル、クレメント、オヴ、アレキサンドリア、アウガスチン等の推薦せる路を取つた。此人々は何事が何所に語らるゝとも、道理は基督者の財産であるとの理由の下に皆古代作者を讀んだ。オリゲンがグレゴリー、タウマツルグスに與へた教訓、「希臘の哲學から基督者に對する準備に資すべき者を搾取し、幾何學及び天文学から聖典を説明すべき者を搾取し」と言へる又ベシルが青年に與へし訓誡は、古文學をば、蜂が花を遇するが如くに、其用に適する者を選びて他に移れと言へる、是等は教會の忘るゝ所とならず却て益々其實を結んだ。十二世紀の中葉に一修道院長は斯く言つた。「キチロの準備した食皿が、我食卓の主品物の第一品ではない。然れど彼も善き食物を盛られ、何等我を喜ばすあらば、晝食後卓上の菓子を食べるが如く、我之を食する」と。或人ベツクの院長ヘルルインの生涯及び其修道院に集まりたる數多の學者の事を記して斯く公言した。「詩人の

空想、哲學者の智慧、高等文藝の修養が聖典の會得に甚だ必要であつた」と。

古典文學すら、斯く僧徒の勞力にて近代の爲に保存せられた。インガルフスが、大小七百以上の寫本が、クロイランドの修道院に於て焼失した——黄金の十字架及繪畫も飾りたる、美麗な特許狀並に各種の金屬より成れる美觀及びなき星學表と共に——と言へる(紀元一〇九一年)其中には如何ばかり多數の古寫本があつたかを知らぬ。然れどモンド、カツシノの圖書館に今見るが如きテオゲリツスのイヂルス、オヴイドのファステ、ヴァーギル及ホレリスの詩、キケロの論文、テレンスの喜劇等は僧徒の寫したものである。フロレンスのローレント圖書館に遺存する九千の寫本の大多數は亦然うであつた。歐羅巴の大圖書館に、多大の引力と名聲とを與へた第五世紀乃至第十五世紀の十世紀に亘る總ての寫本も又實に然うであつた。

ゴエネラブル、ビードが、八世紀の初めに、拉丁、希臘、希伯來の言語を研究せし時は、羅馬から彼の修道院に齎らされし修道院寫本を使用した筈である。オルデリクスがランフランクを指して「アデンスが其教育の譽高き、最隆盛の日に雄辯、教練の何れに於ても彼を賞揚したであらう」と言ひし其ランフランクは、訓練と修養の主要なる器械を、修道院の圖書館と、其在住者の勞力とから引出すの外はなかつた。修道院なかりせば彼等が集めた寫本、及び彼等が謄寫した寫本は、古文學の貴重な斷片を始めとして、基督以前の智的富裕を表示する一切の喪失を悲むのであつたと言ふとも過言でな

い。修道院の破壊は後世を暗黒ならしめたであらう。

然れど、經典の保存に致されし僧徒の貢獻は、其必要と價值とに於て、古典作者に對するの貢獻を凌駕する。之を思ふと愛敬を拂はざるものはない。例へばベルナードの最初の修道院ミトーの第三の院長、聖エチエンヌは大なる聖書を六冊に記さしめ、博學なラビに伯希來の寫本と對抗せしめた。紀元一二九九年に一監督が證文を入れて二冊より成る一つ折の巨大な聖書と、註釋とをウインチエスタ一の修道院から借り受けた。又十二冊もの、聖書が、紀元一二九四年にカムブレの監督から一修道院に譲られた。僧徒は之を賣却せざることを又確かな保證なくば貸與せざることを約束した。ヒルデシャイムの監督、ウイクベルトは、十世紀の末葉に聖書全體を手寫した。ゼンブローの院長オルベルも十一世紀の初葉に矢張り全體を手寫した。ウイクベルトの後繼者の一人は、欄外註を附したる精細な二冊の増補的寫本を院の圖書館に與へた。各修道院が、經典の全部、或は能ふべくんば其立派な寫本を有せずは、此世と惡魔とに對し、虛弱にして防禦し難しと信じられた。

其一點一畫を疎にせざるのみならず、前に言へる如く首字及び縁邊は彩色を施し、外部は黄金、寶玉もて燦爛たる者屢々殘存するを見る。ラクローアは其著しき例を擧げた。例へば、パリの國民圖書館に現存する十三世紀に記されし詩篇の如き、五色もて記せる佛蘭西、伯希來、拉丁の原文に註釋を添加したるもの。其他渤海を掛けたる銅の表紙ある者、彫刻したる象牙、又は寶玉を鏤めし銀の表

紙ある者の如きである。曰く「一切の大公的聚集は、世にも稀なる貴重なる裝飾を誇りに展覽せしむ。是等の裝飾は金銀銅に彫刻又はひた彫を施した者、寶石又は色硝子、浮彫せる寶玉又は古代象牙を鏤めた者である」と。或物は紫色積皮紙に、一部又は全部、インキの代りに金文字又は銀文字もて記された。是等は勿論最も豪華なる表紙もて飾らる。シルヴェストルは其「古文學」に澤山の實例を擧げた。ルイ、ゼ、デボンネールは、紀元八二六年に、金文字で記し、金板もて裝釘せし福音書の寫本を、ソアソンの修道院に與へた。ランスの大監督ヒンクマルは其教會の爲に、之と同じき二つの寫本を作らしめた、其裝釘は同じく黄金に寶石を鏤めしものである。フリウリ伯は、聖書の寫本の外に一福音書は金もて、一福音書は銀もて、又一は象牙もて裝釘せし者を其子供等に遺した。皇帝ヘンリー二世は、モント・カッシンにて病氣の恢復せし時、飾字、裝釘共に黄金を用ひ、寶石の飾釘を打ちし、大文字の福音書寫本を修道院に呈した。パウリアの選帝侯は、福音書の立派な寫本に換ふるに一都會と其附屬とを以てせんと或修道院に申込み、僧徒は之を拒絶した。斯の實例は、若し資力と時間とを有して穿々を續行せば、限り無く増加すべきは勿論である。又此等の實例は、統治的教會有司か、其一般使用の結果を恐るゝに至りし以前に如何なる價值が經典に附せしかを示すと共に、又多忙なる寫字室の仕事は、如何なる種類なりしかを示すものである。

戰爭及び火災の破壊を被り、又夥たしき羊皮紙が表紙用にとて、製本屋の切斷する所となり、又英

國博物館に現存する大憲章の貴重な寫本も、既に危ふかつたと言はるゝ如く、裁縫師の尺度に使用せられ、又修道院の革命的掠奪が其圖書館を分散したにも拘はらず、然ばかり多數の經典寫本が、全部の儘若くは其一部が今に遺存するの事實は、——斯かる多數の製作に拂はれし勞力が、如何に熱心不斷なりしかを示すものである。近代に於ける最も慎重該博な聖書原文學者の一人は、斯く力言した。『舊約の七十人作をも加へて、希臘語經典の寫本が、時代に於ても數に於ても、有ゆる古典作者の寫本を合したるものに超過するは、記憶すべき事である』と。是は勿論莫大な拉丁譯を含有しない。拉丁譯の本に至りては其現存する數は、一切の古書を合せたよりも多い。唯希臘語の經典のみにても、殆ど六十の寫本ありと知られたる初代の大字本、一行平均十二字詰の者、縱令此等の多數は一部のものとはいへ、次には乃ち半大字本又は十世紀以降流行したる草書本、其一千六百有餘が公私の圖に屬すと算へらる。然れど東方修道院の探検不充分の頃なれば、近年の目錄に重大な増加を來せし歐羅巴に存する其等寫本の一切は未だ知られなかつたことは確である。此等中世紀の寫本は、アイザック・テロールの言ひし如く『混亂暴虐の時代に於ける其等の保存は、其宿りし屋蓋の神聖に屢々負ふ所があつた』又其使用されし材料羊皮紙及インキの耐久力は、亦彼が言ひし如くである。修道院の厚き壁は屢々顛覆し、又其材料は忽ち土を混するを見れど、其中にて書かれ、爲に其石か採石場にあつた時代に書かれし寫本は、未だ鮮明完全にして其金銀、其青色、朱砂は依然光を放つ』と。

僧徒の勞作は謄寫のみではなかつた。彼等は亦翻譯、編輯、述作をも行つた。數多の説教及經話は勿論、數多の史籍が記された。十一世紀の初葉、聖ガルの一僧が、日耳曼語で詩篇の意譯を書いた。又バムベルグに於ては、後に院長となりし一人が、拉丁の律語と日耳曼の散文もてソロモンの歌の二重意譯を作つた。九世紀の初めに、希臘皇帝から贈物として佛蘭西に來りし、僞ディオニシウスの文書は、聖デニスの修道院に於て翻譯せられ、其後ジョン・スコツスに再譯せられた。クリンストムが、中世紀記者に引用せられたと稱する。プラトーンは、ボエニウス及びプロチヌスの爲に幾分か知らるゝ所となつた。ヴェネラブル、ビードは、文學、科學の各科に心を傾け、歴史、占星學、正字法、修辭學、博物學、詩學、音樂を説いた。彼の教會歴史は驚嘆すべき博學を證する。彼に對するボルクの批評は當を得たものである。曰く『信じ難き程の勤勉と、智識の博大なる渴望と此の賞讃を彼に否むことが出來ぬ』と。

歴史家の著作なくば、佛國史、英國史の智識が大に不充分であつたらう。英國に於てはビード、インガルフス、マシウ、パリス、ウイリアム、オブ、マルメスベリ、其他、海峽を隔てゝは、ラウール、グラベル、オード、オブ、ウインヌ、ウイリアム、オブ、ジュミエーデウオルデリク、ウイタリ、其他の多數は、嗜好的熱心と描寫の信實とをもて、事件の發程を我等の爲に畫く。オルデリクスが、古代近代の一百五十有餘の寫本を有する修道院圖書館に自由に出入し得たるは、其素養ある人たるを證す

る。彼はアリストートル、ヘロヂアン、シヨセフス、フィロ、並にキケロ、サルント、ヴァーヂル、ホレーヌ、オヴイド、テレンス、及び教父等の作を引用した。又ノルマンディー、英國間の同時代の關係記事が特に當時の記者間に頭角を顯はさしめた。マシウ、パリスの編年史は、史的事實の慎重、寫實的の記事以外に、飽の報導、天文学、氣象學上の現象をも報導する。其は佛譯者の注目せし如く、現今物理學者の注意を惹くに足るものである。聖アルバス修道院僧の『クロニコン、アングリエー』、コチルシヤルのシストルス派修道院からの『クロニコン、アングリカヌム』ロジアー、オブ、ホヴェデンの『編年史』、ラメルフ、ヒグデンの『ポリクロニコン』等、其他類似の蒐集が、其重要を知られて何人も知る如く此程英國政府の出版する所となつた。

當に歴史のみでない、初めて佛語で書かれた詩學に關する論文は、パリの聖ジュヌヌイエーの僧の作である。ロマンス語の唯一の文法がアインジードレンの僧に書かれた。ピーター、ズエ、ヴェネラブルは、ベルナード時代に猶太人に對して主の神性を説明せる一論文を書いた。彼はモハメッド教徒に對しても四篇より成る同論文を書いた。彼は又西方の人をして東方に旭日東天の勢ある、恐るべき宗教を理解せしめんが爲め、亞刺比亞語に通ずる人々の助力を得て、コーランを拉丁語に譯した。宗規の研究が普く行はるゝに至つた。十二世紀の中葉に伊太利僧グラチアンが、宗規、法王の書簡、教父等の文章を集め、章を分ち表題を附したる其『デクレツム』を出版せし後が殊に然うであつた。

修道院の外部にも教授を興へた。例せばピーター、オブ、ブローアが記す如く、クロイランドからの教師等がケンブリヂにて教授を施した(紀元一〇九年)即ち『哲學上の定理、及び他の根本科學』が教授せられ、『プリシアン及びレミギウスに基づける文典、ボルフイリー及びアヴェルホー(9)の「緒論」に基づけるアリストートルの倫理學、キケロの「修辭學」、クインチリアンの「インスチテューツ」が教へられた。要するに、學問の嗜好、習慣を有する人々が一旦修道院に入れば、各種の研究及び執筆の生活を送られしものと斷言して差支ない。時代は「暗黒」であつた。基督教國に何等光と望の現はれしあらば、通例修道院に於てであつた。而も普通の想像以上であつたことは、聖マウルのベネヂクト僧の『佛文學史』に明瞭である。隱遁僧トマス、ア、ケンピスに其『基督の摸倣』が記されたことは永く忘るゝことが出来ぬ。數ヶ國の言語に翻譯せられ、屢々翻刻せられ、廣く讀まれし點に於て、恐らく之に及ぶものはない。又敬神の情の鼓舞、修養に貢獻したるに於ても決して人後に落ちない。修道院に行はれしは當に文筆のみではなかつた。十三世紀の僧アルベルツス、マグヌスは、自然地理學、植物生理學に關する書を著し、解析幾何に嗜好を有し、コーリンの己が修道院に温室を設けた『スペクトルム、マイユス』の著者ボーヴェーのヴァインセンは亦其一例である。フムボルトが、「中世紀の最も重要、有力の人」と尊重せしロジアー、ペーコンも亦其一例である。彼は語學者、數學者、科學的發見者として名高く、曆の誤謬と、訂正の法とを理會し、透視法の理論と實行とに通じ、凹凸

のレンズ、黒カメラの使用、望遠鏡の理論に通じた。後世のペーコン公を盛名あらしめた其哲學は事實彼の先鞭を着けた所である。其珍らしき科學上の發見が、魔術者として人を恐れしめられたれど、彼は敬神なる羅馬教徒にして又僧であつた。寫字以外の技術に於て熟練な人々が亦多數であつた。オルデリクスの言によれば、エヴルルスの修道院長の一人は、彫刻、建築の如き技術の天才を有し、亦手づから蠟板其他筆録用の道具を調製した。僧徒の一人は特に書籍の裝飾の妙を得、亦謄寫にも暗記にも巧みであつた。又一人は修道院會堂の建築監督に成切した。又一人は金銀を裝飾したる龕を遺骨の爲に作り、數多の高價精巧なる器具を修道院に備へた。又一人は福音書の一つを金銀寶石もて裝飾した。又一人は熟達せる音樂者にして、趣味と巧妙とをもて歌ひ、又交代唱歌を作つた。又一人は名高き醫師にして患者より愛と尊敬とを得、之が爲めに澤山の寄進が修道院に致された。クレールウオーの僧徒は、裝飾せる彌撒書の華麗に名を知られた。又其感嘆すべき木彫が少くとも一例として遺存する。僧徒は亦農藝を農夫に教へて、其勞作を巧妙に、其結果を豊饒ならしめた。シャロン、ターナーはウイリアム帝の英蘭陸地測量簿を引いて、教會所有地の耕作の優れたるを證明した。他に比すれば荒蕪となるも森林たるに至らず、夥だしき草地を許多の分布に有し乍ら、普通の牧場とならなかつたと。然れば近隣の農夫は葡萄園、果樹園の耕作、良種の食用品及穀物に關し、應用園藝の學と術とに關して、新智識を學ばざるを得なかつた。ライン沿岸の最も有名な葡萄園は僧徒の栽植に係り。今

日ブルグルチーの精良な葡萄酒は彼等が開墾せる土地より出づる。彼等は屢々磽确不毛の土地を變へて穀物、葡萄酒の豊饒なる樂土となした。

修道院は廣大な範圍に於て施物分配の中心たりしが又注目されねばならぬ。吾等は現今の羅馬教徒からは證明は得られぬ、紀元一一一七年の大飢饉に、コロニンに近きハイステルパツハの修道院が肉、野菜、麩包等一日に一千五百の施物を分配したといふ事實をネアンデルは記載する。是は必ずしも非常な實例ではない、ブルグンチーの凶年に多くの饑民ベルナアドの修道院に群がりし時には、收穫迄彼等全部を支ふるの食物を有せざれば、二千人を選びて一定の扶助を與ふることとなし、爾餘は少しの扶助を受けしめ、斯くして三ヶ月を持続した。彼は直接補助を與ふるに満足せず。其の著しき同情に劣らざる實際的機敏もて、其友ジャンパーニエ伯を勸め貧者の爲に固定資金を設けしめた。其増殖を以て絶えず救恤の資力を供給するのであつた。彼は自己と等しく物惜みせざらんことを他人に勧めた。病中一切の所有を貧者に分與せしトロアイエの監督に、如何なる英才も富も、彼の筆から撈ぎ取ることの出來ぬ讃辭を呈した『就中王寶の尊稱(故意の貧窮より收得したる)が汝を貴くし、汝を著名ならしむ』と彼の確信はアンセルムの『世界の富は、人々の其益の爲である。萬民共有の父に創造せられたれば、又自然法により、誰人も他人以上の何等の權利をも有たぬやう創造せられたれば』と言ひしと同じであつた。彼等は貧者の待遇に於ける、基督者の寛大をもて其確信を實行した。

アンセルムはベツクに於て惜氣なく施與をした。而して僧徒自身の入用は、豫測し難き方法に於て送り給ふに相違なき神を望めと、彼等を勵ました。クルニの院長の一人は、貧者を救はんが爲め、教會の高價な聖器、美麗な裝飾、皇帝の贈與に係る金冠等を散した。此外多數の人でも、乏しき者に施すをもて歡喜とし義務となした。當時若し財政學者あらば、斯く大なる補助を貧者に興ふるは、徒に乞食を奨勵するに過ぎずと、今日と同じく駁論したであらう。然れど僧徒は亦自己の生活に於て、労働の尊貴を示したること、其等困難の時代には、自然の災害、戦争の災害から生じたる無事、無告の窮民が、今日よりも夥しかつたことが、記憶されねばならぬ。

修道院は常に貧者のみならず、亦能く病者にも奉仕した。ガレンのヒボクラテスの文書又は、既に提丁澤ありとせばサラセンの醫師の文書は、他には無くとも修道院の圖出館にあつたに相違ない。當時の世界に存在せし、植物學化學の智識は些細、不充ながら屢々其所に見出された。而して之が所有者は自然、此種の智識が援助を與へ得る奉仕に貧者のみならず、城廓又は宮廷の需求する所となつた。ウイリアム・ゼコンクエロルは人の記憶する如く、ノルマンの修道院に於てすとぞ、其主なる醫師は監督及院長であつた。モールの修道院長、ゴアベルは、特に醫師として上流の間に名聲あり寵聖があつた。援助は常に報酬を爲し得る者に限らなかつた。聖アントニーの火と知られし悪性の丹毒が第十一、二世紀に佛蘭西の各地に蔓延せし時、又恐ろしき癩病が、——幾分は輸入に係れど、確

に其憐れな生計其清潔の缺乏、其絶えず寒濕に暴露するにより助長しめた——烈しき流行を來たした。時に修道院の多數は其任に當り、好結果を得た。病院及び避難所が癩病者の爲に設けられた。而してレッキエー氏の言へる如く「僧徒は彼等に仕へんとて夥しく群集した」ネアンデルが引用したる、ドミニック派の。僧の一世紀後に記せし所は、廣く前代に適用し難しとするも事實的の記録にして斯う言つた。「傳染の危険、病者の短氣と忘恩との故に彼等に事ふるは最も厭やな努力の一つであつた。彼等と共に生活するを辭せざる者は、數千人の中でほんの少數であつた。何となれば人と共に自然其者が顔を背けたれば。若し神の爲の故に、自然の背反を征服した人々がなかつたら、彼等は人類の祐助から全然剝奪せられたであらう」と。男子と同じく婦人も亦此奉仕に加はつた而して高貴に生れ優雅に生ひ立ちし婦人が、宗教的熱心の不拔な精神に於て、其厭はしく恐ろしき腐爛を巻き、又其力無き鎮痛劑を彼等に貼附した。

瘋癲の治療及び其保護の爲の、基督教國最初の設立が、彼等から發したことは亦修道院の永久の榮譽である。殆ど五百年以前紀元一四〇九年に一僧がヴァレンシアに、瘋癲の救濟所を打建てた。西班牙の都市に、同様な設備が續發した。羅馬に於ける最古の同じ救濟所は、同じ刺戟を受けし西班牙人の建設である。瘋癲の慎重な攻究と、其深切な待遇の成功とで不朽の名聲あるピネルは、僧徒の斯業に尊とさ貢を拂つた。瘋癲は、中世紀に於ては惡鬼に憑かれたものか、將た神の直接審判と見做され

しが故に、殊更に注目すべきである。

僧徒は亦折々、刑徒を救助改心せしめた。ベルナルドに其一例がある。或時シャンパーニエ伯を訪づる、途にて處刑の途に在る名高き盜賊に會つた。彼は牽かれ行く強索を奪ひ取りて之を伯の許に伴ふた。伯は斯る曲者を容赦するは、多くの生命を危ふするものなりとて、斷然拒絶した、ベルナルドは簡單な即死の刑に代へて數年間、日々十字架の訓練の下に置くべしと約束した。然るに外袍と頭巾とを脱ぎて盜賊に着せ、狼から小羊、盜賊から回心者を作りて、クレールヴォアを伴ふた。此人の奉仕の忠實は、コンスタンスチウスと與へられし其名にも背かず、三十有餘年を修道院に送りて遂に身と魂との二重の死から横領するを許せし神の許に移住した。斯る實例は普通のことではない。言ふ迄もなくベルナルドの精神が、他人の及び難き救済と改革との力を彼に與へた。然れど此顯著なる一例は、彼の如き人々が修道院を絶望の魂の復活所となし得べかりしかを證する。修道院教會が有したる罪人避難所の權に關する、ハラム氏の批評は誰人も同意するのであらう。適當な司法制度の下には、此特權も有害であつたであらう。中世紀の掠奪混亂の中には、有罪には特赦たるが如く、無辜には屢々楯であつた。吾等は當時横行したる暴虐を省みて、弱者、被虐者が庇護を見出し得たりし沙漠の綠地が此所に存在すべかりしを遺憾とすることは出来ぬ」と。

經典を諸國民に分附し福音を野蠻の民に傳へたる宣教の事業が、其中心を主として修道院に有した

りし事が亦記憶せられねばならぬ。第六世紀末に、基督教が英蘭のサクソンに齎らされたのは、院長アウグスチンの指導せしベネチクト派の僧徒によれるものである。制度の土臺が此所に据えられて、今日、世界英國民の貴重遺産たる高貴なる精神的生活に最初の刺戟が與へられた。伊太利譯福音書の二冊の大文字古寫本、其一是オウクスフォードのボドレイアン圖書館に、亦一はケンブリヂのホルプスクリスチ、カレッジの圖書館に保存せられて、アウグスチンがグレゴリーから此地に齎らせし、寫本其者たるべしと信せらるゝ、其二冊の古寫本は、大英帝國の政治的倫理的文明の基本である現世紀を下れば、宣教の事業は更に廣く行はれた。イオナのコルムバはビクト人に宣傳し、リンヂスファルヌのエーダンが英蘭の北部全體に福音を傳へ、ポニフェスは日耳曼に傳へた。ポニフェスの受洗數は、二十年間に十萬人を算すと傳へらるる。遂に異教徒の暴行に會ひて福音書の寫本を枕して死んだ。アンシャルは丁抹及び瑞典に、聖ガルは瑞西に傳へた。福音の宣傳はケルト、チュートン、スカンジナヴィアの間にのみではない。後にはフランシス派の修道院から、亞弗利加、西班牙、シリア地方のモハメッド教徒に宣教師が送られた。彼等は使命の爲の故に様々の危難と苛責と死とを冒した。又ネストリア派の神學校からはタートルを経て支那に及んだ。

當に外國傳道のみではなかつた。彼等の近隣及其の國土、教理と教訓と神的約束とを宣傳した。ブレモンストラントの僧團が、紀元一一二一年に、ブレモントルのノルベルに建設せられ、一千の修道

院と五百の尼院とを有するに至りし此僧團は、説教及魂の救療を修道院的本務に結合するの目的を以て特に設立された。又修道院を有せず、行き廻りて教を施したるメンチカント僧團は、數十年間基督敎國に於ける爲善の一大勢力であつた。ウイクリフすら、其進歩的敎理が、彼等の所説と衝突を來さざる前は彼等を善しと見て居つた。

中世紀修道院事業の爾餘の細目を擧げて諸君の注意を倦ましめてはならぬ。我目的は、之を充分に叙述するに在るのではなく、當時の修道院生活がベルナード及び同氣風の人々、又多數の匹夫の心をも惹くに足りし事實を幾分表示せんと欲するのである。但だ古への修道院に對する今の概念が、屢々曖昧奇怪にして、ベルナードの如き人を之と聯想するを難しとするが故に長時間を之に費したのである。然れば修道院生活は懶惰の一つにあらざりしことが記憶せらるるを要する。事實は之に反して僧徒は一規則の服従者である。其規則はギゾーの如き慎重、確實な新敎徒すら、世に行はるゝ法律、習慣の何れにも勝りて、生活を慈悲深く節制ならしめたと言ひ。又「彼等はは一權威に統治せられ、而も普通社會に見らるゝよりも、遙に辨へて之を服膺し、遙に自由な有様にて之を實行した」と言ひし一規則である。強き個人的愛着が屢々僧徒間に生じた。例へばアンセルムのオスベルンに於けるが如く出來得べくんば死後彼に現はれんとを懇願し亦事實之を見たと思つた。彼は友人等に書き送つてオスベルンの魂は彼自身の如くなりしこと、又彼等若しアンセルムを愛せば、其友をも忘れてはならぬと

言つた。又例へばアデルマンのベレンガルに於る如く。年數と敎理の不同とは之を斷たしむることが出來なかつた。幼少の頃、彼等の師と共に夕暮の庭園を逍遙し、師より天の國を聞きたりし當時の愉快な會話を矢張り回想した。事實上の民主政體が修道院に存在した。其所では僧徒全體が、後に服従を拂ふべき院長を選擧した。其所には此世の階級の差別が全く消滅した。貴族と臣下とが相共に勞作し、伯爵と農夫とが袂を連ぬる。是は關係に富む一事實であつた。斯る基督敎的社會主義は總ての歴史に關係する。人々が神の前に平等たる以上、幾何時の後、法律の面に其平等が保全せらるべきは異むに足らぬ大憲章と其が自由の擁護に、大監督ステフエン、ラングトンを證人に有することすらも異しむに足らぬ。

僧侶が病に罹れば、其慰藉の爲に特別の設備が致された。例へばインガルフスのクロイランドに關する記事に見る如く、別けても老身とあれば、病院に一室を充てがはれ、一僕之に侍し、一人の同伴が日々指定せられた。心に任せて出入することが出來た。修道院内の不快な事は其前に語られてはならぬ。而して「何事も彼を煩はすなく。唯完き平和と平靜な心に於て其死を待つべし」といふのが原則であつた。

狂暴な時代に於て、人々は切つて切られぬ愛情もて己が修道院を愛し、熱心之を慕ふて之と離るゝを極めて喜ばざりしは毫も異しむに足らぬ。例令ば年若き一人の新人者のクレールッオーから認めし

所の書簡は其の熱心の溢るゝを見る。所在地に關しては、其は縦令谷地に位すとも、其土臺はヤコブの住家に勝りて主を愛し給ふ聖き山の上の在る。榮光の事物が其に就て物語られる。何となれば榮光の不思議の神が其中に榮光の不思議を行へば。其所には久しい狂氣も本心に立返り、而して外なる人は滅ぶとも内なる人は新たにせらる。其所には高慢は卑くせられ、富めるは貧しき者となる。其所には貧しき者は福音を聞き、罪の暗黒は光明に變ずる。此家に祝福せられし多くの貧者が地の涯より來り、種々の地方種々の國民から集まり來る。然れど皆一の靈と一の心とを有する。彼等はクレールヴォーにヤコブの階子を見出した。天の使等其上に在り、或者は下りつゝ、彼等が道すがら沮喪せざらん爲に身體の爲に供へ、或者は上りつゝ、其身體すら共に榮光化せしめんとて彼等の魂を導く、幸福生活の是等貧者に、日毎深き注意を拂へば拂ふ程、彼等が萬事基督に倣ひ、神の眞の僕たるを表はすと信するに至る。彼等を日々の奉仕に於て注目し、夜半前より曉に至る夜毎の徹夜に於て、然ばかり尊とげに厭かず歌うたふを見れば、彼等は人間より以上にして天使より稍劣れるが如くに見ゆる。彼等の或者は監督であつた。或者は伯爵であつた。品性に於て智識に於て卓絶せる人々であつた。或者は歴々の青年であつた。然れど神の恩寵によりて、今は外貌の歡迎が廢滅したれば、世に在りて自ら高しと考へた丈、群中の最小者よりも小さしと爲し、萬事に其身を卑ふする。花園に於ては鋤を手にし。草地に於ては、杖及び熊手、田圃に於ては鎌、森林に於ては斧、他の勞作場にては他 器具を

手にする彼等を見る。彼等が往時の身分を記憶して、其の現在の地位、作業、器具、其の粗服を注意せば、縦令外見は、無言の魯鈍に過ぎずとも、我心の正確正直なる判断は、彼等の生命が基督と共に天に藏されたるを保證する」と。此長き書簡が次の言もて結はれた。「おぼらば、神の御旨により、昇天の次の日曜に、我は我僧職の甲冑を着くべし」と。

ベルナード自身に自己の修道院を離るゝは何時か甚だしき悲嘆であつた。危急存亡の公事の際のみ引離された。他出中は懸念の情と熱望とをもて之を思ひ、如何なる榮譽賞讃の場からも、之に歸るを無上の歡喜とした。彼には『至愛のエルサレム』であつた。ミランの如き都市が彼を大監督にせんと犇めきし後に、又剛愎なる諸侯が彼の前に頭を擡ぐる能はざりし後に、又樞機員が法王に於ける彼の權力が其右に出づるを憎みし後に、又奇績が引續いて、彼の勝利の足跡に附添ふと見えし彼に、――彼は僧徒に日々の説教をなさんが爲め晝食を備へ、食皿 器物の洗滌に携はらんが爲め、家禽を世話し、豚を數へ、己が靴に脂を塗らんが爲め歸り來つた。クレールヴォーから分院を派出するに際し彼の遭遇したる最大の困難は、僧徒が之を離るゝを嫌厭せし點であつた。遙かに豊饒なる谷地、遙かに快和なる天候から、彼等は頻りに立歸らんことを欲した。彼の嚴しき書簡の一は、伊太利から可憐な一人の門生へ送りしものである。其門生は、イグニの修道院の院長として遣はされしに、クレールヴォーを懐ふの餘り、其榮譽、信任の場所を抛棄したのであつた。曰く『全能の神我を恕せ、汝が爲

さんとする此事は何ぞや。然ばかりの善に賦與せられし人にして、此大なる過失に突進すべしとは誰か信ぜん、善き樹が斯くばかり厭ふべき果を結ぶとは如何にぞや」と。其職に立戻らんことを十字架に釘けられし彼によりて、懇願し、其心既に充分の悲みを有する者に、此上悲みを増さしめざらんとを求めた。流竄の感に堪へざりしは管に叱責を蒙りしヒュムブルのみでない。此美はしの谷に曾て僧たりしイウゼニウス三世も、羅馬なる法王の義務と顯職とを引受けんと涙乍らに出發した。

然ばかり有用又至愛の修道院が、數に於ても名聲に於ても絶えず増大せしは當然であつた。熱心な志願者が各地より群集し來り、一時に一百人を見るに至つた、大規模の再築が必要となつた。之が實行の建議にはベルナアドは久しく躊躇した、然れど遂に其議を容れた、忽ち其成就を見るに至つた。

任意寄附がシャンパーニュ伯、四隣の監督、著名の人々、商人よりも夥たしく集つた。僧徒は欣喜雀躍、木材を伐り、石を採り、削りては石壁を疊み、流を分ちては小流を引いた。竣工の曉は史家の言ふが如く「家は建ち、生動の魂を有したるが如き、新生の會堂が忽ち完成した」。壯麗の光景は現出した。修道院の大建築物と其附屬建築物が、豊饒多様の田園美を見渡し、武器以上の大なる權威に擁護せらる。其中に生を托する者には神聖なる愉快と、平和なる家庭とであつた。數多の分院が此所より生じ、ベルナアドの一代に一百六十に達した。昔ながらの水松樹と驚嘆すべき敷地とが、今に旅客の魂を奪ふ英蘭のヨークシャーニアなる所謂「ファオンテン修道院」は其分院の一であつた、其場

所の泉水の故ならでベルナアド誕生地の記念に、寧ろ「ファオンテーヌ修道院」と命名せらるべしとは無益の説でない。佛蘭西以外、西班牙、和蘭、愛蘭、日耳曼、サクソニー、匈牙利、瑞典、丁抹の諸國に及んだ。斯くクレールヴォアに關係を有しシートの規則を採用せし修道院が最後に八百に達したと傳へらる。同系の設立が斯くばかり迅速の増加を來せし其偉大なる刺戟はベルナアドから發せしものにして、彼自身は修道院は、彼が逝去の日に七百の僧徒を其中に有した。

彼は誰人にも勝りて修道院生活の多産なる例を示し、又附帶する危険に打勝つた。怠慢と肉慾とによりて往々其規則は破らる、彼は此誘惑に陥りしと考ふることをすら出來ぬ。日光の紅斑點を考ふるは寧ろ容易すい。賢者の常に戒慎を要する微細な危険ですら、彼に馴れたとは見えぬ。斯る危険の夥しき存在は吾等の熟知する所、個人の卓越を望む野心は兵士政治家と等しく僧徒の陥り易き所にして。大儒學派的精神の傲慢は退隱生活の往々助長する所であつた。狂妄なる熱心と、陰鬱なる懷疑と順次に相交替して精神を興奮又束縛する。而して絶望は制限に對する心的反動、自然の結果として來り又過重哀想の自然の結果として來つた。無實の神聖を矯飾する偽善の危険が存した。修道院は之に危険な獎勵を與へた。嫉妬、猜疑、怨恨、往々にして、猛烈極端なる憎惡が、修道院の地盤には決して驅除せられず、却て幽閉、無彈力の團體に同接するが故に、其生長は一層甚しかつた。

箴言第十八章一節「自己を人と異にする者はその欲するところのみを求めてすべての善き考察

にもとる』の語は第十二世紀にも同じく眞理であつた。長い修道院物語を學ぶ者は、其中に出現せし各種の不信と精神的疾病とを慎重に分析すれば屢々非難の焦點たりし肉慾の不潔よりも悲しむべきものがある。シストルス僧團に親みある院長ジョアキムが言つた如く、僧侶にして一朝邪惡に陥れば、地上是程、野心又貪婪なるはない、其職掌と其生活との對照が名聲を汚せしのみならず、其最初の志願が高度なる故に一層の深淵に沈む、此故に自由廣濶な外部生活に見出さるべかりし更新の新勢力にして彼等に作用し得べきものはなかつた、殆ど贖罪の柵外に耳を置いた、實に中央寺院の蛇腹、大斗、樋嘴に刻まれし肖像は、僧帽の下に匿されし精神及生活の惡むべき不徳に對する同代の技術的認識を表示する、彼自身僧侶たりし、フラ・アンゼリコが僧徒を墮落者の中に畫き、デンテが地獄の卷の怖ろしさパノラマの中に彼等の或者を置きしは理由なきことではない。

然れど此等の危険、其最も微妙なるものからすらもベルナードを免れしめたるは、其誠實熱心な魂に於る神の恩寵と、倦むとなき聖書の研究と、院の内外に絶えず彼を煩はせし許多の活動とに由來する。彼の美德は、『永續せざる隱遁的美徳、其は運動せず呼吸せず。其は敵手に突撃合戦せず、却て不滅の花冠を競ふべき競走(埃と熱との無きにあらざる)より鼠竄する美徳』と、ミルトンの非難せし者ではなかつた。内に在れば日常の勞作に携はる外に毎日説教をした。彼は又數多の論文を草した。其は省察の産物と、美にして力ある章句と、精神的思索とに富むものであつた。彼は又絶えず書簡を

記した。其範圍は廣く其種類は多様にして屢々重大な事件に關した。五百通の書簡が保存せらるる、等は有ゆる階級、事情の人々に宛てられ、眞理、義務、義務、基督者經驗の高尙な題目より家事、理財の細目に至る迄有ゆる種類の題目に關する。彼は諸侯よりも貧者賤夫に對して、詳に書送つた。英王に送りたるは僅に十二行にして、彼の忠言を要する或窮行僧には之に十倍した。彼の來訪者は多數あつた、而も當時の錚々たる人々であつた。附屬修道院の配慮は息む時が無かつた。教會及び國家の危機相繼いで彼の全力要求し傾注せしめた。佛蘭西又は他の關係諸國に於て彼の終りの三十年間宗教の體面利害に關して起りし者に、一として彼の個人的注意を蒙らざるは無く、而も彼の統治的實際的天才は之に處して綽々餘裕を存した。

其母によりて獻せられ、燃ゆるが如く熱心なる青年の、聖別獻身したる修道院生活が、終り迄も歡喜たり褒賞たりは以上の如くであつた。彼と其同志とが森林沼澤より贖ひて教化と平和の家庭、貧者に對する款待の家庭、嚴肅なれど受すべき宗教的奉仕の家庭、曾て亂されたることのみならず家庭となしたる美はしき谷に於ける彼の日も終を告ぐることを許された。地に於て耳にせし最後の音は、彼の愛育教導したる人々が、日々を禮拜を續け乍らも、彼の死を哀哭する聲であつた、彼の目が悲しむ最後の顔は、彼が保護指導祝福せし人々の顔であつた。此世の名聲に就て彼が微塵だに考へたとは臆測されない。舊ドーフィネなるシャルトルスに於て、僧侶の歿後、其上に建てられし唯一の記念

物は、忽ち風雨に壞らるべき、孱弱な木片の十字架であることは旅客の注目する所である。此習俗の含意は、人の唯一の關係は此後靈の世界にして、何等の記録が人の間に遺るの要なしとしたるや明かである、言ふ迄も無く其はベルナアドの心であつた。人々が彼を聞知するとせざるとは、彼には無關係の事であらねばならぬ。彼の唯一の願は主の言ひし如く「爾が我に與へたりし業は我之を成せりと、悔改者の謙遜もて言ひ得ることであつた。

然れど雷名は忽ち傳播し、世は過ぎ去れど其名は未だ曾て落ちず未だ曾て忘れられぬ。彼は時代の最高精神を代表してクーザンが試みたる大人の描寫を成就した。同時に彼の個人性の特有を深く其と結合した。彼が直接の記念物たるクレールゾオの修道院は最早存在しない、數多の分院は概して零落衰頽した。彼が歐羅巴に與へし大なる感化は我等文明の由て來りし混合成分の一としての外は見分けられなくなつた。然れど間も無く聖列に加へられし彼の名は、常に星の如く史上に輝やいた。獻身的聖別の氣風と、高尚なる諸勢力の結合に無我の愛を注ぎし品性とが尊敬を失はざる限り、今後も其高度から落ち、其光輝を失ふことはあるまい。

然れど死期方に近づき、望みもて照らされ、昇天の光輝もて擊貫かれし大なる陰翳が、彼の顔の上落ちし時に、何等此の如き者が彼の思想にありしとは思はれない。彼は敬虔、謙遜、信頼、希望、忠信なる信者として地に思ひ残すこともなく天を望みつゝ、生存したる如く死に就いた。彼は此の殺伐なる時代にあつて修道院生活に屬し、聖なる默想、孜孜たる自己訓練、慈惠の勞作、多大多様の仁慈的活動を、受領、追求するやう、其聖靈もて動かし、其攝理もて導づき、母のインスピレーションもて彼を壓迫せし神に對し、今迄に勝つて感謝を捧げたに相違なからう。

第五章

神學者としてのベルナード

ベルナードの神學は、ベルナードには死活の關係があつた。其宗教思想は彼には鼓吹の力であつた。今日より見れば我等の不案内な舊思想界に住居して、彼等とは遙かに隔絶するの觀がある。然れど大人物の起居せし家は、彼等自ら棲息するを欲せずとも常に之を見んことを欲する。ベルナードの如き人に高貴又神聖なりし思索的思想の系統が、彼等の尊敬を博せざることはない。觀念を造營して系統となすの建築術は、木材や石を家屋に變ずる建築術よりも更に偉大にして記憶すべきものである。斯る系統に固著する個人的愛著又其系統より生ずる感化は、物質的構造に屬する事よりも親密又至要である。而して其系統が大刺戟を鼓舞し、大品性を養成し、大効果の器械たりしとせば、出來得べくんば其勢力の秘密を學び、其中に安棲せし人の上に其が有したる魔力の積極的印象を得べき筈である。然ればベルナードの心意に至高の地位を占めて神學思想の立派な行廊に、暫し我と共に逍遙することを求むるに躊躇しない其人とその事業と二つ乍ら期くして更に理解せらるゝに相違ない。彼を「教父等の最終」と承認し、聖徒の籍に登録せし其羅馬教會の勢力を明瞭に了解することも不可能でない。

彼が公けの行動を取りし時代は、智的停滯の時代にして、思想は死し論辯すら世に稀なりしとの舊思想が、發程に於て我等の心から放逐せらるゝを要する。事實は之に反して論辯は活潑廣濶又割合に自由であつた、而して後世に充分表明せらるべき大神學的又哲學的風潮の胚胎若くは發芽が既に明瞭であつた。一百七十七人の著名な記者が第九世紀に屬すと算せられ、第十世紀には僅に八十四、第十一世紀には一百五十、ベルナードの第十二世紀には二百五十九人と號せらるゝは、前世紀に比して當時歐羅巴の思想活動を見るべき正直な尺度である。勿論重要な事件の論辯は拉丁語で行はれた、其は法律又は公文書の言語であり其は教會の役名、教養ある人士間の書簡、會話等に使用せられて慣染となりし言語である。論辯の形式は此故に學者風であつた。而して一般人民は、教會の教理と全然意見を異にし、其禮拜式を厭ひ自國語の自由に復せざる限り、彼等の思想を言ひ顯はす言語がなかつた。ロマンス語の初めの文字を示すべき重要な記念物の一として、アルピゼンセスの文書がある、勿論活字の發明が言語に翼を與へ、思想家の思想に發言の道を開き其三世紀以前の時代に於ては、斯る論辯に重要な部分を演ぜし教育ある人士の數は常に有限であつた。

第九世紀の初より第十五世紀の終に介在する時代は、西方教會に於ては殊に神學的教理の分明な發育と系統的分類の時代であつた。最早東方教會から有力な影響を受くることはなかつた。其自身で教理を組織するに任せられた。而して自然界の穿鑿に、刺戟と鍵との無さが故に、時代の心理的・道徳的

活動は、過分に此方面へ向つた。トレントの會議以來論辯の餘地を有せざるに至りし數多の諸問題も、其時代に於ては未だ羅馬教會の教義的裁定を受けなかつた。例令ば化體説の教理が、紀元一二一五年のラテラン會議迄は一定しなかつた。紀元一三二一年のヴンヌ大會迄は、此教理が未だ禮拜式の形體を取らず彌撒の獻祭が未だ儀式の中心とならなかつた。教會の聖禮典の數は本來七つなりとは、第十二世紀の中葉か其後に、バムベルグのオットーが初めて提起したる所と稱せらる、又聖母マリアに對する尊敬の度が、絶えず増加したれど、原罪の汚點無き聖母懐胎の教理は、當時熱心に抵抗せられた。實に法王の判斷も教會會議の判斷も、重要問題に關しては、後世の論辯、別種の決議を受けざるべからずと主張せられた。リンコルンの英國監督ロベルトグロステートが、紀元一二五〇年ベルナアドより後、一世紀に、リオンなる法王廳の前に説教して、若し法王が基督の訓言と意志とに反する所を爲すの心を起さば、彼に従ふ者は基督と其體とから離るべく、世界的服従が拂はるれば世界的背教が到來するであらうと公言した。法王は斯る大膽な言語を憤り、其監督を罷免し處罰せんと欲したれど出來なかつた。同様にパリ大學の神學博士、サン、アルムールのウイリアムが紀元一二五五年メンヂカント僧團に反對の筆を執りて、彼等の生活法は福音と相違するものなるに誤りて教會は是認したれど眞理は既に明かにして且つ羅馬教會の判斷は過誤にあらざれば、斯る判斷は取消さるべしと言ふを憚らなかつた、其書は法王の譴責する所となり、職を罷めてブルグンデーに退引するの已む無きに至

つた然れど法王の後繼者と和解し教會非無過誤の大膽なる宣言が、毫も公憤を惹き起すことはなかつた。近世紀よりも其頃の羅馬教會には、神學の廣き戰場が開かれてあつた。

夙に九世紀の後半にすら、根本的問題に關して、教會の教理を精査改造する革命的活動が、或部分に出現した。チャーレス禿頭の宮廷に於けるジョン、スコッス、エリゼナは其卓越な實例である。其天才の大膽と階級とに於て時流に超越し、事實の確證なくば信じ難き程の大膽な結論を敢てした。希臘語の大家として、希臘及拉丁教父等の文書に通じ、オリゲン及僞デオニシウスの研究に感動し、後者の名を負へる文書を翻譯した、彼の哲學的傾向は新プラトニ派にして縱令人格的神及び聖書の信仰に制限せられたりとは言へ、實質上汎神的一組織を作出した。宗教は人の理性に辨明せねばならぬ事と、教權は之を支持するに本來不充なる事とを主張した。宗教智識の窮極の源は人の合理的意識にあるとした。彼の見解によれば、絶對者は總ての表現に超越し、本性理解すべからざる者である。聖書の神の解説は、人類の薄弱に適應したる象徴的表現である。宗教は傳説の衣を着けし哲學である。神は愛し又は愛さるべし。働き又働かるべしとの言は、相對的に眞にして、人類の薄弱に對する垂顧である。神のみは無限又不可表現である。萬物の眞の實在は神である。惡は是故に假現である。善の光輝が顯出する背景である。其概念は全體に代へたる個々の思想から生ずる、所謂罪とは人類の經驗に於ける移動點である。之を通じて人は神的原型と最後の合一に達する。其は自己革除の理法にして神

には決して存在しない。神は之を罰せざれど自ら罰するやうに物の秩序を構成した。刑罰に關する聖書の報導は形容にして斯る刑罰の信仰は人の僻見である。信仰は或主觀的理法にして之に由り絶對者の確信が合理的生物に傳來する。救は本來萬物の本源に關して合理的に確定し得る所を信じ、又信する所を理解するに存する『父』及び『子』は之に相應する何等の區別が神の本體に存在せざる名である。聖晚餐は基督の死の象徴的記念である、法王無過誤の思想は毫末も有たなかつた。

斯の如き教理が九世紀の後半、教政の面前に佛蘭西にて明言せられしは驚くべきである然れども是等は其珍奇なるが故と、有司は其意味を認識せず、其風潮が教會組織に有害なるを認識せざりし故とにて庇護せられた。若し著者がゲール語若くはコプト語にて記せしならば、大聖諸教會は之を理會したであらう。其は時代の理解に超越し全然思想の區域外に居つた。而して反對者の出現により、彼の述作は後日法王の咎めを受けたりしとはいへ彼自身は平安の日を送り安然に逝去したと見ゆる。然れども溶解改鑄の勢力としての神學説を奉ずる合理的スコラ哲學が豫言的に彼に現はれた。次世紀が世界的動亂、衰微の時代でなかつたならば同じ思想系統の門生後繼者が有つたであらう、アルマリク又はダヴィド、オブ、チナントの如きに幾分之を有した。然れど歴史の徐々たる發展に於て、彼のみ其時代に卓立する。實に謎の如き人である、突然空に顯は、流星の如く出現した、凍雲の間を漏る、日光が夏の來るを保證するが如く、彼は數世紀間の社會的風雪の後に再び歐羅巴に見らるべかりし自由思想の

報導者、猛烈果敢な思索的天才である。彼の結果は蓋し誰人も受取るまい。彼の廣大、大膽な心的活動は尊敬せざるを得ない。

フルダにて學びし一僧侶ゴットシャークが、善惡二様の豫定に關し同世紀に持出せし議論は、エリゼナが之に携はりしとはいへ、其範圍は更に狭小にして、又心意及推理力の光輝も更に少なかつた。然れど少くとも發頭者たる彼と之が繼續者に於て如何に活潑な思想が重要な方面に向ひしかを見るべく、又如何に神の統治の公平に關する諸問題、時代の心意が動搖したりしかを見るべきである。

前に言及せしベレンガル、オブ、ツールを其巨魁とする、聖餐の成分に於て基督の實際出現する論争からも亦右の如き状態は觀取せらる。其生國の一都會の中央寺院學校長として、彼は多くの生徒を牽引し、其多方面なる學問、其濃厚、敬虔、然も其懇懇なる態度、其心的獨立の精神が彼等に大なる勢力を得た。彼は十一世紀の中葉頃、聖餐が基督の眞の體と血とにあらずして、唯其符號に過ぎざること を教へ始めた、若し異説が異端ならばエリゼナのみならず此説の抱懷者アウガステン、ゼローム、アムブロウスの徒も亦異端でなければならぬと主張した。法王及び會議の反對決議に壓迫せられ、且つ身命の危ふからんを恐れて一旦其説を取消したれど而後再び所説を公言し、且つ教會有司に對して言論の自由を振舞ひレオ九世は此事に於て、愚者たるを證すとなし、羅馬教會は使徒の座位にあらずして惡魔の座位であると斷言した。眞の教會を組成する者は、少數ながら眞理を持つる弟子にして多數

の短見者にあらずと断言した。グレゴリー七世は、樞機院或は法王として、彼に個人的好意を寄せたりしが如くである、されど羅馬の大會の終審後彼は孤獨生活に退隱し、ベルナアドの生るゝ三年前高齡にて歿した。

彼は教會輿論の潮流に反對して首尾よく成功することは出来なかつた。彼は又善き戰に戰ひし如くなれどエリゼナの天才、又はゴットシャークの不敵な膽力を有たなかつた。化體説は「論理學に變せし修辭學のみ」と曾てジョン、セルデンは記した。然れど之よりも深き基礎を有する、其は聖餐物と超自然的恩寵とを聯想して遂に化體に想及するに至りし敬虔の情に由來する、其は全く超絶的觀念を聖餐の性質に提供した。又之を受くる人々の心に續々數多の奇蹟を再現した。然れば優さしき敬神の情を之に牽き寄せしのみならず超自然の思想に親しめる人々の想像的愛情と熱心とをも引寄せた。此故に紀元八三一年の頃漸く一修道院長バスカシウス、ラドベルツスの始めて公にせし所なれど、時代の感情と一致し、基督者の渴望心と混合した。而して遂に信仰の教義となるに至る迄の勢力を得た。然れどベレンガルが如何ばかり其持説を成就し得たりしかは此に論ずる限でない。吾等の此に注目せんとする所は、彼の如く然ばかり自由に考へもし書きもしたる事實と、ベルナアド以前の時代に於て、靈的教會の概念が制然表現せられ、聖禮典に關する改革新教の教理が實質に於て維持せられし事實は是である。其事自身が當時心的沈滞の時代にあらざりし事を證するに足りる。寧ろベレンガル以

上に舊説との離背に向つて人々を驅逐したる其醜陋力を見るに足りる。日耳曼皇帝フレデリク二世の不信は前に述べたことがある、ネアンデルの言によれば、ツァンン伯も亦外形的には教會の祝祭を承認したれど、基督教の全組織を嘲笑、攻撃し屢々猶太人より傳來の論證を用ひた。之に對して一修道院長は書を著して受肉降誕の教理を辯護した。又復活を断然信せざる者もあつた。紀元一一九六年バリの一監督は、己が屍體を見ん人々の證明として、復活の信仰を主張するの紙牌を死後其胸に着けしめた。十一世紀には、オルレ안의神學校に於て、眞のノスチック説が教へらるゝに至つた。德行、智識、敬虔に秀でたる教職等が、此説の爲に勇氣をもて死を遂げた。

類似の教理が後にリエージー及びカンブレーに出現した。後チフランにも出現した。其所では神の子に人の魂の啓發更新せられしものと断言せられ、聖靈は聖書の眞の理解を意味すとせられ、主の福音史は神話として遇せられた、教會の教理を排斥せざる迄も遠く之と離背したるカタリナ黨、ヘンリク黨ベトロプルス黨の如き、佛蘭西に多數なりしのみならず、南方に迅速なる増加を來たした。然れば、ベルナアドが其地方に往きては、「人民無き教會、祭司なき人民、尊敬の拂はるゝ無き祭司、基督無き基督者、教會は猶太人の會堂の如く神の聖所は神聖視せられず、嚴肅なる祝祭は守られず。人々は其罪に死し、悔改によりても神と調和し難く爲つた、聖禮典によりても身を固め難き最後の大法庭に召されつゝありし」を見出した。是は凶難若くば戰爭よりも恐るべは靈的禍患と彼に見えたのも

無理ではない。

彼の時代が在來の信仰に於て受動的沈黙若くは世界的沈滞の時代を去ること如何に遠かりしかを示さんが爲め、此上實例を増加するの必要はない。不安の精神は世に遍漫した。學者風の人士間には、名目論者ロセラン及び今後述ぶべきアペラールの輩によりて發揮せられし自由なる討究の氣風が隆盛に趨いた。前教會組織の仇敵なる此等の風潮に對して、古來の信仰を懷きし人々の側に於ては、研究に思想に行動に、斬新廣濶な活動の陣が張られた。グレゴリー七世の時代から拉丁教會を通じて觸知せられし教會生命の脈搏が、會堂及修道院の建築、十字軍の開始、異教徒傳道に顯はれたが如く、此所にも顯はれた。教會の腦髓併に心情は新勢力もて彈丸を込められた。將來の激烈なる論争の要素は既に興奮せる空氣中に戰はれた。フルダ、シヤルトル、ツール、ランス、ベック其他の神學校が復興した。聖書講解の講演が授けられた。當時の通俗的註解要覽たるグロツサ、オルヂナリアが治く謄寫せられた。比較的自由と寛裕とを以て聞こえし愛蘭の諸學校は依然活潑であつた。而して到る所教理の問題が熱心に點檢せられ論議せられた。

大學の基礎は此時外に始まつた、ケンブリジの大學はクロイランドの修道院長が紀元一一一〇年に納屋の中にて開始せし者である。オツクスフォードの大學は、稍遑つて宗教學校内に始めたものである。英國に生れ佛國に學び後に著名な神學者又樞機員となりしロベルトピアレーンが、此所に聖書を

を教授せしより殊更重要視せらるゝに至つた。パリ大學の最初の刺戟は、同じ時代にウイリアム、オブ、シヤンポールの名高い講演に由來する、紀元一一〇九年に世を去りしアンセルム、ペルナアドと同時代のビーター、ロムバール、後に、「第二のアウガスチン」と呼ばれしユーゴ、オブ、サン、ヴェイクトアル、少し後れてはジョン、オブ、サリスベリの輩は、教理的研究に其勢力と手腕、敬神の感情を遺憾なく發揮した。次世紀に於ては「天使的碩學」トマス、アキナス及び「六翼天使的碩學」ボナヴェンチュラが之を繼承して赫灼の頂點に達せしめた。彼等はペルナアド時代に豫表的勢力もて既に動作したる靈的勢力の産物であつた。

斯る人々の間にペルナアドを排置するに際し彼に對する權衡上、判然心に留むべき事共がある。第一彼の天才は辨證的と言はんよりは寧ろ感情的又實際的であり、分析に於て堅忍又深遠と言はんよりは寧ろ眞理に對する同情的であり、其眞理は亦神秘的形式的關係の者であつた。女性的熱烈の精神、深奥優美なる道德感情の豊富なる、靈的經驗、是等に伴ふ哲學的勢力は彼に於て比較的分明でなかつた。其第二に記憶すべきは、彼の氣風に相應して、常に最上の實際的、目的を眼中に置いた、即ち神的生活の最高位地に人を導びき自らも進歩したことで。第三は即ち、行政事務に常に執掌せしことである、是は彼の緊要事と見做せし所である、自己の修道院を始めとして、關係修道院の注意、監督の外に、時代の公務に王者の助言に、法王の選舉及即位に、御堂武士團の訓練に、十字軍の鼓吹に心を籠め

て従事した、然れば神學上の諸問題に、穿鑿的、根本的、又餘蘊なき審査を試むるの邊が無かつた。此故にアンセルム若くは後日アキナスに見るが如き形而上學的分析の力と之に對等の哲學とを彼に見出さざるは異ひに足らぬ、要するに彼の生活は時代の最高顯象の中に見えこそすれ必ずしも獨創的、啓蒙的の思索に秀でなかつたとは斷言が出来ぬ。

彼が弱年に學びし教理、其は經驗にて確かめられ聖書にて照られ、又彼の説が營養、安息、昂騰を見出したる教理にして、之を其最善の形式に表現するに於て彼は此方面に於ける事實重要な人物であつた。彼は何等の『最高神學』を遺さなかつた、彼の所信は彼の文書中に散在する、多趣多様の章句から、其述作の順序、年代に拘はらず蒐集して之を思想に組合はせねばならぬ。其は論理的方法にて自ら敷衍せし組織にはあらで幼時の教訓、聖書の愛讀、高尚なる默想により印象せられし者、彼が最上の經驗及希望と不分離的結合をなして、彼が生命の一部と成りし者であつた。假りに聖書の權威が停止せられたりとせよ、彼には眞理の實際的標準は、人の靈を神に接近せしむる力と傾向とに存した如何なる教理も此力なくば彼の心を捕ることは出来ない彼が夙に受けたりし教理は、彼の想像と心情とに解釋せられて此力有りと思惟せしが故に、全力を盡して之を維持し之を愛した。彼は其が強き守舊家であつた。世界の目の前に凡そ其が威嚴を貶し、其が光輝を晦ますの傾向ある一切の愛情より出でたる嫉妬の目を放つた。

『最終の教父』といへる名が彼に與へられたのは實に此意味である。アンセルムは當時の最も深奥なる神學者なれど煩瑣哲學の元祖又巨擘と見做すべきである。彼のペルナアドと同じからざるは、目的と精神とにあらで勢力の比例と權衡とに存する、鋭き理解力に穎敏な良心を結合し彼の其心情は深遠な感情を具備する、彼は地球の如く確實なる而も其實質と關係とに於ては更に宏大なる超絶的神組織の合理的性質を解説せんと欲した。其所に神を發見するは彼の心情の此上なき歡喜であつた。本來困難未熟の路を辿りて、篤實、敬神、教化的思想家の模範として、史上に彼以上の者を見ない。其天才は到底匹敵は出来ないが其敬虔と多想とは渴望し難き者ではない。

ペルナアドにも同じ要素はあれど、敬神の情が討求的構成的理解力の發達よりも優勢であつた。彼は教理に於ても制度同様既設のものを固守し、傳來の儘の基督教組織を心置きなく受理した。其は彼の目には聖書に表示せられしもの、彼が靈性の熱望と得達とに參與するものであつた。彼は感せしが故に信じた。彼は『總ての我源泉は爾にあり』と其を言ふことが出来た。故に疑團も彼を妨げず、合理的に宗教を説明せんとするの盡力すら、蛇足に過ぎずと思つた。彼は是等に對して忍耐もなく同情も無かつた。時代の風潮は彼と同一線上に動かなかつた。之に對して虫が好かぬといふ態度が認められた彼は其精神を鼓舞し摸索し昂騰せしめたる教理の大切なる守舊家として彼は吾人の注意を求むる其は彼の如き人々の間に當時行はれし神學説の代表者として彼の重要を増すに過ぎない、尊敬を減却すべ

しとは思はぬ。

宗教眞理の概念に於て、彼は確乎熱烈な超自然主義者たりしは言ふを俟たない。思想又は神話から基督の福音を作出せりといふは、人が太陽と星とを造りしといふと同じく彼には信じ難きことであつた。佳快又確實に人を引擧ぐる天の勢力が、人の意志又は機智より出でしといふは彼又は人類の巧妙にて日光が編み出されしといふと一般であつた。彼は普通の概念範圍内に、彼自身の美にして高き位置を占めた。乾燥無味の論理的でなく、然りとて哲學的に散漫でなく、彼の温情と想像的光輝とが彼の組織全體に光と色とを投じて、高尚又赫灼ならしめ、吾等の研究を誘致して息む時なからしむ。彼は故意に權威の衣を空想に着せなかつた。然れど信仰の直覺又は斯く見ゆる者も、動もすれば教義として明言せられた。高尚な詩的、靈的概念が自づから上天の裁可に包まるゝ如く見えた。彼は煙霞を發光星と見違ひはしなかつた。然し乍ら眞理の世界は其周圍に色彩、光華に充てる大氣を有した。之を默想するは彼の魂の慰樂であつた。又斯くて眞理は新たに證明せらるゝが如く見えた。若し一成句に言ひ顯はし得べくば、彼は默想的而も實際的神秘家であつた。彼は眞理の奧妙、崇高を理解した其前には言語ハ形式も鈍く、思想其者が本來纖弱である。彼は基督教眞理の玄妙な生命を感じた。其は分析の到底捕捉し難き所、宛ら手にて日光を握むと一般である。而も聖書の研究と、彼の心意を警戒したる不斷の活動と、彼の心情を忠實健全ならしめし基督者の愛、及び人類を祝福せんとの熱望と

か放肆に流るゝこと勿らしめた。以上の如く彼を理解せば彼が大體の位置は明かになつたと思はる。進んで彼が所見の細目を審査するは易々たることである。

聖書を彼が最上位に置きし所たるは言ふ迄も無い。其用語は普通の拉丁譯であつた。聖書記者は神意の教授指導照明する所となり、十二分の權威をもて語れりとの教理は彼の組織全體が上に建築せらるべき前提である。然れど此神靈の照明は、例令聖書記者に於て特に卓越すと雖も彼等にのみ限られしにあらざるとは他に神秘家同様彼の信する所であつた。忠實な信徒の心、別けても召されて大なる信託を受けし人又は立てられた他人の教師たる人の心にも第二流にはあれど眞のインスピレーションが宿ると考へた。超自然的要素は彼の思想に何時も近かつた。眞正の意味に於て彼は其中に生活した。然れば聖書記者が彼に對して權威を有すると共に、魂と教會とに於ける聖靈の證も亦直接の神的事實であつた。彼はアペラールの如く、豫言者の言にも誤謬あり使徒ですら誤謬は免かれぬと言はなかつた。然れど人間以上の昂騰状態は、今も達せらるべしと信じた。此状態に於ては、一度罪にて閉され今は恩寵にて開かれたる默想の目によりて、心意は有限を超越し、直覺的に上天の事實を察知し、神の心と合一する。此故に教會の大嚴父等は彼に對し使徒の權威と殆ど同格の權威を有する。此權威は彼等が議論の数や目方にて定められず、彼等が有したりし神の直覺から來る。此故に教會に行はるゝ普通の拘束的聖書解釋は二重に保證せらるゝものであつた。——一は聖書により、一は信者